

# 忘却少女と異界の獣

k25

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

記憶をなくした少女と異世界から来た白いポケモン。

そんな1人と1匹が旅に出たり仲間を増やしたり戦ったりする話。

※ポケモンと人間のカップリング描写がございます。苦手な方はご注意ください。

# 目次

## シンオウ地方編

1, 喪失あるいは出会い | 1

2, 日常と傷跡 | 7

3, 進む日々と変わらぬもの | 12

4, 賢者と未来への憧憬 | 19

5, 旅立ち | 28

6, 岩の関門 | 32

7, 新たな姿、新たな仲間 | 41

8, 電球付き扇風機 | 52

9, 断裂される記憶 | 61

10, 水と鋼 | 69

11, 美しき砂竜 | 78

12, 四天王―前編 | 86

EX1, 断章―Tell me a bedtime story | 100

13, 四天王―後編 | 104

14, 戦闘! チャンピオンシロナ | 116

Epilogue【シンオウ地方編】 | 126

ジョウト地方【HGSS】編 | 129

壺、邂逅 | 140

式、犯人 | 150

参、悪者 | 160

EX2, 断章―Day of wine and roses | 160

陸、 伍、 肆、  
幽 挑 黃  
靈 戰 金

187 178 169

## シンオウ地方編

### 1, 喪失あるいは出会い

ここはシンオウ地方。

天高くそびえるテンガン山やシンジ湖をはじめとする三つの湖など、

その随所に神話の跡が残る土地。

当然考古学研究においては重要な場所であり、彼女もまた、研究者であった。

「今日はこんなところかしらね…」

彼女はシロナ。

シンオウ地方のチャンピオンであり考古学研究においても名を轟かせる、この地において知らぬものはいないであろう人物である。

彼女は自身の研究のためテンガン山を訪れていた。

「ん？あれ…」

そろそろ日も暮れて、今日は作業も打ち切り帰路に就こうかという時だった。

「人？かしら」

何かを見つけ近寄ってみると少女が倒れていた。

背丈から推測するに、ポケモントレーナーとなるための旅に出たばかり位の年頃だろうか、それより少し幼いか。

何か事故に巻き込まれたり野生のポケモンに襲われ気を失ってしまったのか。

それに、比較的寒冷なこの地域には不自然なほど薄着だ。

やはり何か悪いことに巻き込まれてしまったのだろうか？

近頃はポケモンを使って悪さを働く人間もいる。

「ひとまず放つてはおけないわね。」

呼吸はしているがここに置いて行つては本当に死んでしまうかもしれない。

そう思いシロナは彼女を自宅に連れ帰ることにしたのだった。

目が覚めると知らない場所にいた。

それどころか自分が何をしてたのかさえ思い出せない。

「気が付いたのね」

またしても知らない。

この人は誰だろうか。

「ああ、私はシロナ。」

あなた、テンガン山の中で倒れてたのよ？なにがあったの？」

自分と会話しているこの人物はシロナという名前だということは分かった。

だが相変わらずわからないだらけだ。

テンガン山なんていう言葉は初めて聞いたし自分が何をしてたかなんてこちらが聞きたいくらいだった。

「？」

そういえばあなた名前は？」

「名前…」

私の名前

「フィラン…」

思い出した。私はフィランというらしい。

もう一つ大事なことを思い出した。

「私のボールはどこ？」

「あなたのカバンならそこにあるわ。」

中身は何も触れてない。」

そういうと目の前の彼女、フィランは慌てたように中身を確認した。

そうして一つのボールを大事そうに抱え安堵したような表情をした。

(目覚めたばかりで一目散に気にするなんて、よっぽど自分のポケモンのことを大事に思っているのね。

それにしても、あのボール…見たことのないデザインね…)

「それ、あなたのパートナー？大切なのね。その子が。」

「わからないです。でも、そう、きつと私にとって大切な存在なんだと思います。」

いまいち要領の得ない返答に困惑してしまう。

「わからないってどういうこと？あなたのポケモンじゃないの？」

「わからないんです。自分が何なのか。何をしていたのか。」

わかるのは名前とこの子が大切な存在だっていうことだけ。」

...

...

...

その後いくつか質問を試してみた。

どこから来たのか。両親は何をしているのか。自分のポケモンとはいつ出会ったのか。

答えはすべて「わからない」であった。

(何か、事故に巻き込まれてその衝撃で記憶をなくしている？)

いずれにせよこのままでは対処のしようがないわね。)

「ひとまず今日は休んでいて。食事は後で持ってくるわ。」

明日になったらあなたのことを知っている人がいないか、調べましょう。」

そういつてシロナは彼女を寝かせている部屋を後にした。

翌日、シロナは思いつく限りで彼女の身元を確認できる方法を試した。

ジムリーダー達にファイランという名前の少女を知っているか。リーグ運営に旅に出た子供にファイランという名前の子供はいなかったか。

ファイランという名前の子供の搜索依頼が出ていないか。

この地方を研究の拠点にしているポケモン博士、ナナカマド博士にもファイランという子供を旅に送り出していないか。

念のためということもあり、ポケモンを利用して悪事を働く組織を調査している刑事にもそのような少女に心当たりがないかということ

とも聞いた。

答えはすべてNOであった。

こうなってしまうとお手上げだ。

後は本人が思い出すのを待つしかない。

「何か、わかりましたか？」

フィランがいつの間にか部屋から出てきていたらしい。

「ごめんなさいね。可能な限りあなたのことを調べてみたのだけど…」

「そうですね。でも気にしてないですよ。何も覚えてないので気にならないだけかもしれませんが。」

フィランはあっけらかんとそう言った。案外図太いタイプなのかもしれない。

「そういえば！あなたの名前は教えてもらったけど、その子はまだ紹介してもらってなかったわね！」

あなたのパートナー、私にも紹介してもらえるかしら？」

フィランが大事そうにボールを持っている様子を見て思いついた。

（この子、昨日に比べてだいぶ落ち着いてきてるしもしかしたらこのポケモンが何か手掛かりになるかもしれない。

ま、自己紹介もまともできない子にポケモン紹介してもらうのも変な話だけど。）

「わかりました。でもこの子人に慣れてないみたいで…もしかしたらシロナさんに何かしちゃうかも…」

「大丈夫よ！こう見えても私も私のポケモンたちも腕に自信はあるわ！」

「わかりました…出てきて、フェローチェ」

!!!

シロナは驚きを隠せないでいた。

つい昨日保護したばかりの記憶がない少女。

彼女が連れていたポケモンはまるで見たことがないような存在だった。

白く細長い体躯にすべてを魅了するような雰囲気を放っている。



(こんなポケモン、見たことがない。)

そもそもこれはポケモンなのか??)

初めて邂逅する存在に自然と警戒心を強めてしまったのだろう。

フェローチエ、と呼ばれたポケモンもそれを感じ取ってこちらに敵意を向けているようだ。

「グオオガー！」

シロナのモンスターボールから1体のポケモンが飛び出した。

ガブリアス、チャンピオンシロナの戦いを語るうえで外すことのできない、

彼女の相棒とも呼べるポケモンだ。

ガブリアスは目の前のポケモンの異質さ、己が主に敵意を向けている危機を感じとって自らボールから出てきたのだろう。

一触即発。

のはずだった。

「大丈夫だよ。フェローチエ。この人は私もあなたのこととも傷つけないから。」

彼女はフェローチエの手を握り宥めるようにそう言った。

「あなたも少し落ち着いて。ガブリアス。」

主がそういうならば…といった風にガブリアスも一歩身を引いて警戒心を薄める。

「ごめんさい。さっきも言ったようにこの子、あんまり人に慣れていなくて…」

「ううん。いいのよ。こつちこそごめんなさいね。」

ここで臨まぬ戦闘がおこることはひとまず回避した。

それにあの見たこともないポケモンは目の前の少女の言うことは聞いているようだ。

「ガブリアス、ありがとう。ひとまず戻っていて。」

シロナは自身の相棒をボールに戻しながら考えていた。

(記憶のない少女に見たこともないポケモン。フィランのことを疑うわけじゃないけど確実に何か裏がありそうね。)

この子に何かあるのか。それとも何かの被害者なのか現時点ではわからないし…)

「ねえ！あなたさえよければ、記憶が戻るまでここで暮らさない？」

「いや、でも、そんなご迷惑をおかけするわけにも…」

「いいのいいの。私、実はこの地方のチャンピオンなの！だからもしかしたらあなたのこともなにか手掛かりが見つかるかもしれないし！」

ファイランは迷っていた。

もちろん申し出はありがたいし、ここを出て行っても自分にはいく当てもない。

だがいくらこの人が親切な人といえど見ず知らずの自分が世話になるような迷惑をかけてしまつていいんだらうかと。

「じゃあこうしましよ！あなたはここに住む、代わりに私の手伝いをしてほしいのよ！」

そうすれば別にただただ世話になるわけじゃない。私にだってメリットがあるわ。」

「手伝いつて…？」

「さつきもいった通り私、チャンピオンんだけどそれと同時に考古学の研究もしててね。」

その手伝いをしてほしいのよ。

それに、あなたのポケモン、フェローチェって言ったかしら？

あの子もあなた以外の人やポケモンと暮らしてくうちに人にも慣れていくかもしれないし」

「わかりました。それではお世話になつてもいいですか？」

「もちろんよ！」

こうしてファイランはチャンピオンシロナの下で世話になることになった。

## 2、日常と傷跡

シロナの下での生活はあっという間に過ぎ去っていった。

考古学研究の手伝い（とはいっても専門知識を要さない簡単な雑用だが。）や、

チャンピオンとしての戦いぶりを見学させてもらってはポケモンについていろいろ教えてもらったり。

フェローチエも最初は何もかもを警戒していたがシロナや手持ちのポケモンたちが危害を加えない、ましてや友好的に接してくることを受けて次第に態度が和らいでいった。

自分からかわりに行くことはないが敵視もしていない、程度ではあるが。

（それにしてもここまで何もヒットしないとはね。ファイランもそうだしフェローチエのことも。）

ファイランを保護してからここまでの数か月、特に大きなトラブルも起きずいたって平和ではあったが代わりにファイランとフェローチエの素性についても何も進展していないのであった。

本人が記憶をなくしていることすら忘れていくかのように過ごしているためこれといった問題も今のところはない。

その日の仕事が終わった後のこと、先日したある約束をファイランが確認してきた。

「シロナさん！明日は付き合ってくれますよね?!」

「ええ、もちろんよ。」

シロナは時間を見つけてはファイランとフェローチエにポケモンバトルについて色々教えていた。

（フェローチエ、私やナナカマド博士も知らない未知のポケモン。ましてトレーナーは何も知らない女の子。確実に悪い大人の標的になる。だからそうならないようにあの子たちには最低限自分たちを守るだけの知識と力をつけて欲しい。）

幸い、フェローチエもファイランも才能はあったようだ。

フェローチエはパワーとスピードがほかのポケモンをはるかに凌

駕するポケモンのようだ。

代わりと言つては何だが非常に打たれ弱い。

だが強みと弱みがつきりしているのはいいことでもある。

それを補えるポケモンを仲間にするには必要だがトレーナーとしてまだまだ初心者なファイランには戦略が立てやすい。

トレーナーであるファイランは非常に物覚えのいいタイプだった。

教わったことをグングン吸収しているし、今は手持ちはフェローチェのみだがそれ以外のポケモンについても積極的に調べようとしている。

そしてポケモンごとの得意なことや苦手なことを見抜く才能があった。

推測だがフェローチェという極端なポケモンと一緒にいるからだろうか？

そしてファイランは自分のことは何も覚えていなくせにフェローチェのことはよく理解していた。

そもそもファイラン以外知る人が今のところいないポケモンであるにも関わらず、タイプや覚えている技といったことは覚えていた。

(それだけ彼女にとって大事なことなんだろうね。自分のことよりもフェローチェが大事だから、自分のことは覚えていなくてもフェローチェのことはよく覚えていいる。

なんていうのは考えすぎかしら。)

翌日、ファイランはシロナとともにシロナ宅の近くの開けた場所に来ていた。

(今日はこないだシロナさんのルカリオがやってた技、それを見てもらおう。)

先日シロナの戦いを見たときにルカリオが使っていた技、それをフェローチェもできるんじゃないかと思つて密かに一緒に練習していたのだった。

「シロナさん、よろしくお願ひします！」

「今日もよろしくね。それじゃ始めましょう！」

お互いボールを投げた。

ファイランはフェローチエを、シロナはルカリオを繰り出した。  
フェローチエのバトルの練習相手にはルカリオが選ばれることが多かった。

同じかくとうタイプを持つポケモンのため、何か学べることがあるんじゃないかというこららしい。

「行くよフェローチエ！インファイト！」

フェローチエはルカリオをはるかに上回るスピードでルカリオの懐に潜り込み強烈な打撃を叩き込む。

鋼タイプでもあるルカリオに対してこのかくとう技は大ダメージとなったようだ。

相性もあるとはいえずか1手でチャンピオンの手持ちを1匹沈めるパワーとスピードはやはり凄まじいものがある。

(よし！うまくいった！)

「やるわね！次はこの子ならどうかしら！」

シロナの次の手はガブリアスのようだ。

さすがチャンピオンの相棒というだけある。強者の風格を持つドラゴンがフェローチエの前に立ちはだかる。

「フェローチエ、続けてインファイト！」

先ほどと同じく強い打撃がガブリアスを襲う！

だが、

ガブリアスはやはりその場に堂々と立っていた。

「耐えられた?！」

「ガブリアス！げきりん！」

強大な竜の怒り、その一撃がフェローチエを襲う。

インファイトの代償としてガブリアスに肉薄していたフェローチエは防御が疎かになっている。

そうでなくともフェローチエの耐久ではまともに受け止めることもかなわなかったであろうが。

「お疲れ様、フェローチエ。」

傷ついた相棒をボールに戻す。

「あなたもお疲れさま。」

それにしても驚いたわ。いつの間にかインファイトを習得していたなんてね。」

「こないだのシロナさんのルカリオのバトルを見て、フェローチエにもできるんじゃないかなっておもったんです。

結果はうまくいったかもしれないですけど、ガブリアスはそれを耐えうるだけの力を持っていて、私はそれを判断できなかった。

今は練習だからいいかもしれないですけど、いつか私の判断でフェローチエが傷付くことがあるかも…」

「大丈夫よ。誰しも初めから完璧な人なんていないわ。それにあなたがフェローチエのことを大切に思ってることはきつとその子にも伝わってるわよ。」

あなたがいたずらにフェローチエを傷つけているわけじゃないって、お互いに信じあうことが何よりも大切なんじゃないかしら。」

「…はい！」

シロナの言葉に励まされ表情が明るくなるファイラン。

「さあ、傷も治療しなきゃいけないし今日はこの辺にしましょうか。」

シロナとの戦闘練習とその傷の治療も終え、すっかり日も落ちた。夕食の後、シロナ宅の借りている自室にてファイランはフェローチエをボールから出し何やら話をしていた。

「ごめんね、今日は痛い思いさせちゃったよね」

フェローチエは問題ないといった風に首を傾げた。

「強くならなくちゃね、もうあなたを誰にも傷つけさせたりしないよ。」

ファイランは記憶の大部分が喪失している。

それでもフェローチエのことが大切でフェローチエが傷つくことを恐れている。

ファイラン自身も気づかない、塗りつぶされた記憶の中にある嫌な思い出が彼女の感情に呼び掛けている。

それが無意識のうちに言葉に出ているのだろう。

フィランにフェローチエが寄り添う。

記憶がなくともフィランがフェローチエを大切に思っているように、フィランの記憶がなくともフェローチエも変わらず同じように思っている。

「ふふ、ありがとうね。」

今日はもう寝よっか。」

「おやすみ」

### 3、進む日々と変わらぬもの

―わずかに日の光が差し込む薄暗い洞穴、その苔むした道を少女とポケモンが駆ける。

「こつちに…隠れよう…っ！」

息も絶え絶えにかすかな声を、お互いに聞こえる程度に。

岩の影に身を寄せ合い、開けた通りからは死角となったその場所で鼓動を整えながら当たりの気配をうかがう。

落ち着いたのも束の間。

何かを追うような足音が心臓の鼓動と重なり、心拍数が上がるかのような錯覚に陥る。

「…俺はこつちを探す！」

「了解！私はこちらを。後ほど合流しよう。」

二人の男のやり取りが洞穴の外から聞こえる。

（まずい…こつちも見つかつちやうかも…）

男の足跡が洞穴にこだまする。

「おい！出てきなさい！君にもそのポケモンにも危害は加えない！そいつさえ渡せば君はちゃんと両親のところへ送り届けてやるから！」

あたかもこちらに降伏を促すような、決して安心はできない声色だった。

（絶対にウソ。それに私は…）

男の言葉には怒気がこもっている。

その言葉を信用することはできなかつたし、ここで姿を現すという選択肢はありえない。

だが、男の足音は徐々に近づいており一刻の猶予もならない。

そんな状況を打破するだけの手札を彼女は持ち得なかつた。

ザツ…

「おい…そこか！」

緊張に身をよじる少女の、靴が地面に擦れる音を男は聞き逃さなかつたのだろう。

（まずい…こつちに来る！）



刹那

白い影が空気を切るかの如く舞う。

「おい……うわっ！」

男は一瞬で倒れ伏した。

次の瞬間には少女の下に舞い戻り、手を引き、駆けだした…

「ん……ふあ……」

朝の陽ざしが差し込みフィランを覚醒へと導く。

「何か…」

夢を見た気がしなくもない。が内容も思い出せずそもそも見たのかどうかすらはつきりしない。

「いつも思い出せないことだらけだな…」

そんな風に自嘲するが実際のところ全く問題に感じていないのだ。それで、いつまでもここで世話になり続けるのには少し申し訳なさを感じるが。

ベッドから起き上がり、何よりもまず初めにやることがある。

「おはよう。フェローチェ。」

大切な相棒をボールから出し、挨拶を交わした。

・  
・  
・

今日はシロナの研究の手伝いをしている。

とはいっても一緒に屋外で調査をしているわけではなく、シロナの研究室の片付けである。

（このファイルはこつち。これはこつちか…。このメモいるのかな、後で聞いてみようか。）

しばらく見ないうちに研究室は地獄の釜のごとき様相となり、物を仕分するだけでも一苦労だ。

研究に熱中するあまり段々と惨憺たる様になっていく部屋の片付

けにも、すっかり慣れたもので淡々と仕分けと整頓を進めていく。

：まあ、シロナが片付けができないのは研究云々ではなく彼女の生来の性質なのだが。

グイツ：

あらかた片付けが完了し、そろそろ昼食でも用意しようか、なんてことを考えているフィランのシャツの裾を引っ張る何かの力を感じる。

フェローチェはボールから出しておらず、当然シロナは不在。

と、なるとこの力の主は…一体…!!

なんてホラーな展開にはならない。正体は分かりきっているのだ

「ぎゅーいー!」

「や。フカマル。どうしたの?」

正体はこのポケモン、フカマルである。

数週間前にシロナの持っていたタマゴから孵ったばかりのフカマル。

このフカマルもお留守番時のレギュラーメンバーであった。

フカマルと向き合い声をかけると甘噛みでじゃれついてくる。どうやら遊んでほしいのか。

「うーん。でもまだお片付けも終わってないし、これからご飯も用意しないといけないしなあ…」

実を言うと解決案はあるのだ。自分のやるべきことを遂行しつつ、フカマルの退屈もしのぐ、そんな方法が。

：あまり気は進まないが。

というわけで現在キッチンにて昼食の用意をしている。

自分と昼頃には戻る予定のシロナ、それからポケモンたちの分。

フェローチェは特にフィランが用意したものしか口にしないので尚更だ。

調理をしながら横目でリビングに目をやる。

「ぎゅーんーぎゅーい！」

「……………」

フカマルがゴロゴロと床を転がってはしゃいでいる。

部屋の端まで転がると歩いて一定のところまで戻っている。

結構な勢いで転がりまた戻る。

部屋に滑り台のような坂があったり、当然部屋が傾いているわけではない。

ひとりで転がっているわけではない。

フェローチエが足で蹴って転がしているのだ。

「…………まあ、フカマルが楽しいならそれでいいか！」

その光景に思うところがないというのは嘘になるが。

そもそもいうならば生まれて間もない赤ん坊のようなフカマルの世話をフェローチエにお願いした自分の責任でもある。

くくくくくく

「ごめんー！少しでいいからこの子の相手してあげて！」

「……………」

腕に抱きかかえたフカマルは高くなった視線にはしゃいでいる。

その様子を普通に嫌そうな表情で見ている自身の相棒。

「お願いー…じゃ、じゃあ後で逆に何かお願い聞くから…ダメ？」

「……………」

仕方ないわね。なんて声まで聞こえそうな仕草とため息。

どうやら了承してくれるようだ。

お願いを聞くなんて安請け合いをした感も否めないがそんな大それた要求はないだろう。

なんて高を括りながらフェローチエにフカマルを託す。

「フカマル。フェローチエに少しの間遊んでもらってね。

フェローチエもフカマルもケガだけは気を付けてね。」

乗り気でなさすぎるベビーシッターに赤子を預け、自身は次の仕事にとりかかった。

・

・

・

（あれで楽しいんだらうか？でもフカマル割と生まれたばっかだしな。人間の赤ちゃんが高い高いとかで喜ぶようなものかな。

てか酔わないのかなアレ。）

できた料理を皿に盛りながらそんなことを考えていると扉を開く音がした。

「ただいま。」

「おかえりなさい。シロナさん。」

「昼食の準備、できてますよ。」

「助かるわ。さ、食事にしま…アレ、なにしてるの…？」

当然の感想だ。

自分が逆の立場でも同じことを言うだろう。

「…うーん、子守り、ですかね？」

馬鹿を言うな。どこの世界に赤子を足蹴にして転がすシッターがいるか。いてたまるか。

「虐待の間違いじゃなくて？」

「それを言われると頭が痛いですね…」

冗談交じりにそんな話をしながら昼食の準備を進めていく。

（それにしてもいい傾向だわ。初めて会ったときはどうなることかと思っただけど。）

食事の後、コーヒーで一息つきながらシロナはそんなことを考えていた。

（ここにはフィランを傷つけるものはないことが分かってかなり落ち着いてきているのかしら。）

思い返すのは先ほどのフカマルの相手をしていたフェローチェの

ことだ。

ファイランがここで目覚めたときからははるかにフェローチエの態度は軟化してきていた。

(それにファイラン自身がほかのポケモンと積極的にかかわろうとしてきているのも要因としてあるのかも。)

自分の主が直接触れ合っても傷つけられないなら警戒する必要もそんなにないってことね。

：フェローチエとは対照的にあの子について進展がないのが困りものだけだ。)

相も変わらずファイランの素性、記憶については何もわかっていない。

ファイラン自身は気にしておらず、ここでの生活もなれて気に入ってきている。

今も上機嫌で皿洗いをしているくらいだ。

：因みにシロナも片付けは手伝う、と名乗り出たがファイランに無理やり椅子に座らせられ食後のコーヒーマまで提供されてしまった。

(まああの子が何か隠しごとや嘘をついているとは思えないし、気長にやっついていくしかないのかしらね。)

ひよっとしたらフェローチエはすべてを知っているのかもしれない。

だが、言葉を話せないポケモンに詳細を聞き取りするのは不可能だし、

何よりフェローチエはファイラン以外とは積極的にコミュニケーションをとろうとはしない。

フカマルの相手だってファイランの頼みでなかったらしていなかっただろう。

警戒心は薄れてきているが完全に心を開いているわけではない様子だ。

考え事を流し込むかのようにコーヒを一口含み、

午前中の調査について資料をまとめることにしたのだった。

ファイランはその後少し残した片付けをやり遂げ、シロナにポケモンについての様々なことを教わったり、フカマルと遊んだり家事をした  
りして過ごした。

因みに研究の手伝いだけでは住まわせてもらっている対価と不十分だと思い、自主的に家事をこなしている。特に掃除。

夕食後の団欒も過ぎ去り、シャワーを浴びて自室に戻る。

今日も一日を終えようとベットに潜ろうとしたその時、机に置いたボールからフェローチェが飛び出した。

「ん？どうしたの？」

問いかけるファイランの声にやや不満そうな様子を浮かべるフェローチェ。

「ああ、お願い。聞くなって約束だったね。決まったの？」

すると、ファイランの手を取ったフェローチェがベッドに横になる。

「一緒に寝るなんて、そんなことでもいいの？」

うなずき、肯定するフェローチェに手を引かれ、ファイランも横になる。

(でも、ずっと一緒だったのに、目覚めたときからこうしたことなんて無かったな。

これもいいかも…)

「おやすみ。フェローチェ。」

少女とポケモンは手をつなぎあったまま眠りについた。

#### 4、賢者と未来への憧憬

ある日、ファイランはシロナのフィールドワークを手伝うためシンジ湖を訪れていた。

相も変わらず雑用的な手伝いがファイランの仕事のため、学術的な作業はノータッチである。

そうなるかどうかでも待機の間が発生してしまう。

もちろんそんなことは慣れっこで、少し離れた位置に座って水筒のお茶を飲みながら一冊の本を眺めていた。

「おお。やっているな。」

背後から声が聞こえる。

振り向くと見覚えのある人物がたっていた。

「おはようございます。ナナカマド博士。」

ファイランは立ち上がり挨拶を交わす。

ナナカマド博士、ポケモンの進化についての研究の第一人者でありこのシンオウ地方、マサゴタウンにある研究所にて日夜研究に邁進しているポケモン博士である。

「ああ。おはよう、ファイラン君」

「あらー！ナナカマド博士！」

シロナもナナカマドの来訪に気づいたのか、こちらに向かってくる。

「シロナ君も元気そうで何よりだ。」

「今日は一体どうされたんですか？」

ファイランが尋ねる。

「いやなに、大したことではないのだがね。君たちが近くに来ているということだから様子を見に来たわけだ。」

「すみません！本来ならこちらから挨拶に行くべきですのに！」

シロナにとっても恩師に当たる存在だ。

後ほど研究所にも立ち寄ろうとは考えていたが、先を越される形となってしまう。

「構わないさ。何より多忙のシンオウチャンピオンに手間をかけさせ

るわけにもいかないだろう。」

「そういえばこの本、ありがとうございました。」

フィランが先ほどまで眺めていた本をナナカマドに差し出す。

内容としてはポケモンと人の関わりについて記された、学術チックな本である。

「どうだったかね？」

「面白かったです。」

時は少し巻き戻り、フィランが目覚めてからまだ間もない頃。

シロナの下での生活にも少し慣れてきた頃のこと。

「今日はある人に会いに行くんだけど、あなたにもついてきてほしいの。」

シロナが唐突にフィランに言う。

今まで何度か外出したことはあったが誰かに会いに行くのについてきてほしいなどと言われたのは初めてだった。

「誰に会いに行くんですか？」

「私の先生みたいな人でね、あなたのことも紹介したいのよ。」

・

・

・

そうして二人はマサゴタウンに到着した。

一軒の建物、研究所の戸をシロナが叩く。

「おはようございます。シロナです。」

すると中から一人の男性が姿を現した。

年は若く、いまいち覇気のない人物だ。

内心、この人がシロナさんの先生？なんて思っているとその男性に入室を促される。

「こちらです。」

そのまま奥にある部屋に通される。

中にいたのは白髪に髭を蓄えた老年の男性だった。



「やあ、久しぶりだね。シロナ君。」

「お久しぶりです。博士。」

「どうやらこっちのいかにも威厳ありげな顔つきの男性がナナカマド博士のようだ。」

「こちらがナナカマド博士。主にポケモンの進化について研究されているけど、私にとって考古学の先生にもあたる人なの。」

シロナの紹介でナナカマド博士が視線をこちらに向ける。

「君がファイラン君だね。シロナ君から話は聞いているよ。」

私はナナカマド。今、シロナ君から紹介してもらった通りだが、ここでポケモンの研究をしている。」

「ファイランです。あいにく私には自己紹介できるほどの記憶がないのですが…」

ひとまず今はシロナさんのところでお世話になっています。」

ファイランは少しバツが悪そうに言った。

記憶がないのだから自己紹介も何もない。

「そのこと記憶喪失についてもシロナ君から聞いているよ。」

今日はその件で君に用があつたんだ。」

ファイランは首をかしげる。

「まあ立ち話もなんだろう。そこにかけて少し待っていてくれ。お茶でも用意しよう。」

しばらくするとナナカマドが戻ってきた。

先ほど案内してくれた男性が人数分のお茶を机に置き、退室していったところを見計らってナナカマドが口を開く。

「早速本題に入らせていただくがね。」

ファイラン君、君はシロナ君でも知らないようなポケモンを連れていると聞いた。」

少し嫌な予感がファイランを襲う。

「そこだ。そのポケモンを私に見せてくれないだろうか。」

私もそれなりに知識のある研究者であると自負している。

もしかしたらそのポケモンから何か、例えば君がどこから来たのか

などのヒントを見つけられるかもしれない。」

この人物はシロナの恩師ともいえる人物だ。

フェローチエに害をなすようなことはしないだろう。

だが研究者という人物に大切なフェローチエを見せるということに、頭のどこかで忌避感を感じている。

「少し、考えさせてください。この子とも相談したいですし…」

「ああ、無理には言わないよ。」

本音を言えば、未知のポケモンに興味がないといえはウソになる。

だが君が自分のポケモンを大事に思っているのはよくわかったし、私もそれを尊重したい。」

ファイランは驚きを隠せずじいた。出会って数十分の人物に、この短いやり取りにそこまで判断されるようなことを言っただろうか。

「私も伊達に長く生きていない。それに何人ものトレーナーをここから送りだしているんだ。」

どうやらファイランの考えはお見通しというわけだ。

恐らくこの人は悪い人ではないのだろう。

だが念には念を、だ。

「ありがとうございます。少しこの子と話してきてもいいですか？」

「そういうことなら我々が席を外そう。構わないね？シロナ君も。」

そういつて二人は部屋を後にした。

「フェローチエ、ボールの中から聞いてたよね？」

フェローチエをボールから出し尋ねる。

「私は自分の記憶がの手掛かりよりもあなたことが大事。」

だから、フェローチエが嫌なら断ろうかなって。」

「……………」

嫌がっている様子は無い。

「じゃあ少しだけにしよっか。私もあなたを見世物みたいにするのは嫌だし。」

本当に少し会ってみるだけ。研究とかはさせないから。」

「……………」

フェローチエもうなずく。

「ここで少し待ってて。」

そうしてフィランは外にいる二人を呼びに行く。

「お待たせしました。」

フェローチエも了承してくれました。

けど、お願いがあります。」

「なんだい？」

「あの子が嫌がることはしないでください。」

あくまでも会うだけで、研究とかは…」

「ああ勿論、わかっているとも。約束しよう。」

そうして中に再び入ったナナカマドは少し驚いたような様子を見たが、すぐに冷静さを取り戻した。

「ふーむ。確かに私でも見たことのないポケモンだ…」

フェローチエ自身は、別にフィランに害さえなければいいと言った雰囲気以案外平気そうにしている。

（もしかしたら私の考えすぎだったのかな…ナナカマド博士もフェローチエに何かしそうな様子は無いし。）

しばらくしてナナカマドはようやく言葉を口にした。

「…私が無理を言って会わせてもらったのに申し訳ない、全くわからなかった。」

これは完全に新種のポケモンなんだろうか…。いや、すまない。決して研究したいとかそういう意図はないんだ。」

「私の記憶についてはお気になさらないでください。」

私自身もあまり気にしてませんので…」

フェローチエをボールに戻しながら言う。

「それに私のほうが気にしすぎだったのかもしれない。」

フェローチエもそこまで嫌がっている様子もなかったですし…

失礼な態度をとってしまいすみませんでした。」

「いやいいんだ。それだけ君はフェローチエのことを大事に思ってる

ということだろう。」

「ナナカマド博士。よろしいでしょうか。」

突然、扉の外から声がかかる。

「入ってくれ。なんだね?」

「あの、今日旅に出る予定のトレーナーの子が見えてるんですけど…」  
研究員の男性が少し焦った様子で言伝にやってきた。

「…。そうだったそうだった。すぐに行くと言伝えておいてくれ。」

ナナカマドがそう伝えると研究員の男性はもと来た通路を戻って  
いく。

「そういうわけで少し席を外させてもらうよ。」

「でしたら、私たちも一緒について行ってもかまいませんかしら?」

シロナがナナカマドに提案する。

「別に構わないが…何かあるのかね?」

「深い意味はありませんけど、これから旅立つフレッシュな若者の顔  
を一目見ておこうかと!」

もしかしたら私と戦うこともあるかも知れませんし。」

「君がそういうなら構わないよ。ついてきてくれ。」

ナナカマドに連れられて行った部屋では一人の男の子が緊張した  
面持ちで、その時を今か今かと待ちわびていた。

「待たせてしまってすまない。私がナナカマドだ。」

こちらは今日来ていた客人でね、新人トレーナーの様子を見学した  
いということだそうさ。」

「そういうことなのでお邪魔しちゃってごめんなさいね。」

私たちのことはあまり気にしないでいいですから。」

シロナがあっけらかんと言う。

その後、少年は目の前に置かれた3つのボールのうち1つを選び自  
身の初めてのパートナーを得た。

ナナカマドから簡単な説明を受けて渡されたポケモン図鑑を握り  
しめ希望に満ちた目をしている。

その輝かしい表情がフィランには眩しく見えた。

少年が旅立った後、ファイランとシロナも今日は帰ることにした。

「さっきの男の子、すごく輝いた表情をしました。」

ファイランがシロナに先ほど感じたことを話す。

「そうね。誰もがああやって初めてのパートナーを得て、自分だけの旅に出ていく。」

「勿論楽しいことだけじゃない、いろんな苦悩もあるかもしれない。だけどそれを一緒に乗り越えられる仲間を彼は今日手にしたのよ。」

「そうだ。お互いを思いやることだけじゃない。」

「お互いを信頼しあい、困難に立ち向かうことも大切なことだと私は思う。」

「たとえ人間同士でも、ポケモンとでもね。」

「ナナカマドの言葉にファイランは何か大事なことに気が付いたようだった。」

それから何度か、ファイランはナナカマドの元を訪れ彼に色々な話を聞いていた。

「ナナカマドも忙しい合間を縫って様々なことをファイランに教えた。この世界にいる様々なポケモンのこと、それと暮らす人々の子ども。」

手に持っていた本はその中でナナカマドからファイランに貸し出された本であった。

「ふむ、それは何よりだった。」

受け取った本をしまいながら満足そうに言った。

「どうだね、調子のほどは？」

「私は相変わらずですね。まだまだこのシンオウには調べることが山ほどありそうです。」

「そうか。ぜひその成果を聞かせてもらえないだろうか？」

「ええ。博士のご意見もお伺いしたいともあります。」

・  
・  
・

そんなやり取りから二人はまたしてもナナカマドの研究所にお邪魔していた。

「これ、その時にテンガン山で見つけた石のかけらのようなものなんですけど、この文献にあるものと特徴が一致するように見えませんか？」

「なるほど、確かにそういえなくもないな。もう少し大きな塊で見つけられれば詳しく調べようがあるかもしれないが……」

そこでシロナとナナカマドはお互いの研究について意見を交換しあったり、フィランはその様子を眺めたり。

「ところで、フィラン君は最近はどうだね？」

ナナカマドがフィランに尋ねる。

「私は……記憶のほうは相変わらずですけど。

色々考えてることがあって。」

「そうかそうか。自分で考えることも大事だ。

だが誰かに相談することで解決することもあるかもしれん。

もちろんシロナ君や私でも構わないし、君のパートナーだって力になってくれるはずだ。」

「……はいー」

そうこうしてるうちにみるみる時間は過ぎていく。

「あら、もうこんな時間なんですネ。」

「そうだな。今日はこのくらいにしておこう。」

「はい。またよろしくお願いしますね。」

「「お邪魔しました。」」

フィランとシロナは研究所の入り口まで見送ってくれたナナカマドに挨拶を交わし、帰路に就いた。

・  
・  
・

・  
・

その晩、ファイランは自室にてフェローチエと何か話していた。

就寝前の時間にフェローチエとコミュニケーションをとるのは習慣となっていた。

「あのね、私も旅に出てみたいなって思うの。

こないだの男の子、すごい楽しそうだったでしょ。だから私も旅に出たら、何か変わるかなって。

もちろんフェローチエがここにいたいっていうなら私もそうするけど、どうかな？」

フェローチエは聞かれるまでもないといった様子だ。

ファイランが行くならついていく、それだけ。

「いいの!?じゃあ明日シロナさんに相談してみよっか。」

その後は旅の展望を話し合いながら就寝までの時間を過ごした。

「一緒ならきつとどこまでだっていけるよ。」

## 5、旅立ち

「シロナさん。相談があります。」

ある朝、唐突に放たれた言葉。

シロナはいまだ半覚醒の脳でぼんやりと受け止める。

「おはよう…。いきなりどしたの…?」

「私、旅に出たいんです。」

「へえ…旅に…。え?」

思いがけない内容に急速に目が覚めていく。

「わかったわ。話を聞くから少し待っていてちょうだい。」

そう言いひとまず、朝の身支度を済ませることにしたのだった。

・  
・  
・

「それで、旅に出たいって言うのは?」

シロナは食卓を挟んで反対側に座る少女に問いかける。

「はい。初めてナナカマド博士の研究所で、新しく旅に出る男の子を見た日から考えていたんです。」

私も旅に出てみてもいいかもしれないって。

でもずっと悩んでたんですけど思い切ってフェローチエに相談してみました。それで…」

「それで一緒に決めたことなのね。」

うん。いいかもしれないわね。色んなものを見たらあなたも自身のことがかかわるかもしれないし。」

「はい。それにいつまでもここにお世話になるわけにもいかないですし。」

「私としては別に構わないのだけれど…。まあでもあなたが決めたことだものね。」

行ってらっしゃい!たまには帰ってきて欲しいけど、そうね、ポケ



モンリーグの一番奥で待ってるわ！」

「はい！」

「じゃあナカマド博士に連絡しときましょう。ポケモン図鑑を受け取ったらあなたの旅の始まりね。」

すると、どこからともなく小さい影が飛び込んだ。

「ぎゅーいー！」

それはフカマルだった。

どうやら話を聞いていたようで、自身と仲のいい少女が旅立ってしまふと知り、いてもたってもいられなく飛び出してきたようだ。

「そうだ！その子も連れて行ってくれないかしら？」

あなたにもなついてるようだし！」

その様子を見たシロナから思いがけない提案が出た。

「いいんですか？フカマルもいいの？私と一緒に来るので。」

「ぎゅーいー！」

フカマルも嬉しそうにしている。

こうして新たな旅立ちに、新たな仲間が加わった。

そうして数日後、シロナの下で過ごす日々も終わりを迎えた。

少しの寂しさもあるが新しい日々への期待も確かに感じて、ついに旅立ちの日が訪れた。

マサゴタウン、ポケモン研究所。

そこでフィランはシロナとナカマドの二人と向かい合っていた。

「では、フィラン君、これが君のポケモン図鑑だ。」

「ありがとうございます。」

「それと、新しく旅に出る子供には最初のポケモンを私から1匹手渡すことになっているが、どうするかね？」

君は既にフェローチェと、シロナ君から貰ったフカマルもいる。無理に受け取る必要は無いだろう。

もちろん君が望むのなら、私からも1匹受け取ってほしい。」

「そういうことでしたら…お言葉に甘えようかと。」

「どんなポケモンなんですか?」

「くさタイプのポケモン、ナエトル。」

ほのおタイプのポケモン、ヒコザル。」

そして水タイプのポケモン、ポツチャマだ。」

ナナカマドは3つのボールからポケモンを出し、それぞれ説明してくれた。

「……!」

少し悩むような、どの子にするか、なんて考えながら3匹をそれぞれ見ていくと1匹のポケモンと目が合った。

「ポツチャマ、私と来る?」

すると、ポツチャマは嬉しそうにこちらに駆け寄ってくる。

「ナナカマド博士、この子にします。」

「うむ。では気を付けて行ってきたまえ。」

「はい!何から何までありがとうございます。」

そうしてポツチャマが新たな仲間として加わった。

そして改めてシロナのほうを向く。

「シロナさん。助けていただいた日から本当にお世話になりました。」

あの日、私を救ってくれたのがシロナさんで本当に良かったです。」

「そうね。私もあなたと出会えて本当に良かったわ。」

それにまた一つ、あなたをリーグの一番奥で待つって言う楽しみもできたしね。」

「はい!必ず!その場所に会いに、いや、シロナさんに勝つために行きます!」

「待ってるわよ。それと、私はもうあなたのことも家族のように思ってるから。」

また帰ってきていいからね。」

「シロナさん…本当にありがとうございます。」

本当にあの日であったのがこの人で良かった。

もしそうでなかったら私は旅になんて出られなかったかもしれない

い。

今日まで笑って過ごすことはできなかつたかもしれない。

感謝してもしきれないほどの恩は彼女に勝つことで返すでしょう。

「じゃー気を付けて行っておいで！」

「はい！行ってきます！」

「行こうか！フェローチエ、それにフカマルとポツチャマ、これからよろしくね！」

目指すは炭鉱の町クロガネシティ。まずは初めのバッジを手に入れるため、少女たちは歩きだした。

## 6、岩の関門

ファイランと仲間たちは202番道路とコトブキシティを通過し、クロガネシティに向かうため203番道路を進んでいた。

「ポツチャマ、はたく！」

ポツチャマの翼(?)が相手のポケモンを文字通りはたく。

「ああつ…僕のムツクルが…！」

「よし。…お疲れ、ポツチャマ。」

マサゴタウンを出発したファイランたちは、道中で野生のポケモンや勝負を仕掛けてくるトレーナーたちと戦いながら順調に歩を進めていた。

むしろ積極的にトレーナーを探しに行っている様子すらうかがえる。

(聞いた話によるとクロガネジムのジムリーダーは岩タイプの使い手。

フェローチェならかくとう技で有利をとることもできるけどフェローチェだけに無理はさせられないし、何よりフカマルとポツチャマにも経験を積んでもらいたい。)

シロナの下にいたころ、チャンピオンの手持ちポケモンと戦闘の訓練をし経験を積んだフェローチェと、

旅に出てから戦うことを覚え始めたフカマル、ポツチャマとでは、その力量に大きな差がある。

故に、ある程度2匹が成長するまではフェローチェは奥の手にしておき、メインはフカマルとポツチャマに任せようと考えていた。

その後もいくつか戦闘をこなしながら203番道路からクロガネゲートという短い洞窟を抜ける。

そんなこんなで到着したクロガネシティ。

「ここがクロガネシティかあ…」

始めてくる町に思わず声が上がってしまう。

今まではどこかに出かけるにもシロナかナナカマドがいた。

先ほど通過したコトブキシテイも、シロナと何度か訪れていたことがあった。

だが、こうして自分の足で見ず知らずの町に来たことが、旅に出たことをようやく実感させる。

そんな少し青いような心情もほどほどに、ファイランはここに来た目的を再確認する。

「まずはポケモンセンターかな。」

ジムに挑戦する前に一休みも必要だ。

「お預かりしたポケモンたちはみんな元気になりましたよ！」

お決まりのセリフとともに仲間たちが手元に戻ってくる。

「ありがとうございます。」

お礼をお告げ改めて目的地に向かうこととする。

クロガネジム。

このシンオウ地方でポケモンリーグに挑戦するトレーナーが最初に挑むジムである。

その初めの一步を、今、踏み出さんとした。

ジムの建物に入ると中は岩壁に囲まれたシンプルなつくりをしていた。

中央の階段を進みジムリーダーの元へ。

途中、ジムのトレーナーが勝負を仕掛けてきたが、それもいい経験になる、くらいのものだった。

とはいえフカマルもポツチャマも少し消耗している様子なのでキズぐすりで回復も忘れない。

そうしてたどりついた最奥。

ジムリーダーヒョウタと対峙する。

「ようこそ。クロガネシティポケモンジムへ。ボクがジムリーダーのヒョウタ。」

いわタイプのポケモンとあゆみことを決めたトレーナーさ。

さてと、君のトレーナーとしての実力、そして一緒に闘うポケモンの強さ、見せてもらおうよ！」

「ファイランです。よろしくお願ひします…！」

ファイランにとって最初の試練が今、幕を開けた。

「行け！イシツブテ！」

「フカマル。行けるね？」

お互い最初のポケモンをボールから放つ。

ヒョウタのポケモンはイシツブテ。対するこちらはフカマル。

2匹のポケモンが互いを見据える。

「なるほど…そのフカマル。」

君がチャンピオンの下から旅立ったというトレーナーか。ますます君の力が知りたくなったよ！」

「…じゃあ、遠慮なく行かせてもらいます！」

「フカマル！たいあたり！」

ファイランの指示のもと、フカマルはイシツブテに一直線に駆け出す。

「イシツブテ！まるくなる、だ！」

フカマルの攻撃をみすみすそのまま受け止めるわけもない。

イシツブテは体を丸め防御の姿勢をとる。

ドン！

フカマルがイシツブテに激突する。

だが、先ほどのまるくなるで威力を軽減させたのだろう。

イシツブテはまだまだやれるといった様子でいる。

だが、ファイランからしてもこの一撃で勝負が決まることもないことは分かり切っている。

（まあ、こんなものか。じゃあここで本命と行こう…！）

「フカマル…じならし！」

たいあたりで近づいたフカマルが間髪入れずに地面を踏み鳴らす。

「不味い！イシツブテ！」

その時にはもう遅い。

まだまだ成長途中のフカマルのじならしはガブリアスのじしんなどには程遠い。

だがいわタイプのイシツブテを倒すには十分な威力だった。

「お疲れ様。イシツブテ。」

ヒョウタはイシツブテをボールに戻す。

（チャンピオンの下で学んできただけはある。タイプの相性は織り込み済みか。）

そうしてヒョウタの2匹目のポケモンが現れる。

「イワーク。出番だ。」

「フカマルも一旦戻ろっか。」

フカマルをボールに戻し交代するポケモンをボールから出す。

「ポツチャマ。行こう。」

次に切るカードはポツチャマだ。

元気いっぱいといった様子で躍り出るポツチャマ。

元気がいいのはいいことだが落ち着きがないようにも見えなくはない。

（ポツチャマ、少し緊張気味かな…？）

フカマルよりも少し幼い印象を見せるポツチャマ、生まれて初めての旅に、初めてのジムでのバトル。

人間でいうところのあがっている、といったところか。

（ま、やれるだけやってみよっか！）

「ポツチャマ、あわで攻撃しよう。」

「イワーク！いわおとしだ！」

ポツチャマが口から泡を放つ。

決して早くもないが、遅くもない、そんな攻撃ではあったが、相手はイワークだ。

言ってしまうえば、もっと遅いポケモンだ。

多少いわおとしを食らいはしたが、次々とあわがヒットしていきイワークは戦闘不能になった。

「なるほど。なかなかやるね！」

でも、ボクの最後の1匹はそんなに甘くないよ！」

そうして投げられた最後のボール。

現れたのはズガイドス。硬い頭と突進が持ち味のポケモンだ。

対するポツチャマはというと、もともと緊張気味だったのに加え、先ほどの勝利が悪い方向に自信をつけさせてしまったのか。

「ポツチャマ。少し落ち着こうか。戻っておいで。」

ファイランの指示に背き、駆けだした！

(テンパって私の声が聞こえていない!?)

「おや。どうしたのかな？」

だが、こちらには好都合だ！ズガイドス、ずつき！」

ズガイドスの自慢の突進がポツチャマを襲う！

「ポツチャマ！一回態勢を整えて！そしたら戻っておいで！」

だがしかし、ファイランの声はポツチャマに届いていない。

「よしーズガイドス！続けてもう一度だ！」

再び迫りくる一撃に対しポツチャマは攻撃はおろか、避ける素振りすら見せない。

(ズガイドスのずつきでひるんじゃったか…!?)

二度目の衝撃に、なすすべなくポツチャマは倒れた。

「お疲れ様。」

(フカマルはすでに一戦戦ってるし、途中のトレーナーとの戦闘もあった。これ以上は無茶になるかな。)



ポツチャマをボールに戻し次なるボールを手取る。  
青をベースに黄色い爪のような飾りのついたボール。

早速だが、最初のジムにして切り札を切ることにした。

「お願い。フェローチエ……」

(あれが……噂に聞いた……全く未知なるポケモン……！)

ヒョウタも初めて見る白いポケモンが姿を現した。

と、その瞬間。

風を切る音と白い影が閃く。

気が付いた時にはズガイドスは地に倒れ伏し、その白いポケモンは既に己の主の下に帰還していた。

「ありがとね。」

(なんて素早さだ……！ボクもジムリーダーとしてそれなりに闘ってきたつもりではいたが、気が付く前に戦闘が終わっていたなんてはじめてだ！)

それに、あのポケモン、指示を出される前に動いていた。トレーナーの考えをわかっているのか……?)

「……ズガイドス。お疲れ様。」

ヒョウタはズガイドスをボールに戻しながらファイランのほうを向いた。

「……まいったな。まさか何も見えないうちにバトルが終わってしまうなんて。」

それも仕方ない。君が強くて、僕が弱かったただけだ。

うん。ポケモンリーグの決まりでは、ジムリーダーに勝ったトレーナーにバッジを渡すことになってるんだ。

さ、ポケモンリーグ公認の、コールバッジ、君に渡すよ！」

ヒョウタの手には灰色の丸みを帯びたフォルムのバッジ、コールバッジが握られている。

「ありがとうございます。でも、正直言うと、納得のいく勝ち方ではなかったです。」

ポッチャマの力量や、コンディションを把握しきれていなかった…」

「でも、君のフェローチェに僕のズガイドスが敗れたのは事実だ。」

「さあ、バッジを受け取ってください！」

「そう言いバッジを手渡す。」

「みんな初めはそうさ。ポケモンとの信頼関係だって一朝一夕じゃない。い。」

「でもそれに自分から気づけるトレーナーは案外少ないものだよ。」

「…ありがとうございます！」

「それに気づける君はこの先もっと強くなれる。頑張ってるね!!」

「そんな激励をもらいジムを後にする。」

ジムの建物を出たとたん、今まで気づいていなかった疲労感が体を襲う。

（…あ、疲れてるんだなあ。今日はここで泊しよう。）

そうしてクロガネシティにて宿をとることにしたのであった。

・  
・  
・

ポケモンセンターでの治療や諸々を済ませ、宿で一息つく。

（ポッチャマの様子、見ておこう。少し心配だし。）

「そう思いポッチャマをボールから出す。」

「びう…」

悔しさと、焦りと、申し訳なさのような表情を浮かべるポッチャマ。

ここまでの道のりは無敗で順調に進んできた。  
それだけに自分の暴走を原因とする敗北は精神的にダメージが大  
きいのだろう。

「ごめんね。もうちょっとあなたのコンディションに気を配れてたら  
……」

すると慌てた様子で首を横にふるポツチャマ。

「ありがとね。でもポケモンの負けはトレーナーの責任でもあるか  
ら。」

そういいながらベッドに腰を下ろしポツチャマを膝の上に乗せる。  
「だから一緒に強くなろうね。」

ポツチャマの頭をなでながらそう声をかける。

一緒に強くなろう。その言葉にポツチャマは安堵を覚えた。

この痛みは自分だけのものでもなくトレーナーだけのものでもな  
い。

仲間と一緒に乗り越えるのだ。

フィランは安心にしたような、リラックスした様子のポツチャマと  
少しの間、そのまま過ごしていた。

すると。

もう一つのボールが勝手に開き、飛び出したポケモンが一匹。

「……………」

当然、フェローチェだ。

無言のままこちらを見つめている。

恐らく彼女の言い分はこうだ。

「相手を倒したのは私。だから私を褒めるべき。そこは私の場所。」

無言でポツチャマを押しつけフィランの膝に頭をのせる。

仕方ないのでポツチャマを右ひざにずらし、フェローチェには左ひ

ざ枕で対応する。

「…妬いてるの?」

そう言うともたしても無言で、今度はフィランが小突かれた。

照れ隠しだろうか。

そんな相棒を可愛いな、なんて思いながら。

そうして夜は更けていく。

(ちよつと足痛くなってきたから降りて欲しいんだけど。

なぜか先に降りたら負けみたいになってるけど、私の膝は我慢大会会場じゃないよね?)

## 7、新たな姿、新たな仲間

僅かなトラブルこそあったものの、無事、クロガネジムを突破したファイランたちは次なる目的地を目指していた。

クロガネシティからコトブキシティに戻り、北の204番道路を進む。

もちろん、道中で野生のポケモンや他のトレーナーとの戦闘をこなしながら。

ポツチャマはクロガネジムでの出来事から立ち直りはじめ、より一層鍛錬に励んでいる様だ。

そんなポツチャマのやる気を買ったのことが、ファイランもバトルでは積極的にポツチャマを選んでいた。

そうして夢中で歩いているうちに次の町にたどり着いたようだ。

「えーと、ソノオタウン、花の町だって。」

マップを見ながら、現在地を確認する。

マップから目を離し、町の入り口から奥に目をやると、

「あ、あれかな…近くに行ってみよっか!」

沢山の花が咲いているのが見えた。

「わあ…キレイだね…」

一面に咲く花を眺めて思わず呟く。

言葉を失うとはまさにこのことで、ありきたりな感想を口にする。

ポケモンたちもボールから出して、みんなでこの景色を共有している。

まだまだ、旅は始まったばかりだが、さつそく美しい思い出ができたことに喜びながら、

つかの間の休息を終え、再び歩き出した。

ソノオタウンを後にし205番道路をさらに北へ。

その先には何やら薄暗い森が目の前に広がっている。

ハクタイの森。名前の通りハクタイシティの近く、205番道路内に広がっている森で、ここを抜ければ次の目的地であるハクタイシティにたどり着く。

ここにも野生のポケモンや、それを捕まえようとする人達、はたまたほかのトレーナーと勝負をするために待ち構えている人が集まっている。

「その君！僕と勝負だ！」

「受けて立ちますよ。ポツチャマ！」

そんな環境はむしろ願ったりかなったりであると言わんばかりに、ファイラン達はいくつものバトルをこなしていく。

「ポツチャマ！つつく！」

ポツチャマのくちばしが相手のポケモンにダメージを与える。

クロガネシティからここまで、ポツチャマのモチベーションはかなり高い水準できていた。

先ほどのつつくも威力は決して高くは無いシンプルな技ではあるが、しつかりと決まっていたようだ。

「くっ…僕の負けだ…！」

その証拠に、相手のポケモンは倒れましても勝利を収めた。

クロガネジムでの敗北からここまで、長くはないが確かな足取りで歩んできたポツチャマは自信を完全に取り戻した様子だった。

いや、取り戻したというよりもさらなる実力と自身を身に着けたというべきか。

そうしてバトルが終わり、ファイランの下にポツチャマが戻ろうとすると、

ポツチャマの体に変化が起こり始める。

「これは…進化…!」

進化。多くのポケモンが持つ、姿形を変化させ更にその能力も上昇する、大きな成長のポイントとなる現象。

ポツチャマは新たなステップに到達しようとしていた。

「ビュウウウー!」

体は一回り大きくなり顔つきも少し凛々しく。

ポツチャマはポツタイシへと進化した。

「…おめでとう! 進化したんだね。」

フィランは図鑑を開き改めて確認する。

「これからもよろしくね。ポツタイシ!」

ポツチャマの進化という一大イベントも終え、一行は破竹の勢いで森を抜け、ハクタイシテイまで突き進んだ。

「ついたね。ハクタイシテイ。」

いつものようにマップを確認し、ポケモンセンターを目指す。

・  
・  
・

「それでは、お預かりいたします!」

お決まりのセリフを聞きながら、ポケモンを預け回復してもらう。

その間フィランはある考え事をしていた。

(ハクタイジム…くさタイプのジムか…)

当然、次のジムのことだ。

(くさタイプ。ここに来るまでに森でも何度か戦ったけど、ポツタイシにもフカマルにもくさタイプに対して有効な攻撃技がないんだよね…)

そう、次のジムではくさタイプのポケモンとの戦闘がメインとなる。

いくら進化したとは言え水タイプのポツタイシでは分が悪く、フカマルもドラゴンタイプがじめんタイプの弱点をカバーするが別に有利というわけでもない。

そしてその二匹にはくさタイプのポケモンへの有効打が無い。

と、なるとだ、

(フェローチエに頑張ってもらおうか…)

奥の手ではなかったのか…ただでさえ最初のジムでも戦闘に出してるしな…などと考えながらも、

(まあ、しょうがないか！フェローチエもたまには出してあげないと退屈だろうし！)

と、ハクタイジムでは全面的にフェローチエの登板が決定していた。

ハクタイジムは緑の植えられた雰囲気の良い建物だった。さつきまでは。

数々の植物は1匹の虫くさポケモンたちに荒らしつくされ、トレーナーたちはその様子を眺めていることしかできなかった。

(ちよ、何よあれ！)

ジムリーダーのナタネさえ、その様子には驚きを隠せずにいた。

自分だって一端のジムリーダーだ。

強いトレーナーとポケモンだっていくつも見てきたし、それらと闘って来た。

だが、あれは、あまりにも規格外だ。

しかもそれを一つ目のジムを突破したばかりのトレーナーが従え



ているなんて！

それに早すぎて詳細はよく確認できていないが、見た目やむしタイプの技の威力から察するにあのポケモンはむしタイプを持っている。よりによって自分のくさポケモンたちが苦手とするむしタイプ。

幸い、むしタイプの攻撃の相性不利を打ち消すことができるロズレイドを連れてはいるが、それでもあのポケモンの前にはどうか……

色々考えているうちに挑戦者がすべてのトレーナーを倒してしまつた様だ。

これ以上考えても仕方あるまい。

「……ま、待ってたよー！

あたしがハクタイのジムリーダー！くさタイプの使い手ナタネ！

さつき見たとき、あなたは絶対にここまで来る！そう思ったんだけど、ズバリだったよー！

なんていうかそんな雰囲気をしている。

うーん！とにかくポケモン勝負しよーよー！

「はいー！よろしくお願いします。」

当然、挑戦に来たトレーナーに弱い姿は見せられない。

ナタネは自身を鼓舞するように言葉を吐きだし、目の前の恐るべき挑戦者と対峙した。

「もう最後の一匹ね。ロズレイドー！」

ここまでの闘いはまさに圧倒的なものだった。

目にも止まらぬ速さでとびかかるフェローチエにナタネのチェリンボとナエトルは反応すらできずに倒れた。

(最後の1匹はロズレイド、どくタイプを持っているからかくとうタイプもいまいちだし、むしタイプも効果抜群とは言えない……

あの技を使おうか……)

フェローチエもファイランが何か考えているのを察し様子をうかがう。

「フェローチエ！飛び跳ねる！」

「!!」

フェローチエが建物の天井すれすれまで飛び跳ねる。

「ロズレイドー！マジカルリーフ！」

ロズレイドが手の花びらから勢いよく葉を放つ。

しかし、高く飛び上がったフェローチエには当たらない。

飛び上がったフェローチエは、すぐに重力にしたがって地上に迫る。

そうして地に立つロズレイドに激突する。

衝撃の後、そこに立っていたのはフェローチエだった。

足元にはロズレイドが倒れている。

(たまに外すから心配だったけど、さすがに大丈夫だったね。)

ファイランの懸念は杞憂だった様で、フェローチエは涼しい顔をして勝利を掴み取った。

「あなたとそのポケモン、本当に強いね…はい！これ！」

少し悔し気なナタネから2つ目バッジ、フォレストバッジを受け取る。

「ありがとうございます。自慢のパートナーなんです。ね！」

フェローチエの方を向く。

当の本人は澄ました顔をしているが、少し嬉しそうにしているのがファイランにはわかった。

「それにしてもここまでコテンパンだとね…」

またいつかりベンジさせてよ！次は全力のパーティーで行くから！」

「それまでに私たちも、もっと強くなります！」

「そうだ！その、強いあなたたちに一つお願いがあるんだけど。」

「??」

・・・

お願い、というのを聞くため、フィランはナタネに連れられ、来た道を少し戻り、

ハクタイの森の出口近くまで来ていた。

「……、……。」

どうやら目的地にたどり付いたようでナタネが指をさす。

それは古びた洋館だった。

「見ての通り古い洋館なんだけどね、今はだれも住んでないみたい。それで、色んな噂が流れててね。

森の洋館のお化けポケモン、怪しい人影を見るって話もちらほら耳にするし。

あたしが調べればいいんだけど、中に入るのは…

ほら！あたし、ジムリーダーで色々あるからね！

ねっ、色々あるから。お化けが怖いとかじゃなくてね！

そういうことだから、調査をお願いしたいんだけど…」

「いいですよ。」

「やっぱり…？…ん？…え？…いいの？…」

「はい。いいですよ。」

「ほんとに!?じゃ、じゃあ調査お願いね!!」

そういうとナタネはそそくさとその場を立ち去ってしまった。

「…よし、行ってみようか。」

ナタネの話などほとんど聞いていなかったのように、なんのためらいもなく足を踏み出す。

すると。

「…どうしたの？ポツタイシ。」

ポツタイシがボールの中から何か伝えたそうにしていたのでボールから出し、話を聞こうとする。

グイグイ。

ポツタイシはフィランの手をとり引き返そうとしている。

「…ああ。ナタネさんの話を真に受けてるの？」

大丈夫だよ。お化けなんていないよ。いたとしてもゴーストポケモンくらいでしょ。」

そうしてポツタイシを宥めるが、依然、引き返そうとすることをやめない。

「…困ったな。一度引き受けちゃったしな。」

そんな呟きに反応するかの如く、もう一つのボールが勝手に開いた。

「フェローチエも、どうしたの?」

「……」

フェローチエは無言でポツタイシを担ぎ、ファイランに先に進むように促している。

なるほど、ポツタイシの世話を焼いているのを見かねて手助けに来てくれた様だ。

…まあ、ポツタイシは激しく嫌がってはいるが。

「ちよつと無理やり感あるけど、いつまでも、ない物にビビっててもしょうがないしね。行こうか!」

相変わらずの抵抗をやめないポツタイシをよそに、ファイランとフェローチエは洋館へと入って行った。

「…うーん。ちよつと埃っぽいかなあ。」

洋館内は誰も住んでないというだけあって少し散らかっていた。

おまけに電気も通っていないので薄暗い。

何かに足をとられて躓いたりしたら危険だ。

「フェローチエもポツタイシも気を付けてね。」

ポツタイシはもう観念したのか、フェローチエから下ろされて自分で歩いていた。

心の底からお化けなんて物を信じていないのだろう。

どんどんと先に進んでいくファイランとそれに追従するフェローチエ。

その後ろをおっかなびっくり進んでいくポツタイシ。

「今のところは少し散らかってるってだけで変わった物は無いけどなあ。」

ガチャリ、とドアを開き次の部屋を探索する。

フィランは部屋の本棚を眺めていた。

すると、ポツタイシが背後に何かを気配を感じる。

得体のしれない何かを目にしたくないが、それでも見て確かめずにはいられない。

そんな葛藤がポツタイシを襲ったが、体が勝手に後ろを見てしまう。

スーッ

ガチャ：

目の前で起きたことにポツタイシは言葉を失った。

この建物には誰も住んでおらず、今は自分たちしかいないはずである。

明らかに今、小さな女の子がこの部屋から出て行った！

足音も立てずに!!ドアを閉めて行った!!

ポツタイシは大慌てでフィランの下に駆け寄り、腕を引っ張り、ドアを指さす。

「ん？どしたの？…ドア開けっばだったね。ありがとうね。」

フィランはポツタイシがドアを閉めたと勘違いしている様子だ。

「ここもなんもなさそうだね。次行こっか。」

フィランはポツタイシの慌てた様子を確認するが、

まあここに来た時からあんな調子だし。くらいにしか捉えていない。

そうして隣の部屋に入った時、それは起こった。

ザツ：ザザー！

「ん？なんでテレビが…」

当然ここには電気は通っていない。

「ツ……………」

驚きすぎたポツタイシが声にならない悲鳴を上げる。

ズドン!!

次の瞬間にはフェローチエがテレビに蹴りを叩き込んでいた。

「フューイ！」

すると、テレビの中からみたことのないポケモンが姿を現した。

「ポケモン…！なるほど！このポケモンが電気を供給してたのかな？」

「素晴らしいながら凶鑑を確かめる。」

ロトム。プラズマでできた体を持ち、電化製品などに潜り込んで悪さをしたりするポケモンだ。

フェローチが続けて蹴りを入れようとするがすり抜けてしまう。

(なるほど！ゴーストタイプか！)

ロトムはゴースト／電気タイプのポケモンだ。

フェローチエのかくとう技も通じず虫技も今一つ、ポツタイシも相性は不利。そもそもビビり散らして役に立たなそうだが。

更にふゆうという特性を持ちフカマルのじめん技も効かない。

が、

「そっだ！フカマル！」

何か思いついたファイランはフカマルを繰り出す。

「かみつく!!」

フカマルはボールから飛び出ると同時に浮いてるロトムにかみついた！

かみつくはあくタイプの技でゴーストタイプには効果抜群だ。

「フューウー！」

慌てたロトムがテレビに戻ろうとする。

「フカマル！離さないでね！」

しっかりとかみついたフカマルが、ロトムがテレビに戻るのを阻止する。

（今のうちに…！）

ファイランは空のモンスターボールを手に取り、ロトムに投げた。

ギリギリでフカマルはロトムを離し、ボールはロトムに命中する。

ロトムを内包したボールが地面に落ち、幾ばくか揺れる。

…。

揺れが自然とおさまった。ファイランはロトムを捕獲したのだった。

「よし、この子が噂の原因だったのかな。」

ロトムを捕まえた後、一度洋館から出たファイラン達。

洋館の入り口で先ほどロトムを捕まえたボールを開いた。

「勢いで捕まえちゃったけど、ちゃんと君の意思も確認しときたくてね。」

ロトムに話しかける。

「ここでイタズラしてるよりも面白いもの、見せてあげられると思うからさ、私たちとおいでよ。」

「フューウー！」

「よし！決まりだね！」

ファイラン達の旅路に新たな仲間が加わった。

## 8、電球付き扇風機

森の洋館でロトムを仲間に加えたファイラン達は、一先ずナタネへの報告もかねてハクタイシティへ戻って来た。

「そう、じゃあそのロトムを捕まえて一件落着つてことかな！」

「はい。もう大丈夫だと思います。」

ファイランの報告を聞き、ナタネは胸をなで下ろす。

：本当の原因が解明されたのか、定かではない。

だがファイランはもう解決されたものだと思わないし、当のロトムもイタズラをしていた自覚はあるようで証言は合致してしまう。

真実を知るのはポツタイシのみか。そのポツタイシも、もうあの場所には行きたくないのだから多くは語らないことだろう。

「じゃあ、私たちはこれで。」

「うん！ありがとうございます!!」

・  
・  
・

ハクタイシティで一晩過ごし、翌朝から次の町に向かって移動していた。

206番道路、207番道路を抜けてたどり着いたのはテンガン山。

シロナに拾われた、ある意味始まりの場所。

「うーん。」

とはいえ、相変わらず見覚えのある場所ではない。

「ここで倒れてたとはいえ目を覚ましたのはここじゃないし…

まあ何も見覚え無くて…うーん。」

誰に言うでも無く呟く。

「そのうち何か思い出したらそれはそれで…思い出さなくても何とかなるでしょー！」



そんな独白をしながらテンガン山の洞窟の出口にたどり着く。

次の目的地、ヨスガシテイへの道順的にはテンガン山はちよこつと通るだけなのであつという間に通過してしまう。

そのまま208番道路も通過してヨスガシテイへ入る。

「付いたね。ちよつと休憩しようか。」

...

...

・

「困ったな。ジムリーダーいないなんてことあるんだね…」

ヨスガジムの前でファイランは一人、言葉を漏らした。

ヨスガシテイにたどり着き、休憩もそこそこにジムに挑戦しに来たファイラン達。

だが、ジムのスタッフよりジムリーダーが不在で現在挑戦できないことを知らされる。

「今日は戻らないらしいし、待ってても時間もつたいないしなあ…」

今日の前にある選択肢は二つだ。

一つはジムリーダーのメリツサがこの町に戻ってくるまでこの町に滞在する。

もう一つは先に進んでしまい、後からヨスガジムに挑戦する。

「まあ後から戻ってくるほうがいいかな…」

とりあえず今は先に進むことにした。

「ん、あれ…なんだろう？」

そうしてヨスガシテイを後にしようとしたとき、ファイランの目にあ  
るものが移った。

「ポフィン料理ハウス。そんなのあるんですね。」

「はい！こちらではきのみを料理してポフィンを作ることができると  
ですー！」

ポフィンとは今このスタッフが言った通り木の実から作られる  
ポケモン向けのお菓子だ。

それをここでは調理することができそう。

(みんなに作ってあげるのもいいかも…)

そう考えたフィランはせっかくなのでポフィン作りを体験していただくことにしたのだった。

「できた…！」

木の実が入った生地がこげないように、鍋をかき混ぜること数分。段々鍋の中身が固まっていき、ポフィンが完成した。

「よし…！」

フェローチエ達を全員ボールから出し、ポフィンを手渡す。

フカマルなんかは喜んで勢いよく食べている。

ポツタイシもロトムも嬉しそうだ。

「おいしい？」

自分の横に入りフェローチエに問いかける。

フェローチエは小さく首を縦に振った。

その表情は、傍から見れば普段と変わらないように見えるが、フィランにはちゃんと喜んでるように見えた。

「よかった。また機会あったら作るね。」

みんなが喜んでくれるなら作り甲斐がありそうだ。

楽しい時間を過ごしたフィラン達はポフィン料理ハウスを後にし、

次の町へと向かうことにしたのだった。

・  
・  
・

「さすがに疲れた…」

209番道路からズイタウン、210番道路、215番道路を突破しトバリシティへ入る。

通過しただけのヨスガシティも含めるとかなりの距離を移動した。

それに加えて通過してきた道路は沢山のトレーナーが集まっており、かなりの数の戦闘をこなしながらの移動となった。

日も暮れてきているし、ファイランもポケモン達も疲労が溜まっている。

「ジムは明日にしようか…今日は休もう…」

そんなわけで今日は早めに休むことにした。

「へえ…色んなものがあるんだね…」

少し休憩した後、まだ時間があつたファイラン達はトバリデパートに来ていた。

特に何を買うわけでも無いがせっかくなので覗いてみようと思つたわけだ。

すると、

「フューウー！」

「ん？どうしたの？ロトム。」

ロトムが勝手にボールから出てきてしまった。

「あつ！ダメだよロトム！」

なんとロトムは家電売り場の扇風機に勝手に入り込んでしまったのだ。

「ご迷惑をおかけしました…」

何とかロトムを家電から引き離し、デパートのスタッフにお詫びをする。

因みにロトムが入り込んだ扇風機は責任を持って買い取った。

「ロトム。お店の物にはイタズラしちゃだめだよ。」

「フューウー！」

宿に着いたファイランはロトムに言い聞かせていた。

だが、当のロトムは聞いているのかいないのか。

またしても扇風機に入り込んでしまった。

「もう…」

扇風機ごとロトムをボールに戻したファイランは、ある人物に電話をしていた。

「なるほど。フォルムチェンジでタイプも変わると。」

『そういうことだ。確認されてる限りではほのお、くさ、みず、こおり、ひこうのそれぞれのタイプとでんきタイプを持った姿に変わることが確認されている。』

「勉強になりました！夜分遅くにすいませんでした！」

『いや、構わないさ。これから頑張ってくれたまえ。』

「はい！ありがとうございます。」

電話の相手はナナカマドだ。

ロトムの姿が変わったことについて、ポケモンの進化についての権威であるナナカマド博士なら何か知っているのではないかと思い、電話したのだった。

答えはフォルムチェンジという、一部のポケモンのみが持つ姿が変わる能力だった。

進化とは別の現象だったがさすがはナナカマド博士、ロトムのフォルムチェンジについて事細かに教えてくれた。

(つまり今のロトムはひこうタイプを持つてるってことか…)

これは明日のトバリジムで大きな戦力となるだろう。

「ロトム！次はよろしくね！」

「フェウ？」

ロトムはいまいちわかってないようだが…次のジムではこのロトムが戦闘のメインとなるだろう。

翌日、ファイラン達は当然トバリジムに来ていた。

トバリジムは道場のような作りの建物にレールに動く壁のような物が配置されている。

「ガバイト！ダブルチョップ！」

「くっ！ゴリキー…！」

武道家のようないでたちのトレーナーのゴリキーを撃破する。

このガバイトはトバリシティに来る前の道路でのトレーナーたちと連戦していたなかでフカマルから進化した。

丸っこい愛らしいフォルムから、キリっとした顔つきの、よりドラゴンらしいフォルムに進化し、ダブルチョップという新しい技も習得した。

生まれたばかりの頃から考えるとずいぶん頼もしくなったな。なんて考えながらジムのギミックを攻略していく。

「俺たち空手四兄弟！愛の拳をお見舞いしてやるぜ！」

ジムリーダーの手前、最後のトレーナーとのバトルが始まる。

「行け！ゴリキー！」

「ロトム。行くよ……！」

ジムリーダーとの闘いの前にロトムの調子を確認しておこう。

「ロトム、エアスラッシュ！」

「ゴリキー！かわしてローキックだ！」

ロトムが放った風の刃はぎりぎりのところでゴリキーに回避されてしまった。

その隙に接近してきたゴリキーのローキックがロトムに命中する。

幸い、ひこうタイプとなっているロトムにかくとう技は大したダメージでは無い。

「なら、ロトム。でんじは！」

ローキックの衝撃で少し技の出が遅れはしたが、今度はしっかりと命中した。

ロトムの電流によりゴリキーは麻痺してしまった。

「なに!?ゴリキー再びローキックだ！」

相手はゴリキーに指示を出すがしびれていて動けない様子だ。

「今だ！もう一回エアスラッシュ！」

今度こそ風の刃がゴリキーに直撃する。

効果抜群のひこう技を受けたゴリーキーにもう闘う力は残って  
おらず、そのまま地に伏した。

「よし。お疲れ様。」

相手は続いてゴリーキー2度を繰り返したが今度はエアスラッ  
シュが初めから命中し、難なく勝利を収めた。

「ちよっと回復しておこうね。」

ロトムにキズぐすりを使い、ロトムを万全の状態にする。

そして、ジムリーダー、スモモと対峙した。

「初めまして。よろしくお願ひします。」

あたし、ジムリーダーのスモモって言います。どうしてジムリー  
ダーになれたのか、強いつてどういうことか、自分でよくわかってな  
いんですけど、ジムリーダーとしてあたしなりに真剣に頑張るのでど  
こからでもかかってくるって下さい！

「ファイランです。よろしくお願ひします。」

「アサナン！」

「ロトム！行って！」

ファイランのロトムに対してスモモはアサナンを繰り返した。

「ロトム、エアスラッシュ」

「アサナン。みきりです！」

ロトムの放つ風の刃を見切ってかわすアサナン。

「なるほど、でも攻めなきや勝てませんよ！」

ロトム、続けてエアスラッシュを撃って！」

二度目の攻撃はかわせなかったのか、アサナンはエアスラッシュを  
もろに食らい倒れる。

「あなたの言う通りです。では次はこちら攻めに回らせていただきま  
す！」

そう言いながらスモモは2匹目のポケモン、ルカリオを繰り返し  
た。

（ルカリオ！なるほど、かくとうタイプの弱点をはがねタイプでカ

バーしている。

ガバイトに交代してもいいけど、隙ができてしまう。）

「ルカリオ！はどうだん！」

「ロトム！でんじは!!」

ロトムのでんじはとルカリオのはどうだんが交差する。

お互いの攻撃をお互いに受け、ロトムは僅かなダメージを負い、ルカリオは麻痺する。

（よし、とりあえず麻痺させえることはできた。ならば…）

「ロトム、エアスラッシュ！」

「ルカリオ！」

しかしルカリオは麻痺のせいで機敏に反応することが叶わず、エアスラッシュを食らってしまふ。

「ルカリオ！はどうだんです！…ルカリオ?!」

スモモの指示に対し、ルカリオは動かない。

「まさか!?!」

エアスラッシュは技を受けたポケモンを一定の確率でひるませることがある。

その一定の確率を引き当てたのだ。

「ロトム。続けてエアスラッシュ。」

二度目のエアスラッシュの前にルカリオは倒れた。

（まさかここでひるみを引くとは…いたずら好きな性格が幸いしたのかな。）

そんなことでひるまされた側は堪った物では無いが…

その後、スモモの3匹目であるゴリキーもロトムが難なく突破しファイランの勝利で今回のバトルは幕を下ろした。

「…はい。あたしの負けです。」

久しぶりに負けちゃいました。でも、色々と教わりました。

ですので、このジムバッジ、どうぞ受け取ってください！」

ファイランはスモモから3つ目のバッジ、コボルバッジを受け取った。

「ありがとうございます。」

「それと、また私とバトルしてもらえませんか？

今度はあなたの全力が見てみたいです！」

「…！ぜびー！また闘いましょうー！」

全力というのはフェローチエのことだろう。

スモモのかくとう使いとしての嗅覚だろうか、見せていない強力なかくとうポケモンの存在を察知したのか。

再戦を約束しファイランは次の目的地へと向かう。



## 9、断裂される記憶

「フェローチエ、とびはねる！」

「ムウマーヅ、シャドーボール！」

黒い球をムウマーヅが手元から放つ。

しかし、宙高く飛び上がったフェローチエには当たらず、その黒球は空を切る。

そして空中から帰還したフェローチエがムウマーヅを襲撃した。

「ワタシ、ビックリデース！」

アナタもアナタのポケモンもとてもつよい。

そのつよさをたたえ、このジムバッジわたします！」

「ありがとうございます…」

5人目のジムリーダー、メリツサはファイランにレリックバッジを差し出した。

それを受け取ろうとした瞬間。

「あっ…」

ファイランの手はメリツサの手の横を通り過ぎ、体ごとそのまま床へ倒れこんだ。

「！」

否、完全に倒れることはなかった。

横にいたフェローチエがすかさずファイランの腕を掴み、態勢を持ち直させる。

なぜか今日に限って戦闘後にボールに戻すのを忘れていたのがケガの功名となった。

「ダイジョウブですか？」

「…すいません。少し眩暈がして。」

「アナタもつかれがたまってるのデシヨウ。ゆっくりやすむとイイですよ。」

「ありがとうございます…」

そういい、フェローチエとともにジムを後にする。

「ありがとね。昨日からやっぱり調子悪いみたい……」

「……」

今日はゆつくり休めと、フェローチエが視線で訴えかけてくる。

「うん。そうだね。今日は早寝しよう。」

~~~~~

時は少しさかのぼり、トバリジムに続き、ノモセジムも難なく突破したファイラン達。

そろそろヨスガのジムリーダーも戻っている頃だろうと、ノモセシテイからヨスガシテイに戻ることにしたのだった。

「ええ？明日戻ってくる？」

「はい。申し訳ありませんが明日ならジムに挑戦していただけます。」

「わかりました……。じゃあまた明日来ます。」

ヨスガシテイに戻ってきたのはいいものの、ジムリーダーは明日まで戻らないという。

明日なら挑戦できると考えるべきか、また一日足止めを食らってしまつたと考えるべきか。

しかし戻ってこない物は戻ってこないので一日時間を潰さねばならない。

「そうだ！あそこ行ってみよう。」

ファイランは今日の時間の使い方を思いついたようで、再びヨスガシテイを出て、209道路を歩いて行った。

・  
・  
・

そうして到着したのはカンナギタウン。

ズイタウンの来たある小さな町である。

ここにはシロナの実家があり、彼女の祖父母が住んでいる。

ファイランも彼らとは面識があり、せっかくなので挨拶しておこうと

考えたわけだ。

「ごめんください。フィランです。」

「おお、フィランちゃんじゃないか。どうしたんだい？」

シロナの実家を尋ねると、中からシロナの祖母が出迎えてくれた。

「そうかい。旅に出たことはシロナから聞いていたけど、わざわざこんなところまでねえ…」

「いえいえ。せっかくですし。それにお二人にもお会いしたかったですし。」

それから、少しの間歓談を楽しんだ。

「それでは、私そろそろ行きますね。ありがとうございました。」

「もう時間かい。この後はヨスガまで戻るのかい？」

「はい。でもその前にせっかく来たのでほこらも観て行こうかなと思っていました。」

「そうかいそうかい。ほこらなんて何にも無いところじゃがの。気を付けての。」

「はい！お二人もお元気で！」

二人に挨拶をし、フィランはシロナの実家を後にした。

カンナギタウンの中央にある祠、その奥の遺跡にて二人の男が何やら密談をかわしていた。

「そうか。ではその方法であれば、あのポケモンの力を操ることもできる。と。」

青髪の男性は自身の部下であるその男に問いかけた。

その問いに対してもう一人の男が恭しく答える。

「恐らくは…。ですが万が一もごぎいます。私と彼女で二つ目のプランも進めております。この二つがあればアカギ様、アナタの願いも…。」

「ああ。手札は大いに越したことはない。期待しているよ。」

「恐縮です。」

「さて、戻るとしよう。君も研究で忙しいだろう。」

「かしこまりました。」

部下の男は入り口付近に向かって呼び掛けた。

「おい！帰るぞ！……誰だ!？」

「ん？」

町の中央にある祠、その奥の遺跡を訪れたフィラン。

遺跡に入るや否や誰か入り口近くに立っていることに気づく。

きれいな黒い髪を背中あたりまで伸ばした女の子だ。

(この子、一人かな？町の子？)

気になったフィランは声を掛けることにした。

「ねえ。君、一人？町の子？」

フィランの問いかけにその女の子は首を横に振った。

「迷子？お父さんかお母さんは？」

「お父様は……」

そっぴいなながら壁画の方向を指さす。

その先には黒髪をオールバックでまとめたメガネの男と、彼と何かを話している青髪を逆立てた男がいた。

その二人は会話の内容までは聞こえないが何かを話している。

(あの人、どこかで……)

メガネの男性に既視感を覚える。

記憶を失くす前どこかであったことのある人なのだろうか？

今までそんな人物は一度も現れなかった。だが、もしかするとこの人は自分を知っているのかもしれない。

(あれ、なんか頭痛と眩暈がしてきた。)

しかし、思い出そうとするとどうにも体が不快感を訴える。

まるで記憶が呼び起されるのを拒否するかのように。  
そんなとき、

「おい！帰るぞー！……誰だ？！」

メガネの男性がこちらに振り向き自分の娘に声を掛けた。  
と、同時にフィランにも気づいたのだろう。

瞬間、男性の顔と声を認識したフィランの意識が飛んだ。

「なんだ？！」

メガネの男性は状況を理解できずにいた。

自分の娘の横にいた少女が急に倒れたのだ。意味が分からないのも無理はない。

「まあいい。先ほどの話を聞かれていたかもしれませんが。ここで処分してしまいますか？」

男は自身の仕えるその人物に確認をする。

「どうしたものか。大した内容では無いが……」

自身の懐からモンスターボールを取り出す。

すると倒れているはずの少女の荷物からモンスターボールが開かれるのに似た光が放たれる。

「っ！今度はなんだ！」

次の瞬間、その少女は消えていた。

・  
・  
・

「ん……」

フィランは見知らぬベッドの上で目を覚ました。

非常にデジャヴを感じたが、前回と違うことがある。

(遺跡に行つて、女の子を見つけて、父親もいて、アレ……?)  
自分が何をしていたか覚えている。

そのことを確認し、周りを再度確認するために体を起こす。すると自分の手が何かに掴まれていることに気が付く。白くて細い腕から伸びた手が自分の手を掴んでいる。

「……………」

「おはよう…フェローチエ。」

べしー！

軽く頭を叩かれる。

冗談ぽく言ってみたが怒られてしまった。

「ごめんごめん。ありがとうね。」

何が起きたのかまだ把握できていないが、フェローチエはここで見守ってくれていたようだ。

ガチャ

「おや、目覚めたかい。」

ドアが開き、シロナの祖母が現れた。

「そうですか…(´・`・´)迷惑をおかけしました。」

ファイランはシロナの祖母に事の経緯を聞いた。

ファイランが出て行って数十分後の出来事だった。

シロナの祖母は戸を叩く音に気付き、また誰か尋ねてきたと玄関を開けた。

「おや…あんたファイランちゃんの…？どうしたんだい!？」

するとフェローチエが、気を失ったファイランを抱きかかえて立っていた。

一先ずファイランを家に入れベッドに寝かせてくれたのだという。

「いやいや。いいんだよ。」

その子があんたを運んできた時には何事かと思ったけどねえ。」

「本当にすみません。」

「いいんだって。それにしても、あんたいいポケモンを持っているねえ。」

その子、あんたを寝かせてからもずっとそばを離れなかったんだよ。

こんなにトレーナー思いなポケモンはなかなかいるもんじやないよ。」

「本当、感謝してもしきれないです。」

「ふふ。大事にするんだね。」

その後、シロナの祖母の提案で一先ず一泊していくことになった。時間も遅いし気を失っていたのにそんなにすぐ動くもんじやないと少しお叱りもうけてしまった。

「本当に何から何までお世話になりました！」

「いいんだよ。今度こそ、本当に気を付けてね。」

翌朝、フィランはヨスガシティに戻るためカンナギタウンを後にした。

そして挑んだジム戦。

勝利することはできたが、メリッサのゴーストポケモン達に苦しめられ、最終的にはフェローチエも出すことになってしまった。

自分でいうのもアレだが、今日はポケモン達への指示もいまいちだった。

まだ全快では無いのだろう。フェローチエの言う通り早く休んだ方が良さそうだ。

ポケモンたちの回復も終え、宿をとり一息着く。

あの時の男の顔も、声も、思い出せない。

それでも何か自分の記憶のカギになるかもしれない、と考える。

(…?)

無意識に見下ろした自分の手が震えていることに気付く。

「…う・なんだろう…知りたいのに、思い出したく無い…。」

その手の震えは、昨日と同じく自分の手をとってくれる存在によって止められた。

「フェローチエ…ありがとう。」

「……」

また勝手にボールから出てきたフェローチエはファイランの手を強く握る。

「ねえ。今日は一緒に寝てくれない？」

そうしてファイランはフェローチエの腕の中で眠りについた。



## 10、水と鋼

「ん……」

朝の訪れに、フィランは閉じていた目を開いた。

「…ビックリした。」

目を開けるといきなり飛び込んできたのは顔。

昨晚一緒にベッドにはいったフェローチエの顔だ。

「……」

普段フェローチエの寝顔をまじまじと見る機会などそうそう無い。

思わず見つめてしまう。

(うーん。きれいな顔してやがる…まつ毛長いな…)

そうして見とれていると、

ぱちっ

フェローチエが急に目を覚ました。

「わ。」

唐突に目が開くからビックリして声をあげてしまう。

それに、今まで見つめてたことがばれてしまった。

少し恥ずかしくなりとっさに目を逸らそうとする。

「あっ」

だがフェローチエの両手に阻まれる。

「……」

今までのお返しとばかりに今度はフェローチエに見つめ返されてしまう。

「ちよ、ちよっと、フェローチエ…!」

目をそらそうにも顔を抑えられているのでそれもできない。

なんだか恥ずかしくて顔が熱を帯びていくのを感じる。

それが余計に恥ずかしくて目を瞑ってしまう。

(これならどうだ!)

これなら大丈夫。そう慢心していた。

(えっ)

フェローチエの顔が近づいてくるのを感じる。

「ま、待って！フェロ…」  
ゴン。

そのままフェローチェの額がファイランの額にぶつけられた。  
もちろん軽いが所謂、頭突き、というやつだ。

「…………おはよう…」  
目を開けて、挨拶をかわした。

朝から意味も無くドキドキさせられたファイラン。  
足早にヨスガシティを出発し、ミオシティに来ていた。

「ポツタイシ！なみのり！」

ポツタイシの起こした水流が相手のイワークを襲う。

「よしー！」

どうやら今の一撃で敵はダウンのようだ。

ファイラン達は他に用があるわけでもなく早速ジムに挑戦していた。  
同じようにジムの中で待ち構えているトレーナーを撃破しジム  
リーダーのもとへと向かう。

「次は俺が相手だ！行け！ハガネール！」

また次のトレーナーとのバトルが始まる。

(とりあえずさっきはポツタイシだったから次はガバイトに…)

相手のポケモンに対し何を繰り出すか思考をまとめるさなか。

「ビュウ！」

(…?どうしたの?次のバトルも出る?わかった。)

先ほど戦闘を終えたばかりのポツタイシが次も闘いたいと言っ  
ている。

「…じゃあ頼んだ！」

「ハガネール！いわなだれだ！」

「なみのりで応戦して！」

岩と水の波がぶつかりあう。

正面から互いの威力を相殺しあいどちらも攻撃は通らない。

「ならば！ハガネール！アイアンテールだ！」

ハガネールが尻尾を振り回す態勢に入る。

だがあの位置ではポツタイシには届かない。

（あれじゃ避けるまでも無いかな？）

「：ポツタイシ。今のうちに少し近づいて。アイアンテールを避けたら至近距離で攻撃しよう。」

素晴らしいポツタイシが少し距離を詰めた時。

「!?」

ハガネールの尻尾が降りぬかれた。

その尻尾自体がポツタイシにあたることはなかった。

「まずい！ポツタイシ！急いでメタルクロー！体をまもって！」

ハガネールは近くにあった岩、先ほどのいわなだれの岩にアイアンテールを放っていた。

その岩はハガネールの尻尾によって砕け、岩の散弾となってポツタイシに降りかかる。

取り急ぎメタルクローを体の前で交差させ、少しでもダメージを軽減させる。

とっさの防御の甲斐もあってダメージはそこまで大きくは無かった。

だが大きく隙をさらすことになってしまう。

「今だ！ロツクカット！」

ハガネールは自身の体を磨き素早さを大きく上げた。

「続けてたたきつける！」

素早さの上があったハガネールが勢いよくポツタイシにぶつかる。

「ポツタイシ！態勢を整えて、そしたら反撃しよう！」

だが、素早さの上があったハガネールにこちらの攻撃を当てることは難しく、翻弄される一方だ。

幾度か攻撃を外したポツタイシはハガネールの動きを見つめ、静かに狙いを定めようとしている。

すると、ポツタイシの体が光を放ち始めた。

「あれは！」

「ハガネール、たたきつけるだ！これで止めだ！」

ハガネールがポツタイシに迫ろうとする。

その時、光が収まり一匹のポケモンが勢いよくハガネールに向かって飛び込んだ。

そのまま地面に激突するハガネール。

土煙の中から姿を現したのはポツタイシ。ではなかった。

「エンペルト……！」

姿を現したのは三叉の槍のような、王冠のような嘴を持つ、皇帝の風格を漂わせたポケモン。

ポツタイシはエンペルトに進化した。

そして素早さのあがったハガネールを上回る速さを持つ攻撃、アクアジェットで反撃に出た。

「これなら行ける！エンペルト！続けてアクアジェット！」

エンペルトは距離をとりハガネールび再び突っ込んだ。

2度目の攻撃を受け更に態勢を崩したハガネール。

そこに追い打ちを掛ける。

「なみのり！」

ポツタイシの時とは比べ物にならない、怒涛の波がハガネールを流し去った。

「お疲れ様。」

新たに進化したエンペルトに声を掛ける。

出会ったときから比べてずいぶんとたくましくなった物だ。

いいキズぐすりを使いエンペルトのケガを治療する。

「よしー行こう！」

目指すはジムリーダー、トウガン。

だが新たにパワーアップしたエンペルトならきつと大丈夫だろう。

「ほう！それはクロガネのジムバツジ！  
なるほどなるほど！私の息子を倒したか！」

(…親子なのか…逆になるほどだなあ)

トウガンの発言にはがね使いの息子がいわ使いなんてベタな…なんて思いながらフィランは対峙する。

「まああいつはまだまだ未熟者だからな。

息子のヒョウタに代わってこの私、トウガンが相手をしてくれようぞ！」

「ええ、よろしくお願いしますね！」

「いけ！ドーミラー！」

「ロトム！」

いきなりエンペルトを出さなかった事にはちゃんと理由がある。

エンペルトははがね技を半減できるが逆に効果抜群になる技も持っていない。

一先ずロトムで様子見、おにびやでんじはでサポートしてからエンペルトやガバイトに展開していく流れだ。

「ロトム！シャドーボール！」

この場合は相手がたまたまエスパーだったのでシャドーボールを撃つプランに変更となったが。

「ドーミラー。さいみんじゅつだ。」

シャドーボールが命中する。

ドーミラーを倒す事には成功したが、代償としてさいみんじゅつにかかりロトムは眠ってしまう。

「行け！トリデプス！」

「戻って、ロトム。エンペルト！」

眠ってしまったては戦闘にならない。ロトムを下げエンペルトに出してもらおう。

「エンペルト！アクアジェット！」

「トリデプス、てっぺき！」

トリデプスが守りを硬め、エンペルトがそこに突っ込む。

(ほとんどダメージ無いな…)

ただでさえ耐久の高いトリデプスがてっぺきまで積んだとなると、アクアジェット程度の火力ではキズ一つ追わせられないようだ。

「ストーンエッジだ！」

鋭い岩がエンペルトを襲う。

「受け止めて！そのままなみのり！」

だが、エンペルトの耐久もかなりのものだ。

ストーンエッジを簡単に受け止め、返しのなみのりを放つ。

「アクアジェットだ！」

なみのりの勢いもそのままにアクアジェットをお見舞いする。

激しい水流のごとき連続攻撃にさすがのトリデプスも耐えきれなかった様だ。

「ふむ…最後の1匹となってしまったか、ハガネール！」

「このまま押し切るよ！エンペルト！」

「なみのり！」

「じしんだ！」

お互いの技が交差する。

激しい揺れと水流の後、2匹のポケモンはお互いギリギリの状態ですごに立っていた。

「もう一度じしん！」

「ツ！アクアジェット！」

じしんが起る前に、アクアジェットを叩き込む。

「間に合え！」

間一髪、ギリギリでエンペルトがハガネールに激突する。

「ビュウ……！」

ハガネールを下し、水と鋼の皇帝が勝者となった。

「ツよし！お疲れ!!エンペルト！」

戦闘を終え、エンペルトが堂々とした足取りでフィランの下に戻ってくる。

ポツチャマの頃だった大はしやぎで駆け寄ってきそうな物だったが、成長したんだなあと感慨深くもなる。

「私の自慢のポケモン達を倒したその強さを認め、このマインバッジを渡そう！」

トウガンから差し出されたバッジを受け取る。

「ありがとうございます。」

「それと、君のエンペルト、なかなかガッツのある、まさしく鋼の精神を持っている。」

「これも持つていくと良い。」

「これは？」

「ラスターカノンの技マシンだ。きっと役に立つだろう。」

「…ありがとうございます！」

新たにはがねタイプを身に着けたエンペルトも、はがねポケモンのプロフェッショナルからの評価に嬉しそうにしている。

「この先も頑張れよ！」

「はい！」

激励を受け取り、フィランはジムを後にした。

「やー。今日はなんか疲れたな。今日も早めに休もうか。」

本日も宿をとり、一息ついていたフィラン。

なんだか今日のジムは濃度が高くいつも以上の充足感と疲労感があった。

シャワーも済ませベッドに入ろうとする。

「…」

朝の出来事を思い出し一瞬固まってしまふ。  
すると、またしても勝手にボールが開く。

「ん？エンペルト。珍しいね。」

出てきたのはエンペルトだった。

「今日は大活躍だったね、お疲れ様。」

エンペルトと一緒にベッドに腰掛け、今日のジム戦をねぎらう。

「そういえば、最初のジム戦の時もこうして話したね。」

前とは違いエンペルトになって膝の上に乗せるのは無理が出てきてしまったが。

「あの時から、ずいぶん強くなったんじゃない。」

「ビュウ！」

エンペルトはここまで育ててくれたお礼を言っている様だ。

「ありがとうね。でもアナタ自身の頑張りがあってこそだよ。」

「それに！私たちはまだまだやることがあるし、限界も見えてないから。」

「これからもよろしくね!!」

「ビュウ！」

「よし！今日はもう寝よう！」

更に成長した仲間との絆を確認して、明日からまた頑張ることを心に決めた。

エンペルトはどさくさにまぎれてベッドと一緒に入ろうとしたがフェローチエに阻止された。



そのあとフエローチエはベッドに侵入した。

## 11、美しき砂竜

「あ~~~~~さむ…」

ファイランは肩にうつすらと積もった雪を払いながら寒さに身を震わせた。

「豪雪の216番走道路を踏破したどり着いたのはキツサキシティ。シンオウ地方でも北に位置する雪深い町だ。」

「ちよ、ちよつと休憩しよ…」

「これだけ雪に降られてジムに直行できるわけもなく、先に今晚の宿を抑えておくこととした。」

宿で一息つき、ようやくキツサキシジムに挑戦することにしたファイラン達。

「ジムの中も氷だらけか…」

ジムの中も一面氷、雪玉といった趣で室内だということになかなか寒い。

「寒いな…ちよつと悪いけどさつさと終わらせちやおうか!」

幸いにもここはこおりタイプのジム。

早めに終わらせて熱いシャワーでも浴びたい。そんなノリで今日はフェローチエメインでの戦闘が決定した。

「インファイトオー!」

フェローチエの蹴りが相手に突き刺さる。

こおり、あくタイプのニューラにはひとたまりもなく、一撃で戦闘不能となった。

こおりタイプのジムはフェローチエには相性が良い。

凄まじい勢いで道中のトレーナー達を一蹴し先を目指す。

その後も次々とトレーナー達を撃破していく。

ジムのギミックである氷の床に運ばれ、とうとうジムリーダーの元へ。

「スズナに挑戦？いいよ！強い人待ってたし！」

「ただどあたしも気合入ってるから強いよ。ポケモンもオシヤレも恋愛も全部気合なのッ！」

「そこんどこ見せたげるから覚悟しちやってよね！」

「……よ、よろしくお願いします！」

確かに気合がなければこの寒いジムの中でその薄着は無理だろう。そんなフィランの感想は誰に聞かせるでもなく、勝負は始まった。

「ユキカブリ！」

「フェローチェ！一瞬で終わらせよう！」

その通り、勝負はまさしく一瞬だった。

「インファイト！」

フェローチェはいつものように、敵に急接近し強烈な打撃を叩き込む。

そもそもこのスピードについて来れるポケモンなどそうそうはない。

ジムリーダーのポケモンですら一撃で屠り去る。

「かくとうポケモン！なら！」

スズナの次の手はチャーレム。

エスパー、かくとうを持つポケモンでかくとう技に相性がいい。

だが、その程度ではフェローチェは止まらない。

「チャーレム！しねんの頭突き！」

「フェローチェ！」

チャーレムがフェローチェに向かってくる。

だが既にフェローチェの姿は元あつたところに無い。

ズドン！

そして上からの急襲。

「早い……！」

気付いた時にはフェローチェの足元にチャーレムが倒れていた。

続いて出てきたポケモンにも変わらずインファイトを叩き込む。  
スピードを増すフェローチェにスズナのポケモンは触れることす  
れ叶わず、そのままファイランとフェローチェの勝利となった。

「つくしゅん。」

スズナから7つ目のバッジを受け取り、キツサキジムを後にした  
ファイラン。

「寒いのはあんま好きじゃないな。」

今日はさつきと休んで早く次に行こう。

そうファイランは決めたのだった。

その後、ファイラン達は最後のバッジを手に入れるためナギサシテイ  
を目指していた。

「ガバイトーじしんー！」

道中でいつものようにトレーナーたちと戦闘を重ねる。

今日はガバイトを中心に闘っていた。

ナギサジムはでんきタイプ中心のジムだ。

今のうちにガバイトを少しでも強くしておいて有利にジムを進め  
ようという目論見だ。

「よし。ガバイトまだいけそう?。」

「グオ。」

ここまでガバイトは連戦を重ねているがまだ体力的には余裕が  
ありそうだ。

そのあとも何戦かしたところでナギサシテイに到着したファイラン  
達。

昨日とは打って変わって、今日は早速ジムに挑むことにした。

「あれ…ジムの前に誰がいる。」

ジムの前には金髪の男性がぼーっと空を見つめて座り込んでいた。

(中入りづらいな…)

ジムの入り口の真ん前にその男性が座っているせいでなんだか入りづらさを感じていると、相手はこちらに気付いた様で、声を掛けてきた。

「ああ、ジムの挑戦者か。いいぜ、中で待ってるでしょう。」

「あ、はい。もしかしてあなたが…」

「そうだ。俺がここのジムリーダー、デンジだ。」

…ここ最近面白い相手が来なくてね、ここでぼーつとしてたんだが、君は楽しませてくれそうだ。」

そう一方的に告げるとデンジはジムの中に入っていった。

「…行っちゃった。まあいいか。」

勝手に話すだけ話していったデンジに少し気圧されはしたが、一先ずジムに挑戦するという目的は変わらない。

デンジに続いてファイランもジムに入っていった。

「この先には進ませないぜー！」

いつものようにジムのトレーナーが勝負を仕掛けてくる。

「ガバイトー！」

「ルクシオー！かみつくー！」

ルクシオが一目散にかみついてくる。

「ガバイト、振り払って。そのあとじしん！」

ルクシオを腕で受け止め振り払う。

そのまま地面に叩きつけられたルクシオはじしんをもろに食らってしてしまう。

「グオオオオオ！」

あっけなく倒れたルクシオ。

そして自らの力を誇示するかのように雄たけびを上げるガバイト。すると、ガバイトの体から光が漏れ出す。

「来たー！ガバイト!!」

ファイランもこの時を待っていたのだ。

「グウオオオオオオア!!」

光が止み、中から強大な力を持った竜が現れた。

「っ！次だ！ビーダル！とっしんだ！」

「ガブリアス！ドラゴンクロー！」

続いて現れたビーダルが果敢にもとっしんで突っ込んでくる。

しかし、強大な力を持つ竜の前には些細な事。

鋭い竜の爪がビーダルを切り裂いた。

「よっし！お疲れ様!!」

ガバイトの時と比べて更に大きくなったガブリアスに抱きつく。

昔は自分よりも全然背も低かったのにあっという間に抜かれてしまった。

「本当にあのちびっこだったフカマル？ずいぶんとでっかくなっちゃって！」

このガブリアスは生まれたての頃から知っている。

本当に立派に成長したものだ。

「これからもよろしく！」

「グオー！」

その後もガブリアスの快進撃は止まらず、途中のトレーナーも全く障害にならない程の勢いで撃破していった。

「来たな。それに、入り口であった時より強くなったか？そんな雰囲気を感じるぜ。」

「はい。確実に、前より強くなりました。」

「なら、なおさら楽しめそうだな。」

改めて、俺はナギサシテイのジムリーダー、デンジ！楽しませてくれよ!!」

「ファイランです。よろしくお願ひします！」

「ライチュウ！」

「ガブリアス！」

「ライチュウ、でんこうせつかだ。」

ライチュウが目にもとまらぬ速さでガブリアスに攻撃する。

だが、ガブリアスに大きなダメージは無い。

「ガブリアス！そのままじしん！」

ガブリアスを中心に大きな揺れが起こる。

でんこうせつかで肉薄していたライチュウは避けることも叶わずじしんをしっかりと食らってしまう。

「なるほど、それがここで手にした力か。だが、多少の不利くらいどうってことは無い！」

デンジもまだまだやる気の様だ。

「エテボース！かげぶんしん！」

影分身で自身の虚像を作り出すエテボース。

こちらを攪乱しその隙を付くつもりようだ。

「：ガブリアス、落ちついて。攻撃してきた本物を返り討ちにしよう。」

「エテボース、みだれひつかき！」

影分身の中から1匹が飛び出してくる。

「そこだ！ドラゴンクロー！」

肉を切らせて骨を断つ。

みだれひつかきを2回ほど食らってはしまったが、相手から近づいてきてくれるのはむしろ好都合。

至近距離でドラゴンクローをお見舞いする。

「よし！ガブリアス、まだまだ行けるね？」

それにガブリアスはまだまだ余裕そうだ。

「ならば！オクタン！」

次のデンジのポケモンはオクタン。でんきタイプのジムとは一体なんだったんだ。

オクタンに向かってガブリアスが駆けだす。

もう一度ドラゴンクローで攻撃をしかけるつもりだ。

「オクタン、オーロラビーム！」

ガブリアス最大の弱点、こおりタイプの攻撃がオクタンより放たれた。

「ガブリアス！」

冷気が一瞬視界をさえぎる。

だがすぐにも視界は晴れ、中からギリギリで攻撃を耐えたガブリアスが姿を現した。

「これを耐えるのか……！」

デンジは驚嘆の声を挙げた。まさかこおりタイプの攻撃をじめん、ドラゴンタイプのガブリアスが耐えるとは思っていなかった。

「そのままドラゴンクロー！」

そうしてオクタンもガブリアスの前に倒れた。

「ガブリアス！一回戻る？」

「グオー！」

「まだいける？了解！信じるよ！」

フィランはさすがにガブリアスに交代するか提案をしたが、ガブリアス自身がまだいけると言っているので信じることにした。

そしてその言葉の通り、最後の1匹のレントラーもじしんで沈めて見せた。

「ハハハッ！強いな、君。久々にいいポケモンバトルができた。

これからも、どんな勝負をするのか全く楽しみだよ。さあ、8つ目のバッジを受け取ってくれ！」

「ありがとうございます！」

フィランはデンジよりビーコンバッジを受け取った。

「それにしてもいいバトルだった。リーグが終わったらまた遊びにきてくれよ。」



「はい。シロナさんに勝ってまた来ますね。」

こうしてファイランのもとに8個のバッジが揃った。  
いよいよポケモンリーグに挑む、その時は近い。

## 12, 四天王―前編

ナギサシテイを出発し、チャンピオンロードを進むファイラン達。チャンピオンロード内では強いトレーナーや野生のポケモンがひしめき合っており、ポケモンリーグに挑む前の一つの関門とも言える。

「ふう。やっと出口か。」

だが、ファイラン達も生半可な鍛え方はしていない。

道中のトレーナー達は歯牙にもかけずに蹴散らし進んでいく。

そうして幾度の戦闘と探索の果てにようやく出口にたどり着いた。

「ついに来たね…」

ここまで、ジムなどの戦闘でも常に自然体だったファイランも、さすがに多少の緊張をあらわにする。

これより挑むはポケモンリーグ。

このシンオウ地方で最強のトレーナー達のもとを潜り抜け、自身の目標であり、恩人でもあるあの人の下にたどり着かなければならない。

否、たどり着くことが目的ではない。

あの人に勝つためにここまで来たのだ。

募る思いを噛み締めながら、ファイランは建物内に足を踏み入れた。

一先ずポケモンたちの回復と、アイテムなどの補充を済ませる。

「これだけあれば十分かな…」

リーグへの挑戦を開始すれば途中で戻ってくることはできない。

いつも以上に、やや過剰なくらいにアイテムを買い込みカバンに詰め込む。

「みんな、行ける?」

フェローチェ、ガブリアス、エンペルト、ロトム。

みんな体力もぼつちり戻っている。やる気も十分だ。

「よし。行こう。」

小さく、だが確かに踏みしめるように呟き、リーグ挑戦の入口へ向

かった。

「ポケモンリーグに挑む資格があるか確かめよう！」

あなたがシンオウ地方をめぐり手に入れたバッジはクロガネのコールバッジ！

ハクタイのフォレストバッジ！トバリのコボルバッジ！ノモセのフェンバッジ！ヨスガのレリックバッジ！ミオのマインバッジ！キッサキのグレイシャスバッジ！そして！ナギサのビーコンバッジ！

よろしい！シンオウ地方のジムバッジをすべて持つトレーナーよ、その力をここでも発揮し栄光を勝ち取ってみよ！」

リーグ入り口のスタッフにバッジを確認してもらい中に入る。

ポケモンリーグへの挑戦が今始まった。

エレベーターに乗り一つ目のドアの中へ。

中で待ち受けていたのは緑色の神に黒いノースリーブのシャツの青年。

「ハーイー！ようこそ。ポケモンリーグへ。」

僕はリョウ。むしポケモンの使い手です。格好良くて綺麗なむしポケモンのように、パーフェクトになるために、ここでチャレンジャーと戦っています。」

「ファイランです。なるほど、むしポケモンが綺麗だというのは私も認めます。ですが、この世で一番綺麗なのは私のむしポケモンです！」  
「君もむしポケモンを連れているのかい？このバトルでぜひ見せてくれ！」

「望むところです！」

お互いに最初のポケモンを場に繰り出す。

「ドクケイル！」

「フェローチエ！」

「とんぼがえり！」

売り言葉に買い言葉でフェローチエを出してしまったが、ドクケイル相手では少々分が悪い。

早々に交代する。

「確かに、美しいポケモンだ。だがいきなり交代かい？」

「そう焦らないでください。適材適所というのがありますから。」

相手の挑発は冗談交じりにいなしていく。

フェローチエが戻ると同時に、もう一つのボールを構えて投げる。

「ロトム！」

「ドクケイル！どくどく！」

交代して出たロトムにどくどくがあたってしまう。

(むしタイプ使いならロトムが有効かと思っただけど、これじゃ無理はさせられないね。)

「ロトム！エアスラッシュ！」

風の刃がドクケイルめがけて放たれる。

「ドクケイル！まもる！」

ドクケイルのは攻撃から身をまもった。

そうこうしているうちにロトムの毒は回る一方だ。

早めに蹴りをつけてしまいたい。

「ロトム、もう一度。」

「ドクケイル、ベノムシヨックだ！」

ドクケイルが毒を放とうとする。

しかし、風の刃は既にドクケイルめがけて接近してきている。

幸い、エアスラッシュはドクケイルが攻撃をする前に届き、そのま

まドクケイルを行動不能にした。

(まずは1匹。それでもロトムの毒が心配だ。)

「ふむ。それでは次！アゲハント！」

リヨウは2匹目のポケモン、アゲハントを繰り出した。

「ロトム！作戦は変わらずだ。」

再びロトムがエアスラッシュを放つ。

「アゲハント、かげぶんしん。」

しかし、ロトムのエアスラッシュが捉えたのはかげぶんしんで現れ

た偽物。

(不味い！まんまと毒の時間稼ぎをされてる。)

「アゲハント！ちょうのまい！」

分身と本物、いくつものアゲハントが一斉に舞い始める。

「ロトム！ほうでん！あたり一面にまき散らして！」

ロトムが体から全方位に電撃を放つ。

まばゆい光に思わずフィランは腕で顔を覆う。

影分身をことごとく潰していき、最後に舞っていた本体をも捉える「なるほど！考えたね。だけど、アゲハントの舞は完成している！サイコキネシスだ！」

ロトムは先ほどのほうでんと、毒のダメージもあいまって少し息が上がっている。

このままではサイコキネシスが直撃してしまう。

だが、実際にサイコキネシスがロトムにあたることは無かった。

「なに？」

アゲハントはサイコキネシスを撃つこともなくその場で僅かに揺れている。

「さっきのほうでん。あれで運よく麻痺したのか…」

アゲハントは麻痺していて動くことが出来なかった。

フィランはその幸運に胸をなでおろしながらロトムに指示を下す。

「ロトム、もう一度ほうでん。今度はアゲハントにだけ。」

ロトムが再び放電する。今度は一直線だ。

「…よし！ッロトム！」

アゲハントが地に落ちると同時に、ロトムもふわふわと地上に落下した。

「毒のダメージか。ごめんね。無理させちゃって。」

ロトムを抱きしめ、そのあとボールに戻す。

(これが終わったら回復するから、少し待っててね。)

そして、お互いにつきのポケモンを繰り出した。

一方は青い体に大きな角を持つポケモン。

もう一方はよく知った白いポケモン。

奇しくも、全く同じタイプを持つポケモンが互いに向かい合った。

「ヘラクロス！インファイト！」

「…」

リョウがヘラクロスに指示を出した時にはもうフェローチエはその場にいなかった。

「!？」

ヘラクロスはフェローチエがいた場所に突撃したが標的を見失い混乱している。

次の瞬間には白い影が上空から急降下する。

「…」

フェローチエのとびはねるが命中しヘラクロスはその場に倒れた。

「なるほど。確かに美しく、何より強い。」

「でしょう。自慢の相棒なので！」

「ボクも負けていられないな！ビークイン！」

「フェローチエ。とんぼがえり。」

不利な対面でわざわざ戦う必要はない。

「逃がすな！エアスラッシュ！」

エアスラッシュが届くギリギリ、間一髪でフェローチエがファイランの手元に帰る。

「おかえり。で、行って、ガブリアス！」

ファイランはガブリアスを繰り出す。

「ガブリアス！ストーンエッジ！」

「ビークイン！かわしてぼうぎょしれい！」

ガブリアスの放ったストーンエッジはビークインにあたることなく空を切った。

更にその隙に相手の守りを固めさせてしまった。

「なら、ほのおのキバ！」

「もう一度ぼうぎょしれい！」

ガブリアスがビークインに接近し炎をまとった牙で噛みつく。

しかしぼうぎょしれいで守りの布陣を敷いたビークインに大きなダメージを与える事は叶わない。

「ガブリアス、攻撃の手を緩めないで。」

「更に！かいふくしれいだ！」

ビークインは自身のキズを癒していく。

これではジリ貧だ。生半可な攻撃では回復されてしまう。

「ビークイン、こうげきしれい！」

「ガブリアス。そのまま受け止めて。」

ビークインの兵隊達が攻撃に転じる。

それを接近した状態から耐えるガブリアス。

「いいのかい？そんな無策で受け止めるなんて。」

リヨウはフィランに問いかける。

だが、フィランも決して無策でガブリアスに指示を出したわけではない。

「ストーンエッジ！至近距離でぶちかませ!!」

「グオオオ！」

ビークインの攻撃にさらされながらも、ガブリアスが吠える。

ビークインの下から尖った岩が隆起する。

ストーンエッジを確実に命中させるため、あえて相手の攻撃に際し

て距離をとらずに、しかも相手の攻撃中を狙った。

攻撃に気を回している最中ならおいそれと避けられない。

高水準の火力とそこそこに高い耐久を持ったガブリアスだからできる芸当だ。

ファイランの狙い通りストーンエッジは綺麗に命中した。

「追い打ちだ！ほのおのキバ！」

そのままガブリアスの牙がビークインを襲う。

そのままビークインは地に落ち戦闘不能になった。

ストーンエッジがクリーンヒットしたようだ。

「……見無謀に見えるその行動も、実は自身のポケモンを信用しているからこそできるセオリー外れの作戦ってことか。」

リョウの言葉にファイランは不敵な笑みで返す。

「さて、ボクもとうとう後1匹まで追い詰められてしまった。でもまだだ！行くよ、ドラピオン！」

リョウの最後のポケモンが放たれた。

いかにも毒々しい紫色をしたポケモン、ドラピオンだ。

「押し切ろう、ガブリアス！じしん！」

「ドラピオン、こおりのキバ！」

大地を裂くかのような揺れの中、ドラピオンがガブリアスに迫る。

先ほど、攻撃中に攻撃をするという作戦をそのまま意趣返しされたわけだ。

ガブリアスはじしんを起こすのに集中しており、氷のキバをかわすことができない。

だがそれはドラピオンも同じだ。特にじしんは避ける場所もない。リョウもまた、ドラピオンの耐久に物を言わせて反撃に出たのだ。

揺れが収まる。

大きなダメージを負ったドラピオンの前に、ガブリアスが倒れる。



「…ありがとうございます。決めるよ、フェローチエ。」

そう、倒れはしたがガブリアスは最大限の仕事を果たした。

「インファイト。」

フェローチエで確実に倒せる範囲までドラピオンを削ってガブリアスは倒れた。

ならば、後はフェローチエの超スピードで後片付けをするだけだ。フェローチエの脚がドラピオンに突き刺さる。

「…僕の負けだ。でもとてもいいバトルだった。君のそのポケモンも、他のポケモンも、強く、美しかった。もちろん、君のトレーナーとしてのセンスも。」

「ありがとうございます。」

「さあ、先に進むといい。まだまだリーグは始まったばかりだよ！」

「はいー！」

フィランはリョウに軽く会釈をし、次の四天王のもとへ向かった。

「さて、みんなまずは初戦お疲れ様。」

リョウとの戦いで傷ついたロトム、ガブリアスをげんきのかけらとすごいキズぐすりですりで回復させる。

フィランもおいしい水を飲んで一息つく。

リーグの入り口でのまとめ買いが早速役に立っている。

「連戦になるけど、まだまだ行けるよね？」

もとより無傷の2匹も、復活した2匹も頼もしい返事をしてくれた。

「よしー行こう！」

「おや。いらっしやいましたね。これはまたずいぶん可愛らしい挑戦者さんです。」

「フィランです。よろしくお願いします。」

「私はキクノ。じめんタイプのポケモンを特に大事にしています。さて、早速ですけど、あなたの實力見せてもらいますよ！」

「ロトム！」

「さあ、ヌオー。」

こちらのロトムに対して相手の初手はヌオー。

じめんタイプの使い手ならメインウェポンを無効にできるロトムと効果抜群をつけるエンペルトを中心に立ち回るのがいいだろう。

「ロトム、おにびー！」

「ヌオー、すなあらしです。」

ヌオーが砂を巻き上げ砂嵐を起こす。

視界は少し悪くなったがおにびはしっかりと命中したらしい。

「少々分が悪いですね。ヌオー戻りなさい。」

(ここで交代してくるか。恐らくヌオーではロトムに有効打がないだろう。ならばロトムに有効なポケモンを出してくるはず。…いわかこおりか?なににせよ…)

ファイランはこのタイミングでの交代を訝しんだ。

恐らくだがヌオーはじめん技しかないか、火力の低い水技しかないのか。

確かにそれだとロトムを倒す前にシャドーボールやらなんやらでヌオーを撃破されかねない。

ならばじめんタイプと複合のいわポケモンか、単純にいわ技を持っているポケモンを出してくる可能性が高いと読んだ。

「ロトム、こっちも交代。」

両者ともにポケモンを交代する。

キクノが出したのはゴローニャ、ファイランはいわタイプ読みのフェローチエ。

(よしー)

もし読みが外れたらとんぼがえりで対面操作するだけだったが、ここは読みを的中させていく。

「おや、」

「フェローチエ！インフアイト！」

フェローチエが猛スピードでゴローニヤに接近する。

「凄まじいスピード、パワーです。でも、ポケモンバトルはそれだけじゃないですよ。」

フェローチエの一撃がゴローニヤの岩の装甲を砕く。

だが、

「な!!」

ゴローニヤはギリギリで堪え、そこに立っていた。

「ゴローニヤ、ジャイロボール。」

そこからゴローニヤは少し勢いをつけフェローチエに激突する。

「フェローチエ!!」

フェローチエは防御の薄さを超スピードでカバーしているようなポケモンだ。

一撃で沈め、反撃を許さない。

故に、反撃されてしまえばとてつもなく脆い。

「ごめんね。フェローチエ。少し待ってて。」

傷ついた相棒をボールに戻し、次のポケモンを出す。

「エンペルト、アクアジェット。」

まずは戦闘不能一歩手前のゴローニヤをアクアジェットで倒す。

「やられてしまいました。それでは、次のポケモンです。」

次に出てきたのはナマズン。

みずタイプを持ちみず技で不利をとらないじめんタイプ。

エンペルトには分が悪い。だが、エンペルトもただやられるだけではない。

「ナマズン！じわれ！」

「えっ!? あぶなっ！避けて！エンペルト！そしたららくさむすびー！」

ナマズンのいるところから地面に亀裂が入っていき、エンペルトを呑み込もうとする。

幸いにもスピードはそこまでではなく、見てから躲すことができた。

そして反撃に出るエンペルト。

地面から生えた草がナマズンに絡まりダメージを与える。

くさむすびは相手が重ければ重いほど威力が上がる技で、ナマズンは決して重いポケモンではない。

だが、じめんもみずもくさタイプには不利なタイプだ。

この攻撃はナマズンにはひとたまりもなく、大きなダメージを与えることに成功した。

「もう一度だー！」

今度はナマズンよりもエンペルトが先に動いた。

再び草がナマズンを縛り付け、ナマズンは戦闘不能となった。

「ふう。じわれ撃たれた時はひやひやしたけど、何とかなつたかな。」  
実際肝が冷えた。あれを食らってしまったらどれだけ体力が残っ

ていようと、どれだけ防御に優れていようと一発アウトだ。

そうして次のキクノはポケモン、ウソツキーを繰り出した。

「エンペルト、ちよつと一休みしようか。」

エンペルトを一度戻し、別のポケモンに交代する。

「ウソツキー、じしんです。」

キクノは交代の際を付くべく、ウソツキーに指示を出した。

「フューイ!!」

ファイランが交代で出したのはロトム。

もちろんじめん技であるじしんは無効で、ロトムはそのことを小馬鹿にするかのように飛び回っている。

「ウソツキー、挑発にのってはいけませんよ。ふいうちです。」

「ロトム！おにびー！」

唐突に振るわれたウソツキーの腕をかわしおにびを放つロトム。  
だがウソツキーもおにびをかわし、少しの距離を取る。

「もう一度おにび！」

「アームハンマー！」

ロトムから再びおにびが放たれ、ウソツキーは腕を目一杯振りかぶる。

おにびは命中したがウソツキーの腕も命中しロトムが大きく後方へ吹き飛ばす。

「大丈夫？」

「フユウ！」

見た目は派手だったが実際には大きなダメージは受けていないようだ。

「じゃ、もう一度交代だ。」

再びロトムをひっこめる。

こうして場をかき乱すことが最大の狙いだ。

「ウソツキー、じしんです。」

キクノはこの交代はウソツキーに比較的有利なエンペルトを再び出してくるだろうと考え、先にじしんを撃っておくことにしたのだ。

だが、ファイランはその程度織り込み済みで動いている。

「グオオ！」

キクノの予想とは打って変わって、出てきたのはガブリアス。

もちろんじしんは食らってはしまいが、当の本人は全く無問題とでも言いたげな顔をしている。

「お返しだ！ガブリアス！」

今度はガブリアスがじしんを起こす。

本当のじしんとはこうやるのだ、と言わんばかりに張りきったガブリアスのじしんにウソツキーはそのまま倒れた。

「やりますね。私の考えを読んだのですか？」

「ええ、まあそんなところです。」

「全く、若いのに恐ろしいこと。さあ、行きますよ！」

次に繰り出されたのはヌオー。最初に出てきたポケモンだ。

「ガブリアス！ドラゴンクロー！」

「ヌオー、あくび。」

ヌオーはガブリアスのドラゴンクローを平然と受け止めた。

逆にガブリアスはヌオーのあくびでうとうとしている。

「しようがない。ガブリアス、交代だ。」

ガブリアスが寝てしまう前に交代させ、エンペルトを繰り出す。

「いまです。あなをほる。」

こちらが交代をしている隙にヌオーは地中に潜ってしまった。

「エンペルト！よく耳を澄まして…」

エンペルトは全身の感覚を研ぎ澄まさせた。

そして！

地面から出てきたヌオーを後ろに飛び退き躲す！

「よし…くさむすびー！」

ヌオーが出てきたところにくさむすびをする。

地面から飛び出してきた勢いもあいまって激しく地面に激突する

ヌオー。

「……………」

ヌオーはそのまま静止して動かない。

どうやら戦闘不能になったらしい。

「全く…若い力とはかくもエネルギーギッシュでしたか。この私をここま  
で追い込むとは。」

「何をおっしゃいますか。キクノさんも十分エネルギーに溢れてる  
じゃないですか。」

「当然、まだまだ若い人に負けるつもりはありませんから。」

そう言い、キクノは最後のポケモン、カバルドンを繰り出した。

「ここで決める！なみのり！」

「迎え撃ちます！じしん！」

お互いの大技をぶつけ合う。

だが、じしんがエンペルトを追い込んだ時、一つの変化が起きた。

(なみのりの威力が上昇している!!)

波が先ほどより更に強く、激しくなっている。

その大きくなった波はカバルドンを呑み込み、エンペルトは勝者となった。

「大したものね…若くしてここまで来るだけの実力がアナタたちにはあります。

ここから先も楽しみだわ。アナタたちならきつとどこまでだって行けるわ。」

「はい。どこまででも行きますよ、私たちは。」

「さあ、お行きなさい！残る四天王は2人です！」

「はい！ありがとうございます！」

二人目の四天王も突破し、ファイラン達はさらなる奥へと進んでいく。

EX1, 断章—Tell me a bedtime  
story

「つくしゅん。」

キツサキシテイでのジム戦を制したファイラン達。

寒さがあまり得意ではないファイランはさつさと宿に戻り、食事も済ませて暖をとっていた。

「んん、風邪気味かなあ。」

暖房の前で丸まってそんなことを呟く。

「シャワー浴びて早く寝ようかな…」

今日は早く休もう。そう思い寝支度をすることにした。

...

...

...

「ふう。」

すべての支度を済ませ、後は寝るだけだ。

そんなファイランの前にベッドを占拠する不法侵入者が現れる。

「……」

「…何してるの?」

不法侵入者はベッドに横になってポンポンとベッドを叩いている。

「……」

フェローチエは自分と一緒に寝ることで暖を取ることと、ついでは自分が看病をすると主張をしている。

「風邪なら暖めないとして…いや、移しちゃったら不味いよ…?」

そもそも人間の風邪がポケモンに移るのかは不明だが。

「あつー!」

そんなこんなでいると、フェローチエがファイランの腕をとりベッドに引きずり込む。

「全く、強引だなあ…」



フェローチエのほうが圧倒的に力が強いのでこうなってしまうば逃げられない。

まあ本気で逃げようとも思っていないし、フェローチエも全力で押さえつけたりなどしないが。

ベッドに引きずり込んだファイランをフェローチエが抱き寄せる。

「ねえ、移っても知らないよ〜?」

ファイランはあきれた様子でそういうが、実際のところはまんざらでもない。

本当に移っちゃったら不味いと思いつつもフェローチエに抱きしめられると安心してしまい、なかなか離れることが出来ない。

「……」

ダメだとは思いながら無言でフェローチエに自分から腕を回してしまう。

「…ねえ。ほんとに移っちゃったらごめんね。」

だが逆にフェローチエは力を強める。

問題ないという事らしい。

「…うん。ありがとう。」

「いつも、」

ファイランは何か言いかけて、少し口ごもった。

「……?」

「いつも、色々ありがとう、ね…」

こないだも、あなたがいなくなったらあの場で気を失って、最悪どうなったかわからないし…

なのに、私は大した事してあげられないし…」

ファイランはカンナギタウンでの一件を思い出していた。

あの場にいた3人の人物はどんな人なのかわからない。

でもフェローチエがその場から連れ出してくれなければ何か起こっていたかもしれないし、

何か起こりかねないからフェローチエはあの場から連れ出してく

れたのだろう。

「私は今のままでも幸せだよ。ガブリアスや他の仲間たちもいるし、何よりあなたがいてくれる。思い出せなくて困ってる事なんて1つしかないの。」

：あなたと出会った時の事や、出会ってからのこと、一緒に何をしてきたのか思い出せないのがすごく寂しいんだ…」

フェローチエが視線を自分の腕の中に落とす。

フィランもそれに気付いてフェローチエを見つめ返す。

フェローチエの紫の瞳がフィランの水色の瞳をじつと捉えて話さない。

「ねえ、あなたは私の過去を…知ってるんでしょう?」

「……」

フェローチエはフィランの過去を知っている。

かつてシロナも同じことを考えたが、フェローチエとコミュニケーションを取ることが出来ず、聞き出すことは出来なかった。

だが、フィランは違う。

フェローチエ自身もフィランと会話することを望んでいるし、願いは叶えてくれるだろう。

それでも、フェローチエは何も語らない。

「…うん。ごめんね。何も言わないってことは、私のことを思っそうしてるんだろうし。それに自分の探し物くらい、自分で見つけないかね。」

フェローチエが背中に回した手を少し上に動かして、フィランの頭をなでる。

「ふふ。」

フィランもそれに任せてフェローチエに抱きつく。

「もう寝る!!!おやすみ!!!」

急に恥ずかしくなったのか少し大きな声を出してしまふ。  
そのままフェローチエの胸元にうづくまって目を瞑ろうする。

だが、フェローチエがフィランの後頭部を押さえて、少し上を向かせる。

フェローチエの手によって無理やり見つめあわされる。

「あつ、ん……。バカ、移っても知らないからね！」

## 13、四天王―後編

「おっしー！来たな。待ってたぜ、チャレンジャー。」

3つ目の部屋に入るなり、いきなり声をかけられる。

赤いアフロヘアが特徴的な人物が手を振りながらこちらを見据えていた。

「自己紹介が遅れたな。俺はオーバ。ま、見ての通り3人目の四天王だ。」

「ファイランです…よろしくお願いします…。」

オーバのノリの若干気圧されつつもファイランも自己紹介をする。

「ああ、聞いてるぜ。デンジのやつからな。久々に熱いトレーナーが現れたってな。」

あいつがそこまで言うのなら、必ずここまで来るだろうと思っていた。だから楽しみに待ってたんだ。」

どうやら二人は知り合いだったようだ。

「…そういうことでしたか。」

「早速だ！始めようぜ！」

「はい…！」

オーバは待ちきれないといった様子でボールを構え、ファイランもそれに応える。

「行くぜ！ギャロップ！」

「フェローチエ！」

3人目の四天王との戦闘が幕を開けた。

「ギャロップ！にほんばれ！」

「フェローチエ、とんぼがえり。」

ギャロップにとびかかったフェローチエがそのままの勢いでファイランの手元に戻る。

ほのおタイプ相手にフェローチエで突っ張る理由もないので一度交代しようという訳だ。

だが、とんぼがえりではほのおタイプのギャロップには大きなダメージを与えられず、にほんばれも成功してしまふ。

ギャロップが炎を球体にし、フィールド上方に疑似太陽として放つ。

「眩し…」

ファイランは思わず目を細める。

上空から小さな熱球が光を降り注がせているフィールドにフェローチエと交代するポケモンを繰り出した。

「ガブリアス！」

「なるほど！ギャロップ！一度引くぞ！」

だが不利な組み合わせで戦わないのは相手も同じか。

「ガブリアス！じしん」

大きな揺れが起こり、次に出てくるポケモンを迎え撃つ。

「フワライド！」

はずだった。

だが、オーバが繰り出したのはひこうタイプのフワライド。

ガブリアスのじしんは空を切る。この場合は地面だが。

「ガブリアス。続けてストーンエッジ。」

休まず次の一撃を、素早く切り替えて放つ。

だが、こちらにもフワライドには命中しなかった。

勢いよく放たれた岩に対して、フワライドはふわふわと宙を浮き回避してしまう。

むしろ岩が空気を切る事を利用して、風に乗っているかの様だった。

「フワライド、かげぶんしん！」

攻撃を避けたフワライドはふわふわと自身の幻影を増やしていく。

リョウとの戦いではほうでんで一斉にかき消すことでかげぶんしんを対策したが、じしんは当たらずガブリアスで同じ戦法を取ることはいできない。

「…とりあえず一つずつ潰すか…？ガブリアス、ほのおのキバ。」

ガブリアスがフワライドの分身を一つほのおのキバで消し去る。

だが、分身はまだ複数存在しており、これを全部ガブリアスに対応してもらうのは無理がありそうだ。

「よし！引こう！ガブリアス！」

「そう来ると思ったぜ。フワライド、バトンタッチ！」

ガブリアスを戻すと同時に、複数のフワライドもオーバの手元に戻っていく。

「あっ！」

ファイランは何かに気付き慌てる仕草を見せる。

だが、既に交代は済ませている。次のポケモンを出しかけてしまっている。

ファイランはロトムを、オーバはハガネールを繰り出した。

お互いにポケモンを交代した両者だが、その間にはある一つの差異があった。

「これは不味い…！」

ハガネールはフワライドのかげぶんしんをバトンタッチで引き継いだまま出てきたのだ。

「どうだ！突破できるか!?!」

複数のハガネールがロトムを囲うように並んでいる。

（ハガネールにはでんきわざもひこうわざも有効ではない…ほとんどどうしようか…）

「ロトム！その一つにエアスラッシュ！」

ファイランが指示したのは自分に最も近い、ロトムから見て背面にいる分身。

そこに向かってロトムがエアスラッシュを放つ。

「ハガネール、がんせきふうじだ！ロトムの動きを止めろ！」

エアスラッシュが分身を一つ消し、包囲網に穴が開く。

「ロトム！戻ってきて！」

その穴からファイランのもとに戻ろうとするロトムに岩がぶつけられる。

その衝撃に耐えかねてスピードを落とすロトムと、その隙に再び包囲網を形成しようとするハガネール。

「間に合え……！」

既に閉じかけていた道筋、ハガネールの分身たちの隙間、そのわずかな間隔をロトムは潜り抜けファイランのもとへ。

「よし。」

ロトムが戻ってきてくれたことに一先ず安堵する。

がんせきふうじのダメージもあり、かなり傷ついてはいるが、ここでロトムを失う訳にはいかない。

「反撃だ！エンペルト！」

ロトムからエンペルトに交代し巻き返しを狙う。

「なみのりー！」

呼び起された水流がハガネールを分身もろとも流し去ろうと地表を覆う。

だが、ギャロップが作り出した小さな太陽の影響か、いつもより威力は控えめに見える。

「ハガネール、ほのおのキバ！」

オーバの指示に1匹のハガネールが動き出し、エンペルトに向かってくる。

以外にも本体は近くにいたらしく、水の威力の不十分なことがあいまって接近を許してしまう。

「エンペルト！アクアジェット！」

とっさにファイランがエンペルトに言う。

水流に乗ったままアクアジェットで更に加速、一気にフィールドの反対側へ。

ハガネールのほのおのキバは届かず、距離を開ける形となった。

「もう一回、なみのりだー！」

「ビュウウ!!」

今来たほうに向かって再び水流を放つ。

2回分の波が激しくぶつかり合い、その衝撃ですべての分身は消滅。

ハガネールもそのままダウンとなった。

「何とかなったかな…？」

「…さすがだ。それでこそだ！俺ももっと熱くなってきたぜ!!」

1匹目が敗れてなお、その闘志が熱く滾るオーバ。

その手から次なるポケモンが投下される。

「ミミロップ！」

「エンペルト！ラスターカノン！」

エンペルトが自身の翼を前に向け光を集める。

光は次第に収束していき、球体となり放たれる。

その直前。

「ミミロップ！とびひざげり！」

ミミロップが素早く跳躍し、その勢いそのまま蹴りを繰り出す。

ラスターカノンを構えていたエンペルトでは回避は間に合わず、ミ

ミロップの膝が直撃してしまう。

「エンペルト！」

はがねタイプのエンペルトに対してかくとう技は効果抜群だ。

その一撃でエンペルトは倒れてしまった。

「…お疲れ様。フェローチエ！」

高速でかくとう技を打つ事には誰にも負けはしない。

そんな相棒の出番だ。

「インファイト！」

「ほのおのパンチ！」

フェローチエが急接近し、ミミロップが迎え撃たんとする。

ミミロップの拳が横から殴りつけるようにフェローチエの顔に迫る。



瞬時に上体を下げたフェローチエは、その攻撃を躲しながらミミロップの懐に潜り込む。

そのままミミロップの胴体に至近距離から蹴りを叩き込んだ。

「……」

勢いよく吹っ飛んだミミロップを、心なしかドヤ顔のフェローチエが見下ろしている。

ミミロップはどうやらそのまま伸びているらしい。

「なるほど。確かにデンジの野郎がいうだけのことにはありそうだぜ。

おもしろい！」

そういつてオーバは再びフワライドを繰り返した。

「フェローチエ、とんぼがえり。」

再び不利な状況から脱するためにフェローチエをとんぼ返りで交代させる。

「フワライド、かげぶんしんだ。」

オーバは再び先ほどと同じ戦術で立ち回ろうとする。

だが、一度見た戦術にそのままやられるフィランではない。

かげぶんしんが発生する前にフェローチエはフワライドに攻撃と交代まで済ませている。

今度は迷うまでもなく、ノータイムでロトムを繰り返す。

「ロトム！」

「さすがに同じ手は通用しないか、っと。フワライド！あやしいかぜ！」

「ほうでん!!」

かげぶんしん対ロトムの対面なら1戦目に済ませている。

ロトムもわかりきっているようで電気を一か所ではなく一面に放出させる。

次々とフワライドの分身は消えていき、最後に本体を残すのみとなった。

そのまま周りに放出していた電撃を本体に集中させる。

フワライドもただでやられる訳もなく、分身が消えていく間にあやしいかぜを放とうとしている。

ほうでんとあやしいかぜ、お互いの遠距離での攻撃が交差する。電撃と風が止み、一瞬、お互いが視線を交わす。

次の瞬間、フワライドもロトムも力なく地に落ちた。

弱点であるでんき技を正面から受けたフワライドはもちろん、ハガネールとの戦闘でかなりのダメージを追っていたロトムも戦闘不能となった。

「ありがとうね。ロトム。」

フィランはロトムをボールに戻しながら感謝の言葉を口にした。

ハガネールとの戦闘で、多少無理やりにもロトムを温存させたかったのはこのためだった。

相打ちにはなってしまったが、フワライドを倒してもらおうという重要な仕事をロトムは遂行した。

「まだまだー！」

お互い次のポケモンを繰り出す。

オーバはギャロップを、フィランは再びガブリアスを。

「ギャロップー！とびはねるー！」

「ガブリアス。次の一撃、確実に当てるよ。準備して。」

高々と飛び上がってしまったギャロップにガブリアスは攻撃手段を持たない。

故にギャロップが降下してくるタイミング、その瞬間を狙う。

そして、上空より猛スピードでギャロップが迫りくる。

「グアアアオ!!」

それをガブリアスは正面から受け止めた。

「なんだとー！」

「行けええ!!」

そのままギャロップを両手でしっかりと掴み、勢いよく地面に投げつけた。

そしてギャロップが立ち上がる前に大きく地面を踏み鳴らす。

そうして発生したじしんが全身を地面に設置させた状態のギャロップを激しく揺さぶる。

まさしく全身でじしんを受けてしまったギャロップはそのまま戦闘不能となった。

「感じるぜ！君の熱いビート！これが俺の全力だ！」

オーバは最後のポケモン、ゴウカザルを繰り出した。

「ゴウカザル！フレアドライブ！」

「ガブリアス！じしん！」

激しい揺れのなか、ゴウカザルは全身に炎をまといありつたけの力で突進する。

こうしてる最中にもじしんで体力は削れているだろうが、そこはトレーナーに似ているのか、まさしく燃え上がる炎のような気合でガブリアスに迫る。

ゴウカザルの拳は、ガブリアスに届いた。

だが、ガブリアスも全力で受け止める。

そうして幾ばくかの拮抗の後、ガブリアスが片膝を地面につく。

まさにギリギリといった状態。

対するゴウカザルは、というと。

既に全身から燃え盛っていた炎は消えている。

ガブリアスに対して突き出した拳をそのままに、一つも動かない。

まさに全力を出し切った攻撃だったのだろう。

じしんのダメージとフレアドライブの反動を受け、そのまま戦闘不能となっていた。

その後、糸が切れたかのようにゴウカザルの体がうつぶせに倒れる。

「……………」

「……ガブリアス。一先ず戻っておいで。」

オーバはゴウカザルをボールに戻しはしたが、それ以降何も言わ

ず、動きもしない。

その様子を不思議に思いながら、ファイランは一先ずガブリアスをボールに戻した。

「…………ゴウカザルも、他のポケモン達も、そして何より俺も、燃え尽きちゃったぜ。

先に進みな、チャレンジャー。期待してるぜ。」

「…はい！」

まさしく燃え尽きた男の静かな激励を受け、ファイランは部屋を後にした。

これまでの2戦と同じようにポケモンたちのキズを治療して行く。

「ふう…あつついな…」

ファイランもタオルで汗をぬぐいながら、勢いよく水を飲んだ。

オーバとのバトルはまさしく熱闘だった。

気付かぬうちに喉も乾いていたようだ。

だが、のんびり休んではいられない。

次が最後の四天王だ。

一層気を引き締めて、ファイランは足を踏み出した。

「これは、いいタイミングでお越しになりました。」

部屋に入るなり目の前の人物が本を閉じながら言った。

ここにいるということは当然四天王なのだろうが。

「ちようど本を読み終えたところでした。」

さて、私はゴヨウ。使うのはエスパークタイプ。それにしてもここま

で来るとはかなりの実力をお持ちのようだ。

四天王最強と言われる私も全力でお相手させていただくつもりでしょう。」

「よろしくお願いしますー！」

四天王最後のトレーナー、ゴヨウはエスパータイプの使い手だと自ら明かしてくれた。

ならば、

「フェローチエー！」

高速、高火力でむし技をぶつけ早期決着を目指す。

「バリヤードー！」

ゴヨウの出したポケモンはバリヤード、バリアを張って戦況を有利にするポケモンだ。

「リフレクターー！」

「フェローチエー！とびかかるー！」

バリヤードがひかりのかべを貼り終わる前にフェローチエが襲い掛かる。

バリアを形成しようとしていたところを襲われ大きく態勢を崩すバリヤード。

「フェローチエ、そのまま逃がさないで。」

一度飛び退いたフェローチエに対し追撃を指示する。

立ち上がるとうとするバリヤードにフェローチエは容赦なく再び襲い掛かった。

「くっ！一瞬ですか！」

フェローチエはまさしく瞬時にバリヤードを屠りさった。

これには四天王最強を自負するゴヨウも動揺を隠せずにいた。

「次です！チャーレム！ほのおのパンチ！」

「フェローチエ。」

ゴヨウの次のポケモンはエスパータイプとかくとうタイプをあわせもつチャーレム。

炎をまとった拳で立ち向かって来るチャーレムに対して、ファイラン

は短く、フェローチエに声をかける。

それだけですべてを理解したフェローチエは上空に飛び上がった。勢いよくフェローチエのもとに飛び込んだチャーレムの攻撃は目標地点に対象がいなくなってしまうことにより空振りとなった。

「これは…チャーレム！上に注意です！」

ゴヨウは次の展開に気が付きチャーレムに声を指示を出す時すでに遅いだ。

次の瞬間には上空からフェローチエが猛襲する。

「チャーレム！」

上空からの一撃にチャーレムはフェローチエのもとに倒れ伏した。相手を2匹連続で倒し、勢いを増したフェローチエはもう止まらない。

「なんと…。キリンリキー！」

「…」

ゴヨウは次にキリンリキを繰り出す。

だが先ほど以上のスピードでフェローチエが動き出す。

もうキリンリキにも、ゴヨウにも追うことはできない。

フィランも目では追うことは出来ず、感覚でフェローチエの動きを察しているに過ぎない。

一瞬の間にキリンリキに接近し蹴りを突き刺す。

「なんとということですか…」

まさしく瞬きする間もないかのような戦い。

いや、戦いと呼ぶには圧倒的過ぎるかもしれない。

オーラをまとい更に能力を上昇させながらフェローチエはフィランの傍に立った。

「このまま貫くよ。行けるよね？」

フィランの声に当然、と言わんばかりの視線を向け、フェローチエは次の敵に向かっていく。

続くフーデイン、ドータクンも一撃で倒していき、あっという間に勝負は付いた。

「フェローチエ、お疲れ様。…私の勝ちですね。」

鬼神のごとき活躍だった相棒を労い、ボールに戻す。

「まさか、この私のポケモン達が1匹で全滅させられてしまうとは…  
凄まじい力をお持ちのようだ。その力があればチャンピオンにも届くやもしれません。」

「さあ、最後の扉をくぐりこのポケモンリーグの最奥へ挑むのです。」  
ゴヨウに促され、部屋を後にする。

四天王は乗り越えた。後はただ一人、この地において最強の人物が待つ場所へ。

## 14, 戦闘! チャンピオンシロナ

ポケモンリーグの最奥へ至る廊下、最後の扉を目の前にして、フィランは大きく深呼吸をした。

「……ふう。よし! 行こうか! 行けるよね?!」

自分の気持ちを整えて、仲間たちに声を掛ける。

ガブリアス、

エンペルト、

ロトム、

そして、フェローチェ。

ここまで無事に進んでこれたのもみんながいたから、そんな感謝と、最強に挑む覚悟をこめて。

扉をくぐった。

「……ついに来たのね。」

「お待たせしました。」

しばらくぶりにあったシロナと言葉を交わす。

「ええ。確かに待ったわ。でも、ちつとも苦痛じや無かった。」

…初めて出会ってから、最初はただ一つの事しか知らない、興味が無かったような、言ってしまうえば自分の事すら興味が無かったようなアナタが、一緒に暮らす中で段々と表情豊かになっていくのは嬉しかった。

それ故に、アナタが旅立つって決めた日は私も少し寂しさを感じたわ。

でも、色々なことを知って、色々な人やポケモンと出会って、どんな表情で私のもとにまた現れるのか、それが楽しみで仕方なかった。

そう、この時を待っていたから、だから、全然退屈じやなかったわ。「今思うと、本当にあの日に私を見つけてくれたのがシロナさんでよかったです。」



それで、今の私はどんな表情をしていますか？」

「いい顔してるわ。…それじゃ、始めましょうか！」

「はい!!」

向かい合ってボールを構える二人。

銀と水色、二つの眼差しがお互いを捉えて離さない。

一呼吸の後、二つのボールが宙を舞う。

ポケモンリーグ、最後の戦いが幕を開けた。

「ロズレイドー！」

「フェローチエー！」

お互い、最初のポケモンを見るや否や一手目の技を決めた。

「じんつうりきー！」

「とんぼがえりー！」

ロズレイドはフェローチエに対して有効打となる攻撃を放とうとするが、ハイスピードでとんぼがえりするフェローチエには当たらない。

「ロトムー！」

ロトムがじんつうりきを受け止めながらフェローチエと交代する。くさタイプのロズレイドのじんつうりきでは大きなダメージにはならず、ロトムはまだまだ平気なようだ。

フェローチエがロトムと入れ替わり盤面が変化しようと、シロナの攻撃の手は止まらない。

「ロズレイド、ヘドロばくだん。」

ロズレイドが毒液を球状に纏め、ロトムに向かって放つ。

「エアスラッシュー！」

ファイランとロトムも負け時と対抗する。

空気の刃が毒液を切り裂き、ロトムにあたることもなく四方に散らばる。

「シャドーボールー！」

シロナは次々とロズレイドに指示を出し、ロズレイドもそれに応え

て次々と技を繰り出す。

ロトムはシャドーボールを回避し、再びエアスラッシュをロズレイド自身を狙って放つ。

今度はロズレイド本体に命中したその攻撃は、ロズレイドを倒しきるまでは行かなかったものの、大きなダメージを与えた。

「ロズレイド！ヘドロばくだん！」

大きく後ずさりながらも再びヘドロばくだんを構えるロズレイド。

「もう一度エアスラッシュで迎え撃とう！」

先ほどと同じようにエアスラッシュでヘドロばくだんを切り裂き、対処しようとするファイラン。

地上から放たれたヘドロばくだんと空中から打ち下ろされたエアスラッシュが交差する。

ヘドロばくだんは先ほどと同じようにエアスラッシュに切り裂かれ、ロトムに届く前に地に落ちる。

「…!?」

だが、撃ち落としたはずのヘドロばくだんは再び姿を現した。

そのことに動揺してしまいファイランは一瞬固まる。

「…！ロトム、急いでもう一度！」

慌ててロトムに指示を出す間合わず、ヘドロばくだんはロトムに命中。

ロトムはダメージを負い、少しよろめく。

(1つ目の後ろに2つ目を隠していたのか…！)

あの時、放たれた攻撃は二つあった。

それを縦に2つ並べることで1つ目の攻撃をおとりにしたのだ。

もちろんそんな事、シロナが指示したところは見えていない。

自発的に攻撃を当てる作戦をとったロズレイド、それを信じて任せたシロナ。

さすがはチャンピオンとそのポケモンといったところか。

予想外の攻撃に面食らってしまったのはしたが、ここで止まるわけにも行かない。

「ロトム！エアスラッシュユ！」

ロズレイドもさすがに短いスパンで2連続のヘドロばくだんを放って少し疲労したようだ。そこを狙ってファイラン達も反撃にでる。

2度目のエアスラッシュはさすがに耐えきれなかった様でロズレイドは倒れる。

だが、ロトムも最初のじんつうりきにヘドロばくだんでかなりのダメージを負ってしまった。

(次のポケモン次第では交代も考えないとな。)

シロナの次のポケモンは何か、ロトムがこれ以上厳しそうだったら交代も視野に入れながら今後の展開を考える。

「…お疲れ様。ミロカロス！」

ロズレイドに代わるポケモンはミロカロス。

相性上はロトムのほうが有利に見える。

「ロトム、もうちよつとだけ頑張つて！」

ファイランもロトムの戦闘継続を決めた。

ミロカロスは優雅に佇み、戦闘の気配など感じさせない様子である。だが、ここは戦いの場だ。ファイランは速攻で仕掛けに行く。

「ロトム！ほうでん！」

ロトムの体から電気が放たれてミロカロスに向かっていく。

「…ミロカロス、ミラーコート。」

電撃を浴びたミロカロスは少なくないダメージを負うが、何とか堪えている。

直後、ミロカロスから電撃が放たれロトムを襲う。

「ミラーコートか…！」

ミラーコートは直後に受けた特殊技を倍の威力にして返す技だ。

ロトムから放たれた電撃の倍の威力の攻撃をくらいロトムは倒れる。

「迂闊だったか…ロトム、お疲れ様。」

ミロカロスのミラーコート警戒せずにでんき技を撃ってしまったことを悔みつつ、切り替えて次のポケモンを出す。

「フェローチェ！インファイト！」

一度フェローチェを繰り出し、ロトムが削ったミロカロスを確実に倒しに行く。

実際、ミロカロスもかなり消耗していた様ですんなりと倒されてくれる。

「さすが、ここまで進んできただけあるわね。」

そうは言うがシロナはまだまだ余裕そうだ。

そのまま、シロナは3匹目を繰り出す。

「トリトドン！」

「フェローチェ！とんぼがえり！」

「だくりゆう！」

トリトドンがだくりゆうでフェローチェを範囲攻撃で流し去ろうとするが、その前にフェローチェはファイランの手元に戻ってしまう。

「エンペルト！」

代わりに出てきたのはエンペルトだ。

みずタイプのエンペルトにだくりゆうは効果が薄く、すんなりと着地に成功する。

「エンペルト！くさむすび！」

「トリトドン！交代！」

トリトドンの唯一の弱点であるくさ技で攻撃しようとするがシロナもそこは警戒していたようだ。

「ミカルゲ！」

「おんみよくん」

くさむすびはミカルゲに当たったが大きなダメージにはなっていないようだ。

「ラスターカノン！」

「あくのはどう！」

ファイランとシロナ、お互いに次の手を決める。

銀と黒の対照的な色の攻撃が交差し、互いのポケモンにぶつかる。お互いに大きなダメージにはなっていないようだが、このまま同じだけダメージを交換し続けるとトリトドンの突破が難しくなり、フィラン的には厳しい状況となる。

「エンペルト！交代！」

今後の展開も考えてエンペルトは温存しておきたい。

そう考えてエンペルトに戻るように指示をする。

「ガブリアス！」

エンペルトと交代で出したのはガブリアス。

このガブリアス、実はシロナ戦前に技マシンで新たな技を習得させてある。

（ぶつつけ本番だけど…大丈夫でしょ！）

ガブリアスならきつと大丈夫だろう。と、無責任にも見えるがそれも信頼故だ。

「ガブリアス！つるぎのまい！」

場に出るや否やガブリアスは勇ましく舞い、自身の力を高める。

「ミカルゲ！あくのはどう！」

当然相手からしてみれば、そんな隙を見逃すはずもない。

ミカルゲから出た黒い波動がガブリアスを襲うが、ガブリアスのタフさでもって無理やりつるぎのまいを完了させる。

「ガブリアス！じしん！」

普段より大きな揺れに地面が悲鳴を上げる。

威力が上がったじしんでミカルゲに逆襲する。

「おんみょーん…」

「その子、あの時のフカマルね…」

見違えるほどに立派になったわね。君も、フィランについて行って良かった？」

「グオ。」

シロナが幼かったフカマルを思い起こし言葉を掛け、ガブリアスもそれに応える。

あの日、ファイランについていくように促した自分の判断は間違いで  
は無かった、と。

「なら、こっちも！ガブリアス！」

シロナもガブリアスを繰り出す。

2匹の竜が向かい合う。

「げきりん！」

「ドラゴンクロー！」

互いに弱点であるドラゴン技を繰り出す。

鋭い爪を構え、シロナのガブリアスに立ち向かっていく。

対するシロナのガブリアスは見境なく暴れまわっている。

ファイランのガブリアスが僅かに相手に爪を突き立てたが、まさに竜  
の怒りとばかりに大暴れするシロナのガブリアスに反撃を食らい、大  
きく吹き飛んでしまう。

地面に爪を突き立て、吹き飛ばされた威力を減衰させる。

態勢を立て直し、立ち上がったガブリアスは再び果敢にシロナのガ  
ブリアスに向かっていく。

またしても僅かにダメージを与えはしたが今度こそ大きな一撃を  
お見舞いされてしまう。

「ガブリアス！」

ガブリアスが気を失い、地に伏す。

ボールにガブリアスを戻して、次のポケモンに交代する。

「お疲れ様…エンペルト！」

シロナのガブリアスは一先ず暴れつくし、混乱しているようだ。

ガブリアスは倒されてしまったがこれは大きなチャンスだ。

ガブリアスがもし混乱でエンペルトに攻撃出来なければ、れいとう  
ビームでガブリアスを確実に倒すことができる。

故に、ここでファイランとエンペルトが取る行動は、

「ガブリアス！交代！」

「エンペルト！くさむすび！」

れいとうビームを受けに来たトリトドンを狙ったの1点読みのか  
さむすび。

「ほわ〜」

ファイランの読みは的中。トリトドンに草が絡み付き地面に縛り付ける。

唯一の弱点であるくさタイプへの攻撃をまともに食らったトリトドンはそれ以上戦うことは出来ず、静かに気を失った。

トリトドンが倒れたことで、お互いの残りのポケモンは2匹ずつとなった。

シロナのラスト2匹、そのうちの1匹はガブリアス。

「ルカリオ！」

もう1匹をシロナは繰り出した。

「エンペルト…なみのり！」

「ルカリオ、インファイト！」

エンペルトが水を呼び出し、水流をルカリオにぶつけようとする。

だが、ルカリオの方が早い。

ルカリオはエンペルトに肉薄し、強力な打撃を叩き込む。

エンペルトは翼で打撃をガードしようとするが、鋼の拳が鋼の翼を砕く。

攻撃を受け止めながら後ずさるエンペルトに容赦なく追撃するルカリオ。

連続攻撃ですっかり疲弊したエンペルトに最後の止めの一撃を放ち大きく吹き飛ばす。

「エンペルト…い！」

完全に戦闘不能となつてしまったエンペルトをボールに戻す。

いよいよファイランの手持ちは最後の1匹になった。

「…フェローチェ！」

「インファイト！」

「しんそく！」

ルカリオが一瞬で姿を消し、フェローチェの目の前に現れる。

目にも止まらぬスピードで拳を繰り出し一発食らわせる。

だが、フェローチェもさすがのスピードといったところか、瞬時に反応し反撃に出る。

ルカリオに蹴りを食らわせ吹き飛ばす。

放り上げられたルカリオに素早く飛び掛かり追撃する。

2度目の蹴りにルカリオは地面に叩きつけられて転がる。

そのまま重力の助けも借りてルカリオに向かって膝蹴りをお見舞いする。

ルカリオを倒すことには成功したがフェローチエの耐久ではしんそく1発だけでも結構なダメージを貰ってしまった。

次の攻防でこの戦いの決着は付くだろう。

シロナは最後のポケモン、ガブリアスを繰り出した。

「フェローチエ！インファイト！」

「ガブリアス！げきりん！」

フェローチエがガブリアスに接近、首元に回し蹴りを入れる。

この一撃で決める、全力の一撃。

だが、

「……グアアアオ！」

すんでのところでガブリアスは攻撃を耐え抜いた。

そして、竜の怒りがフェローチエに牙を向く。

ガブリアスの腕が振りぬかれ、まさしく暴力という言葉が似合う力でフェローチエを薙ぎ払う。

「フェローチエ!!」

倒れたフェローチエに、思わずファイランは駆け寄り抱きしめる。

フェローチエも残り僅かの力をふり絞ってファイランの頬に手を添える。

流れ落ちる水滴を拭うために。



「フェロっ、チエ。フェローチエ、ごめん、ね。無理させちゃったのに、私たち、っ！」

涙と一緒に嗚咽も増していき上手く喋れていない。

「ここまで様ね。でも、たった4匹で私のポケモンを5匹も倒して、最後の1匹をここまで追い詰めたトレーナーはアナタが初めてよ。」

…正直、後1匹いたら私は負けていた可能性が高いわ。」

「っ、シロナさん…」

ファイランとフェローチエにシロナが声を掛ける。

「っでも、わたし、勝てなかった…!!」

「そうね。私がこんなこというのもアレかもしれないけど、誰だって負けることはあるわ。それでも、立ち上がってまた戦えるか、それが本当に強いつてことだと思いの。」

「また、立ち上がる…」

「そう！だから、また私に挑んできなさい！アナタは才能のあるトレーナーよ。私が保障するわ！…ま、でも一休みも必要ね。今日は久しぶりに家に帰らない？」

「…ハイー」

ファイランは涙を拭って立ち上がった。

精神的にも、立ち上がってまた戦うためにも、今日はこの敗戦を受け止めることが必要だ。

## Epilogue【シンオウ地方編】

フィランとシロナの戦闘が終わった後。

「…あ、悪いんだけど、先に帰っててくれないかしら？ちよつとリーグの事務所のほう寄ってくるから。」

「…わかりました。」

そういつてシロナはフィランに先に家に帰るように促した。

「さてと、後片付けしてさっさと帰りましょう。」

．  
．  
．

「ただいまー」

普段はしない、帰宅の挨拶をしながらシロナは自宅の扉を開いた。だが、シロナの予想に反して返答の声は聞こえない。

「アレ？フィラン？」

すると、足元に一枚の紙が落ちていることに気付いた。

扉に挟んであったのだろうか。

「なにこれ…」

紙を拾い上げ、内容に目を通す。

『シロナさん』

まずは今日のリーグ戦ありがとうございました。

おかげで自分の至らないところや、まだまだ強くなれてることがわかりました。

さて、本題ですが、私はこのまま、また、旅に出ることにしました。

シロナさんは一緒に帰ろうと言ってくれました。  
ですが私は勝って帰って来ることを心に決めていました。  
ですのでまだ帰れません。

また旅に出て、更に強くなって、もう一度シロナさんの前に立とう  
と思います。

勝手に申し訳ありませんが、今しばらく待っていてください。

今度こそ、勝ってここに帰ってきたいと思います。

それでは、また。

ファイラン』

内容としてはファイランからの簡単な書置きだった。

このままどこかに旅に出るというのだ。

「えー…：たく、あの子ったら。意外と行動派なのかしらね。

：旅に出たときもいきなりだったし、もともとそういう気質なのか  
もね。」

意外と大胆なことをするファイランに驚きつつも、そういう気質も  
あったか、などと考えながら、今日も一人となってしまった家に入っ  
ていく。

「…：そういえば、ファイランが帰ってくると買って買ってきたこの食材、  
どうしょ…」

シロナの両手には大きな買い物袋が握られていた。

~~~~~

「さて、と。行こうか。」

ここはミオシテイ、シンオウ地方の港町。

ファイランは今から自分たちが乗り込む大きな船を見上げていた。

「……」

フェローチェは横に立ってファイランに何か言いたげにしている。

「ん？シロナさんの家に帰らなくてよかったのだったの？

いいのいいの。それに負けたまま帰れないし。

逆にフェローチェはよかったの？リーグ戦の後いきなり船旅で。

一日くらいどこかで休憩してもよかったけど。」

「……」

フェローチエはフィランさえいればどこでも構わないのだ。  
地上でも、船でもそれは変わらない。

「ん。…ありがとね。これから、ずっと一緒にいてくれる？」

フェローチエはフィランの手を取る。

「そうだね。どこまでも一緒に行こう！」

新たな場所に向かうための船に、フィラン達は乗り込んでいった。

## ジョウト地方【HGS】編 壺、邂逅

ジョウト地方、アサギシティ。  
海に面した活気溢れる町で、大型の船舶なども出入りする港町である。

「やーつとついた…」

慣れない船旅に疲れを感じていたフィランは船から降りてぐーつと背伸びをする。

頭の上で大きく伸ばした手を下ろし、一息つく。

「おお、揺れてる揺れてる。」

船から降りたばかりで、体に残る揺れの感覚に戸惑いながらも少し笑みをこぼす。

「さて、まずはウツギ博士って人のことに行かなきゃな。」

…ワカバタウンか。えーつと？まあまああるな…」

マップを確認しながら一先ずの目的地を確認する。

ワカバタウンにいるウツギ博士。

まずはその人物に会いに行かなければならない。

くくくくくくくくくくくくくくくく

事はシロナとのリーグでの戦いの後に遡る。

「…うむ。その様子だと今日のところは敗北を喫した様だな。」

「ナナカマド博士…」

リーグの入り口でナナカマドに出くわす。

頬に残る涙の痕や、フィランの表情等から勝負の結果は察した様だ。

…  
…

「そうか。まあ一度負けたくらいで諦めるような子なら、そもそもシロナ君も送り出していないだろうしな。」

ファイランの口から改めて今日の敗北の事、更に強くなって必ずリベンジに来る事、その他諸々を報告していた。

「それで、もっと強くなりたいんです。もう一回シンオウ地方回るのもいいかもしれないんですけど…」

「なるほど、何か新しい要素が欲しいといったところかね。」

「そうなんです。自分の足りないところを見つげるためにも、もっと色々な物を見てみたいと思ひまして。」

ナナカマドの言葉にファイランは頷きながら言葉を発する。

「そういうことなら、他の地方に行ってみるのはどうだ？」

「他の地方？」

「そうだ。他の地方にはまた違ったジムリーダーがいて、他の四天王とチャンピオンがいる。それにこことは違う場所に暮らす人々の文化なんかを見てみるのもいいかもしれない。」

「なるほど…それはいいかもしれません。けど、他の地方なんて何も知らなくて…」

ナナカマドの提案は魅力的だった。だがあいにくファイランは他の地方のことなんて何もわからないし、どこに行けばいいかの当ても無い。

「そう言うと思っていたよ。」

…ジョウト地方にウツギ博士、というポケモン博士がいる。彼も私と同じようにポケモンの進化について研究しているな、面識がある人物なわけだ。

そこで、ジョウト地方に行ってみるのはどうかね。もちろん彼には私から話をしておく。ジョウトのジムもリーグもレベルは高いと聞く。修行には持って来いだろう。」

「ナナカマド博士…ありがとうございます。」

~~~~~

こうして今回のジョウト地方でのジム、リーグへ挑戦が決まったのである。

因みにナナカマドはその日中に出発してしまうとは思ってもおらず、シロナからその日のうちに旅立ったことを聞き慌ててウツギ博士へ連絡したのだった。

そういうわけで挨拶もかねて、ポケモン図鑑をジョウト地方のポケモンに対応したものにアップグレードしてもらいにウツギ博士に会いに良くことになっている。

「今日中には着かないな。これ。」

改めてマップを確認する。

何度見ても距離は縮まらないのだ。諦めてのんびり行く事とする。

道中にジムがある町もあるが、まずはウツギ博士に会いに行くのが優先だ。

そのあと順番に挑んでくことにして、ワカバタウンを目指して歩き始めた。

---

「おはよう。 母さん。」

少年が自室からリビングに降りてくる。

「あら、やっと降りてきたわね。」

少年の母親がそれに気付き、言葉を発する。

「さっきまでコトネちゃんに来てたのよ。仲良しのマリルちゃんと一緒に追いかけてっこしてたわ。それと！お隣のウツギ博士がなんでも手伝って欲しいことがあるとかで呼んでたわよ。」

「わかったよ。これ食べたら博士のところに行くってくる。」

少年は席について簡単な朝食を取りながら母親の話に相槌を打つ。

「…ちそうさまーじゃあ、行ってきますー！」

「気を付けるのよー！」

食事を終えて慌ただしく出かける少年を、母親は優しいまなざしで送り出した。

「おはようございます。ウツギ博士。」

「おはよう、ヒビキ君。待っていたよ。」

ヒビキと呼ばれた少年は家を出てすぐ隣にあるポケモン研究所に來ていた。

もちろん自分を呼んでいたというウツギ博士に会いに來たのだ。

「ヒビキ君は僕が何を研究しているか知っているよね？」

「はい。ポケモンの進化とタマゴについてですよね？」

自分のポケモンはまだ持っていないが、ポケモントレーナーにあこがれるヒビキはよく近所の研究所にきて色々で見学させてもらっていた。

「そうーそれでね、僕の知り合いのおじいさんが、よく色々な物を見つけては大騒ぎしているんだけどね…」

そのおじいさんからまたメールが來たんだ。あらかた、またポケモンのタマゴだと思っただけど…僕も助手も忙しくて手が離せないんだ。今日は他にも來客の予定があったりしてね。そこでヒビキ君、おつかいを頼まれてくれないかな。」

「いいですよー！」

いつも見学させてもらって少なからず迷惑を掛けている。それくらいお安い御用だ。

「本当かい?! 助かるよー！」

ウツギ博士は一つ悩みの種が消えたと言わんばかりに声をあげた。

「それと、本当はこっちが本題なんだけど、ポケモンと人の絆についても色々調べていてね。どうだろうか、そこにいる3匹から1匹選んで一緒に過ごして貰えないかい？」



「え!! ポケモン貰えるんですか!!」

長年、自分のポケモンという物にあこがれていたヒビキからすると願ってもない話だった。

「もちろん。君が優しい子だっていうのはよく知っているからね。君なら安心してポケモンを任せられるよ。」

「やります!! やらせてください!!」

「よかった。じゃあそこにいる3匹の中から1匹選んでくれるかい?」

ヒビキは大喜びでウツギの指差した方へ走っていく。

そこには3つのモンスターボールが置かれていた。

「どのポケモンにしようかな〜…」

「ははは、君の最初のパートナーになる子だ。じっくり悩んで決めてくれ。」

初めてのポケモンをなかなか決められないヒビキ。

そんなヒビキを見守るウツギに助手の一人が声を掛けた。

「失礼します。例の方、いらっしやいました。」

「あ、わかった。すぐ向かうからお茶出しといってくれるかい?」

先ほどの会話の中ででた来客の件だろう。

ウツギは助手に「先ず指示を出すとヒビキのほうへ戻ってきた。

「ヒビキ君、決まったかい? ちよつと僕の方は来客があつて席を外さないといけないんだけど…」

「はい! 僕、この子します!」

ヒビキが選んだのはほのおタイプのポケモン、ヒノアラシだ。

「そうかい。よし! じゃあおつかいの方も頼んだよ!」

これ、僕のポケギアの番号だから、何かあつたら連絡してよ。」

そういつてウツギはヒビキのポケギアに番号を登録する。

「はい! 行ってきます!」

ヒビキはポケモンを貰ったのがよほど嬉しかったのか、またしても慌ただしく研究所を出ていった。

その後、ウツギも待てせている客人のもとへ急いだ。

アサギタウンから移動してきて、ようやくワカバタウンについた  
ファイラン達。

現在ウツギ博士の研究所に来ていた。

「やあ、お待たせしました。君がファイランちゃんだね。僕がウツギ  
だ。」

少し待っているように言われた部屋で待機していた所、目的の人物  
が現れた。

「ファイランです。お忙しい所お時間を設けていただきありがとうございます  
ございます。」

立ち上がって礼をする。

「いやあ、いいんだ。それにナナカマド博士のお願いでもあるし、無下  
にはできないよ。さ、座って座って。」

それから、ファイランは軽く自分の記憶の話や、シンオウでの旅につ  
いて、そして更に強くなるためにこのジョウト地方に来たことを説明  
する。

「なるほどねえ。それにしてもその年でもう1地方のバッジを全部  
持っててチャンピオンにまで挑戦してるのかあ。」

「…はい。チャンピオンには敵いませんでしたけど。」

「あつ、ごめんごめん。そういう意味じゃなくてね。実は今日ポケモ  
ンを手渡した子が一人いてね。ちようど君と同年くらいなんだ。」

彼は今日初めて自分のポケモンというのを手にした訳なんだけど、  
君はもうそのずっと先にいるんだなあと思ってね。」

「そうでしたか。その子も旅に？」

「多分そうなるんじゃないかなあ。今はちよつとおつかいを頼んでて  
ね、そのうち戻ってくるはずだから会って見るといいんじゃないかな

？お互い良い刺激にもなるだろうしね。」

「では、是非…」

ガシヤン！

突如、フィランとウツギの会話を遮るかのように、何かが割れる音がした。

「…その子、帰ってきましたかかね？」

「違うと思うよ！」

冗談もほどほどに、急いで物音の方へ向かう。

部屋に入ったウツギが、真っ先に異変に気付く。

「モンスターボールが一つ失くなって！」

ヒビキに一つ渡したモンスターボール、それが残り1つになっているのだ。

あたりには先ほどの音の発生源と思われるガラス片が散らばっている。

「博士！私いま戻ってきたんですけど、研究所のほうから急いで走っていく人を見かけました！そちらの子と同年代くらいの男の子でした！」

「どうやら外出していた研究員が下手人らしき人物を見かけたらしい。」

「ウツギ博士！私、あたりを探してきます！」

すぐに追うべきだと判断したフィランはウツギにそう告げ、飛び出していった。

研究所を出て西へ犯人を探して進んでいくと、ちょうど自分と同世代くらいの、帽子に赤いパーカーの男の子が佇んでいた。

「見つけたー！」

ようやく犯人を見つけたファイランはその男の子に駆け寄る。

「ハア：君だね？博士からポケモンを：ハア」

ここままで、走ってきたので息が上がり言葉が途切れ途切れになってしまう。

目の前の少年は頭に疑問符を浮かべている。

「そうだけど：？」

（確かに博士からポケモンを貰ったけど：何か用だろうか？）

「っ！ハア：ポケモン、出して。博士のところに一緒に行くよ。」

（素直にいうこと聞いてくれるとは思えないけど：）

「えっ!?：ああ、そういうことか！よし！受けて立つぞ！ヒノアラシ！」

（トレーナー同士が会ったらバトルだもんな。）

ヒビキはモンスターボールからヒノアラシを出し、臨戦態勢を取った。

そんなヒビキの様子を見たファイランはやっぱり、といった様子で肩を落とす。

「：抵抗するんだね。」

「えっ?？」

ボールを構えるファイランと、最後の言葉の意味がわからないでいるヒビキ。

「その子に罪は無いからね、なるべく痛くしないようにね。」

そういうとファイランの持つ青いボールが一瞬光った。

白い影が視界を横切ったと思うと、次の瞬間、ヒノアラシは目の前で気絶していた。

「あれ!?ヒノアラシ!？」

「さあ！観念しなさい！ポケモン泥棒！」

何が起きたのかわからず戸惑うヒビキにファイランが詰め寄る。

「えっ!?何のこと?泥棒?」

「えっ!?さっき自分で認めてたじゃん…?」

「えっ?」

・  
・  
・

「だから本当に違うんだって!僕は泥棒なんてしてないよ!」

「さあ、どうだかね?すべては博士に会えばはつきりするでしょ。」

「ヒビキと、そのヒビキの腕を後ろでがっちり掴んで離さないガブリアス。」

そしてフィランの三者は、お互い来た道に戻ってワカバタウンへむかっていた。

道中で自身の無実を叫ぶヒビキと、とりあえず白か黒かわからないので博士に会いに行けばすべてわかるだろうというフィラン。平行線のやり取りを続けながら歩いていった。

フィランの腕力ではヒビキを抑え続けることは難しいため、とその役目を担っているガブリアスはあまり深く考えてはいない様だ。

そうして到着した研究所。

ドアを開けて思い思いに声を上げる。

「ウツギ博士!戻りました!」

「ウツギ博士!助けてください!」

「グアウ!」

慌てて走ってきたウツギが出迎える。

「どういう状況だい?」

「下手人っぽい人捕まえたんですけど…」

「泥棒と間違えられてるので僕の無実を証明してくれると助かります  
…」

「グアウ…」

「…なるほどね。ファイランちゃん、その子はヒビキ君って言って、さつき話した僕が今日ポケモンをあげた子だよ。」

「……………本当だったんだね。」

「だから言ったじゃないか!？」

「ごめんなさい…ガブリアス。放してあげて…」

「グアウ！」

やっとガブリアスの腕から解放されたヒビキは怪訝な目でファイランを見やる。

「それで、僕の無実は証明されたわけだけど君は一体誰なんだ？」

「いや、本当、すいませんでした。私はファイラン、シンオウ地方から来たポケモントレーナーです。」

「そう、ヒビキ君にも紹介しないとね。ファイランちゃんは今言ったようにシンオウ地方から来たんだ。いうならば武者修行ってところかな?」

「はい。」

「で、こっちはヒビキ君、さつきも言ったけど今日僕から初めてのポケモンを受け取ったばかりの新米トレーナー。」

ま、トラブルはあったけど二人とも同じくらいの年だしさ。仲良くやっついていこうよ。」

「本当、ごめんなさい。」

「もう大丈夫だって。君も悪気があった訳じゃないだろうし。ほら。」  
ヒビキから手が差し出される。

「ありがとう…」

ファイランもその手を取って、握手の形となる。

すると、先ほどの青いボールが再び光った。

いつものごとく勝手にフェローチェが出てきたのである。

「……………」

「ん?…どうしたの?…急に?」

フェローチェはヒビキと握られたファイランの手をじっと見つめて

いる。

これまで、ファイランの周りにいなかった同世代の異性、という存在に何かを警戒して出てきたのである。

ファイランはそんなことはつゆ知らず、ヒビキと手を放すタイミングをすっかり忘れてそのままの状態でフェローチエと会話していた。

バシツ!

そんなファイランの手をフェローチエが無理やり奪い取って両手で握った。

「…どうしたの〜?」

そこでようやく何かを察したファイランが少しからかうようにフェローチエに言葉を掛ける。

「あ、取り込み中悪いんだけど、君のポケモンかい?」

ウツギが割り込んで話しかける。

「そうです。私の大切な相棒です。」

「そうかい…とても珍しいポケモンだね、僕も初めて見るよ。」

それにしても、ずいぶんと仲がいいんだね。」

「はい!ずっと一緒になって約束したので!」

「…そうか!とてもいいことだと思っようよ!」

ファイランとフェローチエの様子を見たヒビキは、

(ウツギ博士の言ってた人間とポケモンの絆ってこういうことなのかなあ…)

と考えていた。この二人のは多分違う部分もある。

## 式、犯人

「ところで、結局犯人はどこに行っただらうね？」

ヒビキの疑いがめでたく晴れたことで一つの疑問が浮上した。ウツギの研究所からポケモンを盗んでいった犯人のことだ。

「あ、僕、フィランと会う前に赤い髪の、別の同い年くらいの子と会ったんだ。」

「そういえばワニノコを連れていた……」

ヒビキが思い出したかのように言う。

本当は忘れていたわけでは無かったが、フィランとのバトル、そして強制連行と言うタイミングを逃していた。

「きつとその子だ！なんせ僕の研究所から持ち去られたポケモンもワニノコだからね。」

「そうじゃないかしら。私も研究所の窓をのぞき込んでいる赤髪の男の子を見たから。」

研究所の入り口から新たな声が聞こえる。

「コトネー！」

彼女はコトネ。ヒビキと同じくワカバタウンに住む彼の幼馴染だ。

「やあ、コトネちゃん。」

「おはようございます。ウツギ博士。」

「で、いきなり出てきてどうしたんだよ。」

ウツギに軽く会釈をしたコトネにヒビキが問いかける。

「……強そうなポケモンとそのトレーナーに連行されるヒビキが見えたから、何事かと思って話聞いてたの。」

「なんだよ！見てたなら助けてよ！」

「まあまあ、疑いは晴れたんだからよかったじゃない。」

「うーん……」

コトネの返答にヒビキはいまいち納得が言っていない様子だ。

「ま、まあその話はいいんじゃないかな？」

そんなやり取りにヒビキを誤認逮捕した張本人が誤魔化すかのよう水を差した。



「コトネちゃんだっけ？私はファイランって言います。よろしくね。」  
「コトネです。よろしく。」

二人は軽く自己紹介をして、話をあやふやにさせるファイランの作戦は見事成功したのであった。

「そうだ！ところでヒビキ君。あのおじいさん、何だつて？」

泥棒騒ぎですっかり忘れていた本来の要件を思い出したウツギ。

おじいさんの要件は一体何だったのだろうか。

「ああ、そのことなんですけど、これ…」

ヒビキはそういつて一つのポケモンのタマゴをウツギに手渡した。

「なるほどね。やっぱりタマゴだったか。確かにあまり見ない種類の物だけど、今時タマゴ一つで大騒ぎするなんて相変わらずだなあ。」

ヒビキはウツギのあのおじいさんへの評価に苦笑いする。

「まあでも、もしかしたら何かあるのかも知れないし、僕の方で調べてみるよ！」

「わかりました。それと、オーキド博士という人にも会ったんです。で、これを貰ったんですけど…」

「本当かい！オーキド博士はポケモン研究の権威的人物でね、その人から直接図鑑を貰うなんてなかなかあることじゃないよ！」

「そんなすごい人なんですか。」

「そんなすごい人なんだよ！確かにヒビキ君はいいトレーナーになる素質はある気がしてたけど…オーキド博士にも一目置かれたとなると本物かもしれないね！」

「どうだろう、このまま旅に出てジムに挑戦、ゆくゆくはリーグ、チャンピオンなんてね！」

「いや、そんな…」

一人ハイテンション気味に語るウツギに若干引き気味に謙遜をす  
るヒビキ。

「ん？ヒビキ君もリーグ目指すの？じゃあライバルかな？」

その話を聞いていたファイランも横から会話に参加してくる。

「そうだね。ファイランちゃんは強力なライバルになりそうだ。」

ま、なんにせよリーグを目指すなら長い旅路になる。一先ずはお母さんに話してくるのがいいんじゃないかな。」

「そうですね…」

「…ヒビキ君と戦うのはしばらく先になりそうかな。じゃあ、先行つてるね。」

その後、帰宅したヒビキ、コトネを見送るフィランとウツギ。

「さて、騒がしくなっちゃってすまなかったね。さ、凶鑑のアップデートトをしよう。」

「はい。よろしくお願いします。」

泥棒騒動、ヒビキのおつかいの結果と、当初の目的がずいぶんと先延ばしになってしまったがようやくこれで凶鑑をアップデートしてもらえる。

「フィランちゃんは一先ずキキョウシティに向かうのかな？」

「そうですね、ジムの順番的にもそれがいいみたいです。」

「そうだね、それがいいと思うよ。」

キキョウシティはジムもあるけど、マダツボミの塔っていう塔があつてね、そこを見てみるのも面白いかもしれないね。」

世間話をしながら凶鑑のアップデートを待つ。

「そうなんです。行ってみます。」

「つと、アップデート終わったみたいだ。はい、これ。」

アップデートが完了した凶鑑を受け取る。

「ありがとうございます。」

「どういたしました。じゃあ、フィランちゃんも気を付けてね。何かあつたら遠慮なく相談してほしい。」

「何から何までありがとうございます。それでは、行きますね。」

「ああ、行ってらっしゃい。」

ウツギの研究所を後にし、キキョウシティを目指す。

これからようやく本格的なジョウトでの旅が始まるのだ。

...

「オタチ、ポツポ、どれもシンオウではみないポケモンばかりだな。」  
ヨシノシテイを通過して30道路を行くファイラン。

道中で出会った野生のポケモンを早速新しい図鑑でチェックする。  
このジョウトでの旅は2つある。

1つは自分や既存のメンバーの強化。

もう1つはシロナも言っていた敗因の1つ、手持ちが4匹しかないことを解消すること。

つまり手持ちの5匹目、6匹目を埋めることだ。

「でもよさそうな子いないなあ。」

シンオウでなぜファイランは4匹で旅をしたのか。

その理由が“よさそうなポケモンがない”である。

最愛のフェローチェは当然として、タマゴから孵ったフカマル、ナカマドの研究所で出会ったポツチャマ、そして森の洋館で出会ったロトム。

全員何かしらの運命的な物をファイランは感じて仲間にした。

それはファイランにしかわからない直感的な物ではあるが。

たとえばあの日、ナカマドの研究所で出会ったポツチャマが別の個体であつたら。

もしかするとファイランはヒコザルやナエトルを選んでいたらかもしれない。

いや、そもそも誰も選ばずに2匹の手持ちで旅に出ていたかもしれない。

ともかく、ファイランは自身の直感にしたがつて仲間を探している。

これは彼女の中で大きな基準であるようだ。

「まあいつか見つかるかもしれないし、気長にやろうか。」

ファイランはいつも通りそういった。見つからないものは焦ってもしょうがない。

基本はマイペースに、勝負は真剣に、ジョウトでも変わらずに進ん

でいくのだろう。

「そうこうしてる内に着いたな。」

相変わらず、野生のポケモンやらその場のトレーナーやらと勝負している内に目的地に着いたらしい。

「改めまして、キキョウシティだね。ま、昨日はゆっくり見ている暇もなかったからアレだけど…」

ここはアサギシティからワカバタウンに行く途中に昨日通り過ぎたばかりだ。

「もう日も暮れてきてはいるし、ジムは明日にするか…」

やはり午前中の騒動で少しタイムロスがあつたか、日もだいぶ傾いていた。

そんな日暮れを眺めながら、周囲を見渡すと、

「あ、アレか。マダツボミの塔。」

町の北側に立派な三重塔が見えた。

「へえ、中はこんな感じなんだねえ。」

木造の塔の内部は同じ格好に剃髪の人物が何人もいた。修行僧だろうか。

「みんなも見てごらんよ。」

シンオウでは見ないづくりの建物を見せてあげようと、ボールからポケモンたちを出す。

すると、近くにいた僧が数人駆け寄ってくる。

「そこなお嬢さん！ポケモントレーナーですな！拙僧と手合わせ願いたい！」

「いや、拙僧が！」

「いやいやー！」

「ええ…」

なんでもここはポケモントレーナーの修行の場らしく、積極的にバ

トルを仕掛けることはよくあることだそう。

今ファイランを囲んでいる4人の僧も当然修行のためにここにいたり、バトルを仕掛けるのは必然だったのだろう。

「そういうことなら、〃4人まとめて〃でいいですよ。」

大胆不敵に笑うファイラン。

シロナに負けはしたがそれでも自分の実力にはそれなりに自信があった。

それにゆつくり観光したいのでとつとと終わらせたい。

「なんと！我々も見くびられた物ですな。」

「ええ。それでは遠慮なく行かせてもらいましょう！」

4人の僧侶がボールを構え一斉に投げる。

こちらは既に4匹とも出ているのでその必要はない。

「みんな、行けるね？」

「————！」

ファイランの声にそれぞれ声をあげるポケモンたち。

そのポケモンたちが4方向に飛び出した。

「いや、恐れ入った。随分と強くてらっしゃる。」

僧侶の一人がファイランにお辞儀をする。

結果はいうまでもなく圧勝だった。

僧侶たちが繰り出したのはマダツボミ。

それらをフェローチェの脚が、ガブリアスの牙が、ロトムの方がいともたやすく撃破していった。

水タイプのエンペルトもれいとうビームがあるので全く問題なしだ。

「こちらこそ、マダツボミは初めて見たので、勉強になりました。」  
相手のお辞儀にファイランも軽く会釈をし、その場を後にした。

「わ、見てごらんよこれ。この柱ちよつと揺れてない？面白いね。」

「フェウ！」

塔の真ん中に一直線にそびえたつ大きな柱。

よく見ると少し揺れているのがわかる。

その揺れに合わせてロトムもなんだかゆらゆらし始めて、その光景に笑みが漏れる。

「ふふ。あ、次が最上階みたいだね。」

楽しく観光している内に最上階に手前まで来ていた様だ。

「さて、と。」

一度ポケモン達を戻して梯子を上る。

「最上階つと、ん?」

たどり着いた最上階。そこでは一人の老いた僧侶と赤髪の少年が何やら話をしていた。

「そなたの実力、確かに偽り無し。約束した通り、この技マシンを渡そう。」

老人は技マシンを差し出す。だが、赤髪の少年がそれを受け取る前に、付け足すように言葉を続ける。

「だが…もうちつと、ポケモンをいたわるべきですぞ。そなたの戦い方はあまりにも厳しすぎる…」

ポケモンは戦いの道具などではないのです…」

老人がそういうと赤髪の少年はひつたくるように技マシンを受け取った。

「ふん…長老なんて偉そうに名乗ってるくせに全然齒ごたえ無いじゃないか!

ポケモンに優しくなんて甘いこと言ってる奴に俺が負けるわけがない。

俺にとって大事なものは強くて勝てるポケモンだけだ!それ以外はどうだっていいのさ。」

「…あいつ…」

あまりにもあんまりなセリフを豪語する少年にフィランの何かがキレた。

「おい、君、待てよ。」

横を通り過ぎて梯子を降りようとする少年に言葉を投げかける。

「なんだよ。」

「君にとつてポケモンってなんだよ。」

「はあ？さっきのジジイみたいな奴が他にもいるのかよ。」

ポケモンなんて強さを証明するためのものだろ。」

「そう。じゃあ私と勝負してよ。因みに、私は自分のポケモンを家族だと思ってる。だから、ポケモンを道具だと思ってる君には負けな  
い。」

「…何言ってるんだよお前？まあいいや、お前もぶっ倒して、甘ったれた  
事行ってる奴がみんな間違ってるって証明してやるよ！」

「行け、ゴース！」

「ロトム！」

塔の最上階は下の階に比べてやや狭い。ガブリアスやエンペルト  
が暴れるには十分では無い

だろうから、ロトムから戦闘を開始する。

「ロトム！あくのはどう！」

「ゴース！避ける、さいみんじゅつだ！」

少年は果敢に指示を出す、そもそも力の差は歴然。

ゴースのさいみんじゅつが準備できる前にあくのはどうはゴース  
を呑み込んだ。

「くそっ！役立たずめ！」

「…この勝負、失敗だったか。」

「なんだと？」

少年の言葉にファイランはため息交じりに言った。

「だって、敗因はポケモンだけの物じゃないのに、それに自分のことを  
役立たずなんていう人間のために戦わなきゃならないポケモンを私  
は倒さないと行けないんだもん。」

そんなの、誰も幸せにならないよ。君のポケモンも、私たちも。」

「っ！ふざけるな！」

少年は怒りをあらわにしながら次のボールを放った。

「ワニノコ！みずでっぼう！」

「タイプ相性もろくにわからずに、負けたのはポケモンのせいだなんて。ねえ。」

ロトム、可哀そうだけど、10まんボルト。」

ロトムから放たれた電撃がワニノコに突き刺さる。

「さて、ポケモンを道具だという君と、家族だという私、強いのはどちらかはつきりしたけど…」

「ツブ…くそっ！」

少年は自分のポケモンをボールに戻してさっさと走ってどこかに行ってしまった。

「あっ…おい！」

ファイランも追いかけてようとするが、下の階の人影にまぎれてあつという間に見失ってしまった。

それに、あの少年をとっ捕まえてどうこうしたい、という訳でも無かったのでほっておくことにした。

さて、気を取り直して、最上階。

先ほど長老、と呼ばれていた人物がこちらに近づいてくる。

「そなた。」

「はい？」

「先ほどの勝負、見事でした。」

「ど、どうもありがとうございます。」

「そこで、ワシとも手合わせ願いたい。勝てたら先ほどの少年にも渡した技マシンを差し上げましょう。」

「あ、じゃあよろしくお願いいたします。」

「フェローチエ、これ知ってる？ 畳っていうんだって。」

マダツボミの塔の長老にも勝利し、塔を降りてきたファイラン達。

その後は一先ず宿を取って明日に備えることにした。

今日の宿はシンオウでは見ることの無かった、所謂旅館というスタ



イル。

珍しい畳を前にファイランも少しテンションが上がり気味だ。

「……」

「なに？」

だが、そんなファイランをよそにフェローチエはあることが気になっ  
ていた。

「……………」

「え？さっきの男の子？赤髪…で、ワニノコ連れてた…？あつ…」

直後、ファイランのやべつという顔にフェローチエはため息を漏ら  
す。

「いや、ほら、あの時はちよつとイラつと来てたつていうか…ね？」

「……………」

「だって、私にはみんなが大事だし…フェローチエのことも、本当の家  
族、なんてどんな人か知らないけど…それ以上に大好きだから…あんな  
言い方許せなくて…」

そういつて上目づかいでフェローチエを見あげるファイラン。

その表情にフェローチエもなんだかどうでもよくなつてしまった。

「……」

「うん！次あつた時はちゃんと確かめよ！」

彼とは、近いうちにまた会う、そんな気もしていた。

だからその件はその時でいいだろう。

今のところは考えるべきは明日のジム戦。

そのためにも今日はゆつくり休むことにしよう。

## 参、悪者

キキョウシティに到着した翌日、少しゆっくり目覚めたファイラン。  
「…さて、行きますか。」

少々予定より遅れてしまったが、何はともあれジムを目指すことにした。

「俺はキキョウジム、ジムリーダーのハヤト！」

「ファイランです。」

「大空を華麗に舞う鳥ポケモンの本当の凄さ、思い知らせてやる！」

「…望む所です。」

キキョウシティのジムリーダー、ハヤトはなかなかに勢いのある人物のようだ。

だが、ファイランもそれなりの経験は積んできており、そのハヤトの勢いに負けずに立ち向かう。

「ポッポ！」

「ロトム！」

お互い最初のポケモンを繰り出し、戦いが始まった。

「…ジムを突破した証としてポケモンリーグ公認のジムバッジを持って行けよ！」

俺から君に送るのはこのウイングバッジだ！」

「ありがとうございます。」

ファイランはハヤトからウイングバッジを受け取る。

ジム戦はファイランの圧勝だった。

修行の旅をしにきているファイランに誇りは無い。

故に常に全力勝負なのだが…。

さすがに、シロナをギリギリまで追い詰めたトレーナーに最初のジムは少し簡単過ぎた様だ。

「さて、意外と早く済んじやったし次の町目指しちゃうか。」

ジムの入り口を背に向け、少し伸びをしながらそんなことを考える。

「おい、ファイランさん。」

すると、どこからか自分を呼ぶ声がする。

声の方向、その人物を探してみると、

「あつ、ウツギ博士の所ー!」

その人物はウツギ博士の研究所にいた助手の一人だった。

「どうも!どうしたんですか?こんなところで。」

ファイランは声をかけてきた人物に最もな疑問を投げかける。

「それが、ヒビキ君に渡すものが有って、博士の頼みでここに来ていたんです。」

用事を済ませてこれから帰るって所で貴女を見かけまして…」

「そうだったんですね。お疲れ様です。所でそのヒビキ君は?」

「ああ、ヒビキ君ならもう次のジムに向かいましたよ?」

「えっ?」

「ええ、ですから。キキョウジムはもう午前中に済ませて次の町に向かったんです。」

どうやら、ファイランが寝坊している間にヒビキはここにたどり着き、ジムへの挑戦も終え、先に進んでいたらしい。

「…そうですか。多分私の方が先にここについていたのに…先越されちゃったかあ。」

ワカバタウンでも先に行っていると宣言した手前、少々悔しさを覚える。

「じゃあ、私も先に行かないとなんで!研究頑張ってください!それでは!」

「ええ、ファイランさんも頑張ってくださいね。」  
そんなこともあり少々駆け足で助手の男性に別れを告げ、先を急ぐことにした。

「ようし！着いた！」

だいぶ駆け足でキキョウシティ、ヒワダタウン間を進んだファイラン達。

道中で勝負を挑んできたトレーナー達は軒並み速攻で蹴散らしてきた。

「あれ…ヒビキくん！」

ヒワダタウン入り口で見覚えのある帽子とパーカーの組み合わせを見かける。

「ファイラン！まさか後ろから来るとは思わなかったよ。」

「ぐっ…今朝少し寝坊してね…その間にヒビキ君に先越されてたらしい…」

「なんだよそれ。」

ファイランが実力のあるトレーナーなんだろうということは最初のバトルと、あのガブリアスを見て察していただけに、意外と間抜けなその話に思わず肩の力が抜ける。

「ところでこんなところで何してんの？」

「あーそうだった！ファイランも手伝ってよ！」

「ロケット団、ねえ…」

ロケット団。

かつてカントー地方を中心に活動していた、ポケモンマフィアとも言われる犯罪組織。

その活動は多岐に渡り、金稼ぎのためにポケモンを利用したり傷つ

けたりすることもしばしばあったという。

3年前にあるトレーナーの手によって壊滅されたそうだが…

「僕も人から聞いた話だから詳しくは知らないんだけど…」

そのロケット団がこの井戸の中でヤドンのシッポを切って売りさばいてるらしいんだ！」

ヒビキにその話をした人物、ガンテツという老人がロケット団に憤り、単身で井戸の中に突入してしまったそうだ。

「もし本当に危険な連中だとしたらガンテツさんも危ないかもしれない。だから僕も助けに行く。」

「わかった。私も手伝うよ。」

ファイランにとってもポケモンに悪事を働く連中は見過ごしては置けない。

もしも自分のポケモンに魔の手が伸びないとは限らない。

その時は全力で守るのは間違いないが、そうならないように先に潰しておくのも手だろう。

「この下か…結構高さあるね…」

「ヒビキ君、あれ。」

そういつてファイランが指さしたのは一人の老人。

「ガンテツさんだ！とりあえず無事っぽい！」

「ここにはしごがある。それで一先ず降りよう。」

ファイランの提案により井戸の中へと降りた二人。

「おう、ヒビキか。」

「ガンテツさん。無事だったんですね。」

「おう。上で見張つとつた奴は大声で叱り飛ばしたら逃げていきよつた…」

じゃが、ワシも降りるときに腰を打つてしもてな。動けんのじゃ…」

ヒビキはガンテツの現状を確認し、とりあえず大事は無いことを確認する。

「だったら大丈夫です！僕たちが奥を見えます。」

「そうか、助かるわ。ところでそっちは？」

ガントツがファイランの方を見て尋ねる。

「私はファイランといえます。シンオウからきたポケモントレーナーで、ヒビキ君とはワカバタウンで知り合いました。」

「そうか、じゃあ悪いが頼んだわ。」

「はい。任せてください。」

一先ずガントツとは別れ、井戸の奥、洞窟のようになってい場所に入った二人。

中は薄暗く、はつきりとはわからないが複数のロケット団員がいる様だ。

「あつ！オイ！なんだお前ら！」

その中、見回りをしていてであろう一人に早速見つかってしまう。

「お前がちゃんと見張りしてないからだろ！」

「仕方ないだろ！変な爺さんに怒鳴られてビックリして落っこちちゃったんだから！」

「嫌だぜ？お前のせいで俺達まで怒られるの。」

見張りの声につられておくから更にロケット団員が集まってくる。

「さて、お子様が何の用かな？大人のお仕事の邪魔しちゃ行けないって親御さんに教わらなかったのか？」

あつという間に4人のロケット団員に囲まれてしまう。

「何が仕事だ！ヤドンを傷つけて、迷惑かけてるだけだろ！」

ヒビキが吠える。

「生意気なガキだ。これはちよつと痛い目にあつて勉強してもらおうか……！」

1人がそう言うと、4人のロケット団員はそれぞれにボールを投げた。

「ヒビキ君。君はあつちの奴お願い。こつちの3人は私が引き受けた。」

「えっ？」

そう勝手に言い放ったファイランはボールを既に3つ同時に投げて

いた。

「じゃ、じゃあ任せた！」

ファイランの一方的な宣言に少し戸惑いながらも、ファイランの出したポケモン達をみて任せても大丈夫そうだと判断したヒビキ。

彼も自分の相手に向き合った。

3人のロケット団員と対峙したファイラン。

繰り出したポケモンはフェローチェ以外の3匹。

対するロケット団のポケモン達はコラツタ、ズバット、アーボ。

「珍しいポケモン持つてるじゃねえか！お前をぶっ倒してそいつらもいただくとするか！」

「よーし、やっちなえ！」

ズバットが上から、アーボは地を這い、コラツタは駆け足で飛び掛かって来る。

「みんな、迎え撃って。」

その言葉にファイランのポケモン達も戦闘態勢を取る。

ズバットにはロトム、10まんボルトが、アーボにはガブリアスのドラゴンクローが、コラツタにはエンペルトのラスタールカノンがそれぞれを返り討ちにする。

「どうしたの？私を倒すんじゃないか？」

先ほどのセリフのお返しとばかりにロケット団員を煽り返す。

「こいつめちやくちやつえーじゃねえか!？」

「く、くそ！」

「構わねえ！次だ！」

慌てたロケット団員が次のポケモンを繰り出すが、

「次はこっちから行くよ！」

出てきたポケモンを、ファイランのポケモン達が先手を取ってまとめ、戦闘不能にした。

「チッ！逃げるぞ！」

一番ファイランから遠い位置にいた一人が逃げ出そうとする。

「ロトム！」

だがそんなことは許さない。

奴らはこちらのポケモンを奪うとまで宣言してきたのだ。到底許しては置けない。

「がっー！」

ロトムのでんじはがロケット団員に命中。

しばらくは痺れて動けないだろう。

「お、おいー！」

その場で倒れた仲間にも声をかけるロケット団員。

「ひっ。ゆ、許してくれ！」

こちらを向き許しを請うもう一人。

「ん、ダメ。」

再びロトムから電流が流れた。

「ヒビキ君、終わった？」

ロケット団員達を麻痺させて岩陰に捨てておいたファイランは、同じく戦闘を終えたヒビキに声を掛ける。

「ああ、こっちも大丈夫だったよ。」

「ん、よかった。」

どうやらヒビキと戦っていたロケット団員は逃げて行った様だ。

その後も何人かのロケット団員を撃退していき、行き止まりらしき所に到達する。

「アナタたちですか、私たちの邪魔をしているというの？」

そこにいたには今までのメンバーと似たような黒服に、青髪の青年。

見てくれるはここまでの相手と変わらないが、纏う雰囲気はただの下っ端では無いことを物語っている。



「ヤドンのシッポを切るのをやめろ！」

「そういわれましても…これも私たちのビジネスですから、やめるわけにはいかないのですよ。」

「なら、実力行使で行くまでです。」

「ほう、いいのですか？ロケット団でも最も冷酷と言われた男。このランスに挑むなど！」

目の前の男、ランスはボールを構えた。

「ああ、相手になってやる！」

ヒビキもマグマラシを出し、臨戦態勢を取る。

だが、横から何かがマグマラシに激突する。

「マグマラシ！」

「お前の相手は俺だ！ランスさん、加勢します！」

どうやら下っ端がまだ残っていたようだ。

不意打ちに驚いたマグマラシだが、態勢を整えてズバットに反撃をする。

「ふむ、ではあの少年は彼にお任せしますか。」

「じゃあ、私が相手ですね。」

一呼吸の後、2つのボールが宙を舞った。

「ズバット！あやしいひかり！」

「エンペルト！アクアジェット。」

エンペルトがアクアジェットでズバットに突撃する。

ズバットの放った光が届くころには、そこに誰もいなくなっていた。

「そのままラスターカノン。」

激突されふらふらと飛んでいたズバットに対し、エンペルトが狙いを定める。

「ズバット！避ける！」

ランスがズバットに回避を指示する。

だが、激突の衝撃からいまだ立ち直れていないズバットはゆっくり

と移動するだけで精一杯のようだ。

そして、銀の光弾がズバットに命中。

ズバットは大きく吹き飛び、そのまま地に落ちた。

「なかなかやるようですね。」

ランスはあくまでも余裕そうに言い放ち、次のポケモンを繰り出す。

出てきたのはドガース。

「それにしても、どうしてこうも我々の邪魔をする輩というのは…」  
「??」

バトルの途中だというのにランスが何かを話しかけてくる。

聞いてやる必要も無いのだが、つい、気を抜いてしまう。

「ドガース！ えんまく！」

その瞬間、ランスのドガースが煙幕を貼る。

「恐らくこのままでは負けてしまいますからね、今日は撤退と行きましよう！」

どうやら話しかけてきたのはこちらの油断を誘う作戦だった様だ。

「あ！ 逃げるな！ オイ！」

フィランも追いかけてようとするが煙幕で視界が遮られ身動きが取れない。

「ヒビキ君！ 無事？」

「うん！…でも相手には逃げられちゃったみたいだ！」

とりあえずヒビキの安否を確認する。

ヒビキの相手もこの煙幕に乗じて逃げて行った様だ。

その場で待機すること数分。

煙幕が晴れてヒビキとフィランは顔を見合わせる。

「逃げられちゃったね。」

「まあ、一先ずここから奴らを追い払うことは出来たから…」

逃がしたことに落胆を覚えつつもヤドン達を救うことが出来たことに安堵する。

「おーい！お前たち！」

すると入り口方面からファイラン達を呼ぶ声がする。

「ガンテツさん！腰はもう大丈夫なんですか？」

「おう。少しじつとしてたらだいぶ良くなったわ。

それにしても、上手くいった様じゃな。あいつらシツポを巻いて逃げて行きおったぞ。」

ガンテツはもう歩けるほどまで回復したようだ。

「これでこのヤドン達も一安心ですかね。」

敵を逃しはしたが、ヤドンも救って、ガンテツも大事には至らなかった。

それだけで今日はよしとすることにしたファイランであった。

# EX2, 断章―Day of Wine and Roses

↳ Maiden Voyage

シンオウ地方、ミオシティから船に乗り込みジョウト地方を目指すファイラン達。

初の船旅ということもあり、未知の経験に期待を膨らませていた。

「おお…凄いよ…あんなに港が遠くに…!」

デッキに上がり、既に小さくなってしまったミオシティを眺める。

他にデッキに上がっている乗客は少なく、迷惑にもならないだろうと思えばポケモン達をボールから出す。

「ロトム、イタズラしちゃだめだよ。エンペルトも海には飛び込まないでね。」

一応心配なメンバーにはあらかじめ注意をしておく。

こんな海の上でイタズラされては何があるかわからないし、エンペルトもみずタイプとはいえ広い海ではぐれてしまっただんでもない。

「夕日が綺麗だね。」

のんびりと水平線に沈む太陽を眺めながら横に立つフェローチエに語りかける。

「……」

「本当にいいんだって。みんなと一緒にならどこにいても同じことだよ。」

「……」

「まあシロナさんには少し悪い事しちゃったなって思うけど、ちゃんと書き置きもしてきたし、シロナさんならわかってくれると思うんだ。」

「……」

「そ。だから次のことを考えよ。」

フェローチエは本当こんなにすぐ出発してしまっただけ良かったのか

と言うことを言っている。

だが、ファイランは少しでも早く次に向かって動き出したい気分だったのだ。

最終的にファイランがそう決めたのであればフェローチェもそれ以上反対することは無い。

それももう船にまで乗ってしまったているのだからこれ以上どうこう言ってもしようがないということもある。

甲板でぼーつとするうちに時間は過ぎて、一面の海は黒く染まり、空には星と月が昇っていた。

「こんな風景も、今日船に乗らなかつたら見れなかつたかもしれないしね。」

上を見上げれば、街灯などのある地上とはまた違った空が見える。

今日はこの海の上が晴れていても、明日がそうとは限らない。

だからその日できることをしたい。

「ね?」

「……」

2人で顔を見合わせて、お互いに微笑んだ。

「さて、そろそろ冷えてくるだろうし戻ろうか!」

客室に戻ったファイラン達。

さすがに部屋に人1人とポケモン4匹が入るスペースは無く、今はファイランとフェローチェの2人きりだ。

「今日はごめんね…私が不甲斐ないばかりに…皆にも悔しい思いさせちゃったし…」

「……」

「それにフェローチェには最後まで戦って貰ったのに…」

一度は振り切ったかのように思われた今日の敗戦。

だが、人間嫌なことや、悔しい思い出に限ってそう簡単には忘れられないのだ。

これまでは人前だったり、他のポケモン達がいたりで気丈にふるまっていただけなのだ。

それがいま二人きりになったことで少し気が緩んで表に出てきたといった所だろうか。

「……」

「で、でも……！」

フェローチェの言葉にファイランが何かを言いかける。

「……」

それをフェローチェが抱き寄せて無理やり遮る。

「……」

「うん……」

フェローチェの胸の中でファイランの瞳から涙がこぼれる。

「……」

「うん……ありがとうね……一緒に強くなろうね……」

ファイランも落ち着いて、二人並んでベッドに腰かけている。

窓の外では黒い海に白波が流れて行っている。

フェローチェの肩にもたれかかって頭を預けているファイランは泣いたことで少し体力を消費したのか、少しウトウトし始めている。

「……」

そんな様子のファイランを見かねてか、フェローチェはもうベッドで横になるように促す。

「うん……でも……今はもう少し……こうさせて……」

そう応答するファイランはもう電池切れ寸前。返す言葉もかなり途切れ途切れだ。

「……でも……なんだか……夜の海って……」

「……」

フェローチェはその続きを待つがいつまでたつてもフィランの声は聞こえてこない。

気になって横を向けば、穏やかな寝息を立てて眠っているフィランの顔が見える。

「…」

その様子に穏やかな笑みを浮かべたフェローチェは、フィランを横にするとも自分もその隣に横になった。

そつと毛布を掛けて優しくフィランの頭を撫でる。

今日の負けはこの子にとって成長の糧になるだろう。

この涙は決してネガティブな物では無い。

だがこの先、本当の意味でフィランを傷つける物が現れないとも限らない。

もしそうなった時、私は何が何でもこの子を守りたい。

私ももつと強くならないといけない。

フェローチェにとつても、この旅は重要な意味を持っていた。

そうして決意を胸に秘め、フェローチェも眠りについた。

Days of Wine and Roses

「あちい…」

キキヨウシテイ、マダツボミの塔を訪れた後の事。

泊まった宿でシャワーを浴びたフィラン。

温まり過ぎてしまつて体がかなり熱を帯びている。

こういう時はいつもフレンドリッシュoppや自販機で買った水等を飲むことが多いが、今回はたまたま飲み切つてしまつていた。

「なんかあるかな…」

部屋の備え付けの冷蔵庫の中身を確認する。

飲んだものはチェックアウト時に精算すれば良い。

入っていたのはペットボトルの水、お茶、それとその半分くらいのサイズの缶の飲み物。

間にはレモンが描かれている。炭酸ジュースのようだ。

「ペットボトルは大きすぎるな…ま、風呂上がりだし炭酸もいいでしよー!」

缶を一つ取りプルタブを起こす。

プシュ、という音から爽やかさが伝わって来る。

「んつく。ふう…」

一口、二口と勢いよく流し込む。

「なんか…レモンっぽさ? ちょっと苦いな。」

独特の味わいに首をかしげながら缶をテーブルに置く。

「フェローチエ。」

「……」

風を取り込むための開けていた窓。

その窓の棧に腰かけていたフェローチエに声を掛ける。

「今日の赤髪の子、本当にポケモンを道具なんて思ってるのかな…」

切り出したのはさっきの話の続きだ。

「……」

フェローチエは一度立ち上がり、窓ではなく椅子に腰掛けてフィラ  
ンと向かい合う。

「そうだとしたら悲しいよね。私は貴方やみんなといて毎日楽しいけど、彼はそうじゃないのかな。それにポケモン達にも良くないし…」

「……」

「ね、あの子もそのうちポケモンと仲良くなってくるといいけどね…」

「……」

テーブルに置いたジュースを話の合間に飲む。

「ふう。ん、ほんとに。ね、フェローチエは私のこと好き?」

「……!」

2人でいるときに、フィランからそのようなことを言ってくるのは少し珍しい。



人前では無自覚惚気を炸裂させているが、2人きりの時にぐいぐい行くのはどちらかといえばフェローチエの方だ。

そのことに少しビツクリしたフェローチエはあることに気付く。ファイランの顔が少し赤らんでいる。

風呂上がりだからでは無い。何ならさつきよりも赤くなっている。そして缶に書かれている文字。

これは…

「ねえ。フェローチエ？」

そうこうしてる内にファイランは缶の中身をすべて飲み干してしまった様だ。

缶を捨てるために立ち上がったファイランは心なしか足取りが覚束ないでいる。

「ねえ。」

缶を捨てたファイランはフェローチエに後ろから抱きつく。

「……」

「ん？なんとなく。」

「……」

フェローチエはファイランに今日は早めに寝るように促す。

「じゃあ一緒にお布団いこ。」

そのままファイランに手を取られ、敷かれた布団に連れていかれる。

部屋のライトを落として、そのまま布団に座りこむ二人。

「えいっ！」

またしてもファイランがフェローチエに抱きつく。

「……」

なんだかんだでファイランに抱きつかれてフェローチエも嬉しそうだ。

ファイランの背中に手を回している。

ファイランが状態を少し離してフェローチエの顔を見つめる。

「フェローチエって綺麗な顔してるよね。」

「……」

「そうかな……」

フェローチエがフィランの黒髪を撫でる。  
背中まで流れる艶のある髪を手で梳いていく。

「……」

「ふふっ。一緒に来てくれて本当にありがとうね。」

毎日さ、一緒にいらられるだけでも凄い幸せだよ。私。」

「……」

「うん。ありがとう。」

そのまま、ドサツと二人で布団に倒れこむ。

ちようどフィランがフェローチエに覆いかぶさる形だ。

所謂、押し倒した、形になる。

「ずーっとさ、一緒にいてね。」

「……」

「うん。好きだよ。えへへ。」

二人の影が重なる。

「ん……」

いつかのお返し……！

って、あっ！」

今度はフェローチエがフィランの手を掴み、自分が上になる形に。

「……」

「ちよつと？…フェローチエ？」

あっ、ん……

違、そこは首だつて……」

夜は更けていく。

静まり返った夜の浜辺。

岩礁には穏やかに波が寄せて返す。

一人の少女とポケモンが岩かげに身を寄せ合っていた。

「ねえ。キズは大丈夫？」

「……」

「そっか。よかった。

一応、今日もキズぐすりと、オボンの実だけは持ってきたんだ。良かったらオボンのみだけでも食べて……ね？」

少女は木の実を差し出し、ポケモンが恐る恐る受け取った。

「……」

「ん。私は大丈夫……いつもの事だから……」

ポケモンが少女の腕を指さす。

少女の腕には痣が見える。

あたりが暗くなっているためよく見ないと気が付かなかったが、少女の全身にも複数の痣が見て取れる。

それから、夜の波音に隠れて二人はお互いのことを話していた。

「……」

「あなたも、一人なんだね……」

「……」

「私だってそうだよ……お父様もお母様も、私を見てる訳じゃない。私を愛してる訳じゃないの。」

「……」

「そ。だから私たち、似た者同士なのかも。お互い独りぼっちで、傷だらけ。なんだかおかしな話だけど。」

そういつて少女は笑う。

「さ、そろそろ私はいかないと……お父様に見つかったら大変だから……」

「……」

「うん…ねえ、また会えるかな。私たち、似た者同士友達になれると思うんだ。」

「……」

「ほんと？約束ね！」

そうして少女は来た道に戻っていく。

ポケモンもその場から姿を消した。

残ったのは黒い海と白い波、砂浜と岩だけ。

## 肆、黄金

ヒワダタウンのヤドンの井戸からロケット団を追い払ったファイランとヒビキ。

ガンテツとともに井戸から上がり、2人はガンテツの家に招かれていた。

「しかし、見事な働きやった!」

ガンテツとその孫と4人で机を囲みお茶をごちそうになりながら、今回の事件について話していた。

「でもファイランが来てくれて良かったよ。僕1人で4人に囲まれてたらやばかったかも。」

「どうだろ? あいつら大して強くも無かったし、1人でも楽勝だったかもよ?」

「なんや、嬢ちゃんはえらい大物やな!」

ファイランの発言にガンテツが笑い飛ばす。

ファイランとしてはもちろんそんなつもりは無く、ヒビキを正当に評価しての発言のつもりだった。

「それにしても、あのロケット団とかいう連中、なんのためにこんなことを…」

「あのランスとかいう男は“ビジネス”って言ってたけどね。」

「…さっきも言ったがロケット団はかつてレッドという少年に壊滅させられたはずなんやが、それがまた活動しているっていうのは…なんとなく悪い予感がするのう…」

「私たちも行く先で気を配っておきます。」

ガンテツの悪い予感。ただの予感ではあるがファイランも似たような物を肌で感じていた。

ポケモンに悪事を働く組織など、看過するわけにはいかない。

何よりも自分と仲間たちの安全のため、ロケット団を放って置くことはできないとファイランは心に決めた。

その後、ヒビキはガンテツに特製のボールを作って貰うために少し滞在することにした。

ガンテツの作るボールに全く興味がなかった訳では無いが、順番的にヒビキの後になるため時間がかかるのとファイラン自身あまりボールを消費しないため、ボールを作って貰うのはまたの機会にした。

ガンテツの家を後にしたファイラン。

外に出るとすっかり日も落ちていた。

「…調子よく今日バッジ2つゲット出来たら良かったのにな…」

思えば今日はなかなかのハードスケジュールだった。

キキョウジムに挑戦した後に、ヒワダタウンまで移動。

そこからロケット団とのひと悶着があった訳だ。

「そういうえば、キキョウシティから急いで移動してきたからお昼食べないや…」

思い出したかのように空腹を感じ始めたファイランは今日はここで休むことにした。

「どれ…こんな感じだったかな…」

火にかけて鍋をかき混ぜるファイラン。

シンオウで旅をしたときに得た知識を思い出し、久々のポフィンづくりに励んでいた。

きのみは買うことが出来たが、専用の鍋が無かったため似たような物で代替している。

自分が昼食を食べていないという事はポケモン達も同じこと。

そのままの状態でロケット団との戦闘もあったし、少し無理をさせてしまった。

せめてものお詫びに夕食後のデザートに、とポフィンを作ることにしたのだった。

「…よし、と。こんな感じかな…」

焼きあがったポフィンを皿によそってテーブルへ。

そしてポケモンたちに呼び掛ける。

「出来たよー。」

夕食の後に室内で各々過ごしていたポケモン達がテーブルの近くに集合する。

「どう？おいしい？」

勢いよくポフィンをほおぼるガブリアス。

なかなかの食いつきで出来栄えは問題なさそうなことが伺える。

エンペルトもロトムも喜んでくれている様で何よりだ。

「フェローチエはどう？」

「……………」

「それは良かった！」

フェローチエにも喜んでもらえている様で胸をなでおろす。

自分用に淹れたお茶を飲みながら、ポケモン達との時間を楽しむことにした。

「あ、ロトム！食べながら飛び回らないで！危ないよ。」

ガブリアスもゆっくり食べな。」

遅い時間ではあったが楽しいお茶会となった。

たまにはこういうのもいいな、と定期的に開催したいと思うフィランであった。

――

「なかなかの道のりだった……」

ヒワダタウンからウバメの森を抜け、34番道路を通ってコガネシティへ。

フィランはコガネシティの入り口にてぐったりとした様子で息を吐いた。

ヒワダタウンからコガネシティまでは、直線距離的には大した距離ではない。

だが、フィランをここまで疲弊させた原因が一つあった。

ヒワダタウンの西に位置するウバメの森だ。

ウバメの森は細い林道が入りくんだつくりをしており、近隣の町で

暮らす住人でも迷うことがある。

フィランはその坩堝に見事はまつてしまったところだ。

最終的にはポケモンたちの手も借りて無事に森を抜けることが出来た。

「それにしても大きい町だな。」

コガネシティはジョウト地方の中でも大きな町だ。

ラジオ塔やデパートなど様々な建物が軒を連ね、そこに訪れる人々の往来もかなりの数となる。

まさしくこの地方における経済の中心となる都市といった様相か。

「さて、まずはどこから行こうか。」

この町ではいくつか行きたい場所もある。

どこから行ったものかとマップを開いた。

「ありがとうございます。」

そう言い一礼する店員から買い物袋を受け取ったフィラン。

まず訪れたのはコガネ百貨店だ。

回復アイテムをはじめとするバトルで使うものやフィラン自身を使う生活必需品など、いくつかのアイテムをまとめて買いこんだ。

だが、ここにはこれ以上長居はできない。

うっかり家電のコーナーなど通った日には大変なことになる。

フィランの脳裏に思い起こされるトバリデパートでのひと騒動。

(デジャヴ…ロトムに気付かれる前にここから出ないと…)

エスカレーターに乗り、1階を目指す。

無事、何事も無くコガネ百貨店を出たフィランはほっと胸をなでおろす。

「またイタズラされちゃたまらないからね…」

ただでさえここにたどり着くまでに体力を消費しているのだ。



買い物くらい気兼ねなくさせて欲しい物だ。

何はともあれ目的の一つは達成した。

ここで疲れている暇はなく、次の目的地に向かう。

次こそが大本命。

「ここがジムか…」

そう。ジムへの挑戦である。

ジョウト地方で3つ目となるジム。

この町に来た一番の目的を果たすためにファイランは建物に足を踏み入れた。

コガネジムの内部はピンクの床と水色の壁がポップに映えた内装をしている。

そんな中で全くポップでない戦いが繰り広げられていた。

「フェローチェー！インファイト！」

幸いなことに（敵から見れば不幸なことだが）、コガネシティはノーマルタイプのトレーナーが集まるジム。

つまりフェローチェのかくとう技が非常に有効なのである。

並み居るトレーナー達をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、迷路のような壁の間をくぐり、時には通路となっている壁の上を渡り、とうとうジムリーダーのもとにたどり着いた。

「はい！うちがアカネちゃん！」

なんや、あんたすごい勢いで進んできたみたいやけど。

うちに挑戦するん？言うときくけどうち、めっちゃ強いでー！」

「もちろん！挑戦しますとも。」

ジムリーダーの名はアカネ。

先ほど元気な自己紹介で自ら宣言した通りの強さを持ち、その可愛らしいルックスと明るい性格とは裏腹に何人もの挑戦者をはねのけてきた実力者だ。

だが、今日は相手が悪かった。

その明るさが最後まで保たれることを祈るばかりである。

「フェローチエ！決めてー！」

フェローチエの脚技が華麗に、かつ苛烈にミルタンクを襲う。

「ミルタンクー！」

「……」

技を決めたフェローチエはまたしても華麗に翻り、ファイランの横に立って一息つくような仕草を見せる。

「お疲れ様。」

技を受けたアカネのミルタンクはすっかり伸び切っており、アカネの言葉を待つまでも無くこちらの勝利を確信した。

ファイランはフェローチエに労いの言葉を掛けてアカネの反応待つ。

「う、うわーん！」

「え？」

すると、予想外の反応が帰ってきた。

アカネが声をあげて泣き出してしまったのだ。

「つぐすん…ひっぐ…ひどいわー！」

「ええ…」

自分も勝負に負けて人前で泣いたことのある身なのでなんとも言えないが…

この状況には少し戸惑ってしまう。

「わーん！」

するとアカネがどこかに飛び出して行ってしまった。

「マジか…バツジは？」

「あーあ。アカネちゃん泣かしちゃったのね。」

呆然と立ち尽くしているファイランに、ジムトレーナーの一人が状況を察してか声を掛けてきた。

「な、泣かしたというか…」

「大丈夫大丈夫。いつもの事なのよ。アカネちゃん、勝負に負けると泣いちゃうの。」

しばらくしたら泣き止んで戻って来ると思うから。ちよつと待つてる?」

(いつもの事なのか…)

内心、戸惑いが強くなつた気がしなくもないが、そのことを聞いて一先ずは安心した。

「いえ、探してきます。いいですかね?」

「ええ!大丈夫だと思おうわ。」

一応そつとしておいたほうがいいのかは確認して、探しに行つてもいいとのことなのでそうすることにした。

道行く人々にジムリーダーを見なかつたか、ピンク髪の泣いてる女の子を見なかつたか、聞き込みをして後を追う。

そうしてたどり着いたのがここ、ラジオ塔と呼ばれる建物だ。

「いるかな…」

ラジオ塔はある種この町の観光スポット的な面もあり、ジム戦の後に訪れる予定ではあつたので少し都合は良かったりする。

内部を見渡して、カウンターの奥に見覚えのあるピンク髪が見えた。

「あ、いた!アカネさん!」

「あ、さっきの挑戦者の子…どないしたん?」

「その、バッジを貰いに…」

「あ、そうやった!」

アカネはもう落ち着いている様子ではあつたが、バッジのことはすっかり忘れていた様だ。

「ごめん、忘れてた。はい!これがレギュラーバッジや。」

「ありがとうございます。」

僅かなトラブルこそあつたもののレギュラーバッジを手に入れる

ことが出来たファイラン。

せつかくだしこのまま少しラジオ塔の中を見て行こうかなどと考えていると、カウンターから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「正解です。それではこのラジオカードを差し上げます！」

「ありがとうございます！」

そこにはカウンターでクイズに挑戦するヒビキの姿が。

「ヒビキ君じゃん。」

「あれ、ファイラン。何してんの？」

「いや、そっちこそ」

素っ頓狂なヒビキのセリフに思わず吹き出してしまいなながらも質問し返す。

「なんか、クイズに挑戦すると景品が貰えるっていうからやってみただんだ！」

で、ファイランはどうしたの？」

「いや、ちよつと色々あってね。まあ少し観光って感じかな。」

「なんや、知り合い？」

二人のやり取りを見ていたアカネも会話に参加してきた。

「そうなんです。こっちはヒビキ君。私と同じようにジムバッジを集めてるトレーナーです。」

「そうなんや！じゃあこれからうちのところって感じ？」

「え、うちのって…？」

アカネの言葉の意味が一瞬わからずファイランに尋ねるヒビキ。

「あ、うちアカネちゃん！コガネジムのジムリーダーや！」

「えー！…ってことはファイランは…」

「もうバッジ貰ったよ。」

「やっぱり！僕も早くいかなきゃ！」

「そういう事ならうちも戻らな。じゃ、ファイランちゃんやったっけ？  
またね！」

「なんだか、元気な人達だなあ……」

慌ただしくジムに向かった二人を見送り、そんな感想を一人こぼしたフィランであった。

## 伍、挑戦

ヒビキとアカネを見送った後、ラジオ塔を少し見物していくことにしたファイラン達。

ラジオ塔の2階ではガラスの向こうでラジオパーソナリティがマイクに向かって何やら話している。

「あ、ラジオ録ってるよ。あそこ。…行っちゃだめだよ？マジ。」

ラジオの電波か、機材か何かが気になったのか、何やらそわそわしてるロトムに注意喚起する。

うっかりラジオの録音や放送にトラブルを引き起こしてしまったら大変だ。

今度は弁償ではすまない。

流石にファイランの本気も伝わったのか、ロトムもそれ以上何かをする気配もなく、静かにラジオの収録を見学することができた。

「なーんだ、塔って言っても2階までしか上がれないのか。」

少しラジオの収録を見学した後、更に上の階にも行ってみようとしたのだがどうやら一般客は2階までしか立ち入れないらしい。

せっかく塔というなら上に行ってみたかった物だが、入れない物は仕方ないので諦めることとした。

「さて、じゃあ戻ろっか。ごはん食べよ。」

日も暮れてきたところで今日はこの町で一泊することに。

宿をとるためにもラジオ塔を出ようとしたところ、

「あ、ファイラン！まだいた！」

「ん？ヒビキ君。今日2回目だね。」

何やらヒビキが少し慌てた様子でこちらに向かってきた。

「僕とバトルしてよ！」

「ん、いや。」

何やら急な展開だが特に断る理由もなく、あっさりと承諾するファイラン。

「え、あ、ありがとう…」

「どうかした?」

「い、いや、あつさりO?・されるもんだから…」

行つといてただけど普通はもつと理由とか聞かない?」

勝負を仕掛けたヒビキ自身もあまりの展開に驚いている。

「まあ、普通に道にいるトレーナーもいきなり勝負仕掛けてくるしさ。そういうもんかなって。」

「…確かに。」

ファイランのいうこともごもつともである。

「まあでも、一応理由は聞いておこうかな。」

ヒビキ自身がそのように言うという事は、何か理由があるのだろう。

せつかくなので聞いておくことにした。

「なんだよそれ…」

まあ、大したことじゃないんだけどさ、僕も3つバッジを手に入れたしどれくらい力が着いたか確かめたいんだ。

ファイランには初めて会った時に一瞬でやられちゃったから、いまならどれくらい戦えるのかなって思ってたさ。」

「なるほどね。そういうことならー受けて立ちましょう!」

別にどういいうわけでもだいたい受けて立つのだが。

町の往来でいきなりポケモンバトルを始める訳にもいかなかったため、

一旦町のはずれの草むらの方へやってきた二人。

「よし!勝負だ!」

実力を確かめる。なんて言うてはいたが内心はどうやら本気のようにうだ。

そうでないかと張り合えないしヒビキが手抜きで立ち向かってくるとも考えていなかったが。

「行くよーエンペルトー!」

ファイランの最初のポケモンはエンペルト、対するヒビキのポケモン

は、

「モココー！」

でんきタイプの羊のようなポケモン、モココだ。

「でんきシヨックー！」

みずタイプのエンペルトに大してでんき技は効果抜群だ。

エンペルトはこのジョウト地方に野生で生息していないポケモンだ。

にも関わらず的確に効果抜群を狙ってきたのはやはり天性のセンスといったところか。

「エンペルト、ラスターカノン。」

だが、センスだけではどうにもならない事もある。

エンペルトはでんきシヨックを無理やり受けながら銀色の光を翼に集める。

レベルの差があるせいも、効果抜群の技といえど大きなダメージとはなっていない様だ。

そのまま放たれた光弾がモココに直撃する。

「モココー！」

エンペルトのラスターカノンを受けたモココは一撃で戦闘不能となってしまう。

ヒビキはモココをボールに戻し、次のボールを構えた。

「やっぱり強いな、ファイランは。」

でも僕もただやられてるだけじゃないよー！」

ヒビキの次なる手はヘラクロス。

「ヘラクロス！かわらわり！」

ヘラクロスのかくとう技がエンペルトの鋼の装甲を打ち砕こうと迫る。

流星のエンペルトもこれにはダメージを受けたようで少しよろめく。

「よしーそのままもう一度！押し切れー！」

それをいいことにこのまま勝負の流れを自分の物としようとする。

「エンペルト！アクアジェットで無理やりはねのけてー！」



先ほどのかわらわりのダメージを耐えつつ、アクアジェットでヘラクロスを押しつけ素早く距離をとる。

これによりヘラクロスはかわらわりを当てるためにもう一度エンペルトに近づかなくてはならなくなった。

「エンペルト、今のうちに戻ってきて。」

その隙を利用させてもらう。

エンペルトをボールに戻し、ポケモンを交代する。

「ガブリアス。行ってきて。」

交代で出てきたガブリアスにヘラクロスのかわらわりが命中するが持ち前の耐久を活かして技を受け止めなる。

「ストーンエッジ！」

ファイランの声に反応してガブリアスが雄たけびをあげる。

直後、ガブリアスの目の前、ちょうどヘラクロスの真下から鋭い岩が隆起した。

「っ！ヘラクロス！避けて！」

かろうじて後ろに下がる事で直撃を回避したヘラクロス。

そこに追い打ちをかけていく。

「ガブリアス！ほのおのキバ！」

自分で出した岩を飛び越え、ガブリアスは一段高い所からヘラクロスに襲い掛かる。

ヘラクロスは上からの攻撃に今度こそ避けることができず、思い切り噛みつかれてしまう。

効果抜群のほのお技を受けて、ヘラクロスも戦闘不能となった。

「交代なんてありかよ!?!」

「ありもありだよ！」

実際、シンオウリーグでは何度も交代しながら戦うシーンもあった。

交代を絡めながら戦うのはファイランの十八番のようなものか。

「次だ！マグマラシー！かえんぐるま！」

「ガブリアス。もう一度くらいなら攻撃、受け止められるよね？」

「グオウ！」

力強く応えるガブリアス。頼りになるポケモンだ。  
そうして、炎を纏って回転突進してくるマグマラシを両手で受け止め、めまらずに回転を止める。

完全に回転が止まったマグマラシをそのまま地面に叩きつける。  
「流石！ わかつてんじやん！ ガブリアス、じしん！」

かつても似たようなことをしたことがある。  
そのためガブリアスもどうするべきかわかっていたようだ。  
地面に叩きつけられ倒れ伏すマグマラシにじしんが襲い掛かる。  
こちらにも効果抜群、マグマラシは戦闘不能となった。

「…僕、とんでもないポケモンに腕掴まれてたんだな。」

初めてあった時のことを思い出しヒビキは少し青ざめる。

「大丈夫だよ！ 流石に加減してたって！」  
当たり前だ。

「これが最後のポケモン！ 頼んだ！」

ヒビキはマグマラシをボールに戻し、最後のボールを放った。

「最後なら行こうか、フェローチェ！」

フィランもここで再びポケモンを交代させる。

せつかくこの地で出来たライバルと初めて全力で戦うのだ。

一番の相棒を見せつけたくなった。

「出たな。フェローチェ。」

ヒビキはフェローチェに一瞬でヒノアラシが倒された時のことを思い出した。

あの時は姿すらまともに追うことが出来なかった。

「そう。これが私の最高のパートナー。ヒビキ君にも自慢したくてね  
！」

フィランは自信満々に言い放った。

最高のポケモンだと心から思ってる、故に負ける気がしないので只の自慢になってしまふな、と驕りでもなく本気で言っている。

対するヒビキの最後のポケモンはトゲピー。

ウツギ博士から託されたタマゴから帰ったポケモンだ。

「こうなったら最後の手段だ。僕は賭けに出るぞ。」

なにやらヒビキは奥の手を隠し思っている様だ。

「行くぞー！トゲピー！メロメロ！」

トゲピーは可愛らしくフェローチエにアピールしている。

一方、フェローチエは

「……」

全く歯牙にも掛けない様子だ。

「ヒビキ君…フェローチエにメロメロは効かないよ。」

フェローチエは正確には性別が不明なポケモン。メロメロは通用しない。

まあ仮に性別があつたとしてもこのフェローチエには通用しないだろうが。

「嘘?!」

「マジ。フェローチエ、とんぼがえり。手加減してあげてね。」

勢いよくフェローチエがトゲピーに襲い掛かりファイランの手元に戻る。

トゲピーは戦闘不能。勝負はファイランの勝ちとなった。

「くそ。やっぱりファイランには勝てないか。でもいつか追いついて見せるからな！」

「いつでも受けて立つよ。」

負けてなお闘志を燃やすヒビキ、更に強くなってファイランの前に立ちはだかる事だろう。

ファイランもそれが楽しみで、再戦をお互いに約束した。

—

「…うん。だから交代は相手の出す技をある程度予想しながらやると

効果的じゃないかな。」

「なるほどな…」

夕食を済ませた後、ファイランは宿泊する部屋にヒビキを招いてバトルについての談義をしていた。

「特に、私の場合だとエンペルトにでんき技って撃たれやすいから、そこでガブリアスに交代して受けるとかかな。」

「…そうすれば相手の技も無効にしながらこっちは有利なポケモンを出せるってことか。」

一件、会話だけを聞いている分には何らおかしな所は無い。

だが、ファイランには先ほどから気になってしょうがない点があった。

「……」

(なんでフェローチエは私の腕をずっと掴んでるんだろう…)

ヒビキと向かい合って座っているファイラン。そのファイランの腕をフェローチエが両腕でしつかりとホルドしている。

時々頭を肩に預けるような場面もみられる。

(人前でそんなに甘えられたらちよつと恥ずかしいよ…)

「ファイラン?聞いてる?」

「ん。ああごめん、なんだっけ?」

その状況に気を取られ、ヒビキの話も聞き洩らしてしまっていた。せつかく来てくれているのだ、これは良くない。と頭を切り替える。

すると、今度はフェローチエがファイランの後ろに周り、背後から手を回している。

後ろから抱きついて頭をファイランの肩に載せている。

流星に気になったのかファイランはフェローチエに声を掛ける。

「…どしたの?…流星に人前だからちよつと恥ずかしいんだけど…」

「前もそうだったけどすごい仲いいよね。いつもそんな感じなの?」  
いままでその様子を静観していたヒビキも気にはなっていたよう

だ。

「えっ?! うん。どうだろね?」

(い、言えない。いつもはこんなものでは無いなんて言えない…)

「でもすごいよな。それだけポケモンと信頼しあってるって事だろ?」

「僕もマグマラシ達ともっと仲良くなれるように頑張らないとな。」

「そ、そうだね…」

(ヒビキ君、多分勘違いしてるよね…普通にポケモンとトレーナーの範疇のスキンシップだと思われてるかな。)

まさかヒビキからそのことについて触れられると思ってなかった  
ファイランは同様を隠し切れずにいる。

ヒビキからしてみれば特に他意の無い質問だったのでファイランの  
心情は察するはずもないが。

「あ、もういい時間だね。僕はそろそろ失礼しようかな。」

「う、うん。わかった。またね。」

ヒビキを部屋の入り口まで見送ろうと思ったがフェローチエが離  
してくれなかったためその場からの見送りとなってしまった。

「…フェローチエ。どうしたの? 人前であんなにくっついてきたこと  
今まで無かったのに。」

「

「……………」

「え? そんなこと心配してたの?」

「どうやらフェローチエはファイランが男性を部屋に招くというのが  
心配でそうしていたらしい。」

「大丈夫だよ。私が好きなのはズーっとフェローチエだけだよ。」

「……………」

「それも大丈夫。だって何かあったらあなたが守ってくれるでしょ  
?」

「……………」

フェローチエはフィランに抱きついてそのままベッドに二人でダイブ。

「ふふ、今日は甘えん坊だね。」

そうして少しからかってやると、フェローチエ照れ隠しのようにフィランの頬を軽くつねる。

「いひゃい。ひやめて。」

そのまま手を軽く引つ張って離れたフェローチエ。

「……」

「ずっと一緒って約束、私は死んでも破らないからね。大丈夫だよ。」

「……」

「うーん、破らないからもしもの話をしてもしょうがないんじゃないかな。」

「……」

「あ、なんだとお？」

楽しい二人の時間はもう少し続きそうだ。

## 陸、幽霊

コガネシティを後にし、エンジュシティに到着したファイラン。とりあえずポケモンセンターでポケモンたちの回復をしてもらい、ジムに挑戦するかなどと考えていた時、ある建物がふと目に付く。

「エンジュおどりば…歌舞練場…?」

何やら聞きなれない呼び名の施設がポケモンセンターの近くにあるのを発見した。

「なるほどね。おどりばってそういうこと。」

少し調べた所、中ではまいこはんと呼ばれる踊り子達が踊りの稽古をしているらしく、それを見物することもできるらしい。

踊り場というのは階段の途中にある他の段よりも面が広い場所の事では無かったのだ。

「せっかくだし少し見てみよっか。」

なるべくこの土地にしかない物はその目で見て行きたい。

…  
そう思いファイランはジム戦の前に寄り道をするに決めたのだが

中に入ってみると、黒地に大きく【R】と書かれた服を来た男が舞台上上がり着物の女性に難癖をつけている。

「あれがまいこはん。じゃないよね…絶対。」

あの黒服には見覚えがある。

ヒワタウンでヤドン達のシッポを切って金儲けをしようとしていた所をファイランとヒビキが退治した連中。

ロケット団である。

恐らくここでも何か悪だくみをして周りの人々を困らせているだろう。

何をしているのかはわからないが、ガントツとの約束もあるし、何より放っておけばこの場にいる人たちにも迷惑になる。

あまりでしゃばるのは良くないが、周りにこれを対処しようとしている人間もいなさそうに見える。

仕方ないのでまずはあいつを壇上から引きずり下ろすことにした。「その人、ロケット団ですよ。何を企んでるのか知らないけど、迷惑ですよ。」

舞台に近づき壇上のロケット団員に声を掛ける。

もしもこれがそういう演目だとしたらとんでもない事だが、恐らくそうでないことは観客の反応からも伺える。

「あ、なんだてめーは？俺に何か指図しようってならここで俺をポケモンバトルで倒してから言うんだな!!」

なぜそうなるのかは全くわからないが、どうせそんな展開にはなるだろうと思っていたファイランはため息を付きながら壇上に上がる。

本来ここは踊りを修練、披露する人達のための舞台に自分なんか上がるのは場違いも甚だしい事だがやむを得ない。

「すいません、お邪魔しちゃって。いま追い出しますので少し避難しててください。」

壇上の端っこに追いやられてしまったまいこはんに小声で声をかけて下がっているように促す。

「お、まさか本当に上がってくるとはな！良いぜ、沢山の見物客の前でボコボコにしてやるよ！」

「何なんですか、あなた。それにボコボコになるのはあなたのほうです。」

「言ってる！出てこい、ドガース！」

ロケット団員のポケモンはドガース。対するファイランは、

(ここはあまり広いわけじゃないし周りに人もいる。コンパクトに片付けないと。)

「ロトム、頼んだ。」

ガブリアスやエンペルトでは周りの施設や人に被害が出てしまうかもしれないとロトムを繰り出す。

「ロトム、良く狙って、でんじは。」

「ドガース！スモッグだ！」

ロケット団員がドガースに指示を出す。

だが、ロトムのほうが動きが早く、ドガースが動く前にでんじはを



放ち、命中させていた。

「おい、ドガース！どうした！スモッグだ！」

麻痺して動けないドガースに激しく言葉を飛ばすロケット団員。

「ロトム、エアスラッシュ。周りの人とか物には当てないようにね。」

万が一エアスラッシュが外れて周りの人にでも当たったら大問題だ。

故にでんじはで麻痺させ、確実に命中させる。

「フユウ！」

もちろん、と声をあげたロトム。

しっかりと狙いを定めてドガースにエアスラッシュを放った。

その一撃でドガースは戦闘不能に、ロケット団員は悔しそうに拳を握りしめながらドガースをボールに戻した。

「くそっ！」

「私の勝ちですけど、さっきの自分の言葉覚えます？」

「畜生！覚えてやがれ！」

これでおとなしく出て行ってくれるだろうと言葉を掛けるフィラに、典型的な悪党のような捨て台詞を吐いてロケット団員は逃げに行った。

「はあ。…ロトム、お疲れさま。ありがとうね。」

ロトムをボールに戻す。

「すみません、騒がしくしてしまつて。お怪我とか無いですか？」

舞台の端っこに避難していたまいこはんに声を掛ける。

「おおきに。うちは大丈夫です。あんさんは…」

「良かった。私はフィランって言います。」

たまたま通りがかつたんですけど、あのロケット団って連中、前にも他の所で悪さしててそれで放っておけなかったのよ。

軽く状況を説明し他のところでも悪さをしているかもしれないから見かけたら気を付けてもらうようお願いをした。

その後周りにいた人たちからもお礼やバトルのことについて声を掛けられ、少し恥ずかしくなつてしまひ足早に歌舞練場を後にした。

「…別に私が悪い事したわけじゃないのに少し居辛くなっちゃったよ。」

本当に迷惑だなあの連中…」

周りの人も悪気があったわけではなく、まだまだ子供の女の子が得体のしれない男にバトルで勝ったことに興味があっただけなのだろう。

だからこれは全部あのロケット団のせいなのだ、と自分に言い聞かせてジムに挑みに行くことにした。

「うわ、くらっ…」

エンジュジムに入ったファイランはそのあまりの視界の悪さに思わず声をあげた。

ジム内は全体的に暗く、通路の先からうっすらと明かりがさしているのが見える。

とりあえずその明かり目指してみることにしたファイラン。

薄暗い通路を歩いていくうちにあることを思い出した。

「そういえばロトムと初めてあった森の洋館も結構暗かったよね。」

そう、ロトムと出会った日のことを思い出していた。

「あの時はまだエンペルトはポツタイシだったよね。」

なんかあの時すごい慌ててたじゃん。あれなんだったの?」

ファイランはエンペルトが森の洋館で体験した恐怖を知らない。

故に何のことかいまだにわかっていないのだがエンペルトからしたら言葉にするのも嫌な思い出らしくなかなか話してくれない。

「ふーん。まあ言いたく無いなら無理にはとは言わないけどさ。つと。」

そんな雑談もつかの間、先ほどから見えていた薄明りのもとにたどり着いた。

そこでは何やら雰囲気ありげな老婆が待ち構えていた。

因みにその薄明かりの正体はその老婆が持つろうそくの明かりだったようだ。

「私たちのポケモンにダメージを与えられるか？」

「そう言い放ちいきなり勝負を仕掛けてきた老婆にファイランも応戦する。」

「ロトム。連戦で悪いね。今日は出番多めかも。」

先ほどの歌舞練場に残きここでもロトムの登板となった。

相手の繰り出したポケモンはゴース。

ロトムはフォルムチェンジしているがもともとゴーストタイプのポケモン、故にシャドーボール等のゴースト技を使うことができる。

「ロトム、シャドーボール。」

ゴーストタイプの時よりは威力が出ないが代わりにゴースト技で効果抜群を取られないというメリットもある。

そういった点からも今日はロトムの出番が多めになりそうだ。

その後もロトムを中心に、少し疲労が溜まりそうであればエンペルトやガブリアスに交代しながら進んでいった。

「…暗いな。」

道中のトレーナー達はなぜか勝負が終わると持っているろうそくを吹き消してしまい、後ろはもう真つ暗となってしまうている。

だが、それももう少しの辛抱だろう。

この先には一際強い明かりが見える。

暗闇の中を進み、とうとうその場所へ。

そこには紫のバンダナとマフラーをした金髪の青年が立っていた。

「よく来たね。」

ここ、エンジュでは昔からポケモンを神様として祀っていた。

そして真の実力を備えたトレーナーの前に伝説のポケモンは舞い降りる。そう伝えられている…

僕はその言い伝えを信じ生まれたときからここで秘密の修行をしてきた。

そのおかげで僕は他の人には見えないも見えるようになった。

僕に見えるのはこの地に伝説のポケモンを呼び寄せる人物の影…

僕はそれが自分自身だと信じているよ！

そしてそのための修行、君にも強力してもらおうよ！」

「はあ…そうですか…まあ私はバツジを貰わないといけないので負けませんけどね！」

まさしく唐突な自分語りである。

伝説のポケモンがどうか、知ったことでは無いがバツジのためにも負ける訳には行かない。ただそれだけである。

「ゴース！」

「ロトム、あとちよつとだ。頑張つて！」

そのためにもロトムにはもう少し頑張つて貰わねば。

「ロトム、シャドーボール。」

「ゴース、あやしいひかりだ。」

ゴースがあやしいひかりの予備動作をする。

だが、ロトムは既にシャドーボールの形成を完了している。

それをそのままロトムが放つ。

あやしいひかりを準備していたゴースがそのことに気付いた時には既に遅く、目の前までシャドーボールが迫っていた。

「ゴース！」

シャドーボールは見事命中。

ゴースは一撃で戦闘不能となった。

「…次だ！ゴースト！」

マツバが次のポケモンを繰り出す。

「ロトム、まだまだ行けるよね？」

「フューウ！」

いつもはやんちゃなロトムもこういう時はその元気がメリットになっている。

まあ、ファイランの手持ちにこの程度で音を上げるやわなポケモンはいないが。

その後、ゴーストが2体続いたがロトムの快進撃が止まらず連続で

撃破。

ゴーストタイプにゴースト技で勝ち、お株を奪ったような状況になった。

「いやまだだ！僕は信じているよ！ゲンガー！」

マツバはどうやら最後のポケモンのようだ。

繰り返したのはゲンガーだ。

「ゲンガー！さいみんじゅつだ！」

「うわ！ロトム！避けて！」

さいみんじゅつ。

食らってしまえば最後、しばらくは眠り続け大きな隙を晒すことになる凶悪な技だ。

ただし強力な効果を持つが故か、当てるのが少々難しく外すとその分自分の隙を作ってしまう。

とはいえ当ててしまえば大きくアドバンテージを作る事のできる技だ。

これを貰ってしまう訳にはいかないと慌ててロトムに指示を出す。

ロトムにもそれは伝わっていたのか、しっかりとさいみんじゅつを躲し、指示していないシャドーボールの準備までしている。

「全く、最高だね。シャドーボールだ！」

直後、ゲンガーにシャドーボールが命中。

ゲンガーは何とか踏みとどまろうとしたが、あえなく意識を手放した。

こうして、エンジュジムでもファイランは勝利を収めた。